
ラブ※コメ

チキン☆サラダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブ※コメ

【Nコード】

N79130

【作者名】

チキン☆サラダ

【あらすじ】

放課後僕は意を決して好きな先輩を呼び出した！

告白は成功！！！！と思ったら先輩は勘違い。

お米を愛する先輩とのドタバタラブコメディ。

プロローグ

僕は今、夕日の差し込む教室で女性と向き合っていた。この教室には僕とその女性しかない。向き合っている女性は田中米という名前。前で僕の2つ上の先輩だ。

「話って何かな？」

田中先輩は、僕が話しかけるのを待ちくたびたように、向こうから話しかけてきた。そりゃそうだろう、僕が呼び出したにも関わらず緊張から何も言えないまま、もうだいぶ時間が経ってしまったのだから。

「あつ、えっとその……」

僕は、このきっかけによりやっと声を出す事ができた。このシチュエーションから解ってもらえると思うが、僕は今まさに田中先輩に告白をしようとしているのだ。

「僕……。すすすすすすすす、好きなんです」

やっとの思いで告白をする事が出来た。自分で声を制御出来ず、教室中に響き渡るような大きな声を出してしまった。そして、恥ずかしさのあまり僕は田中先輩の顔を正視する事が出来なかった。後は、田中先輩がどんな反応を示してくれるかが問題だった。その時田中先輩が口を開いた。

「そう……。好き……。なんだ。私も好きだよ」

正直この答えは予想外だった。田中先輩は僕と学年も違うし僕の事を知らないと思っていた。だから、どんなにいい返事でも友達から始めましょう、という答えだろうと覚悟していた。それが…僕の事を好きだって？この言葉を聞いたとき僕は天にも昇るような気持ちになった。

「好きなんですか？」

こう、冷静に返しているつもりでも僕の顔はニヤニヤを隠せていないだろう。

「うん。好きだよ。もう、こういう事は早く言ってくれればいいのにさ。それじゃ早速行こうか」

そう言うのと田中先輩は僕の手を取って走りだした。僕は田中先輩に手を握られた喜びで何も考える事が出来なくなっていた。田中先輩にされるがまま一緒に走り着いて行く事しかできなかった。そしてやっと田中先輩はとある扉の前で止まり扉を開けながら言った。

「ようこそ我がコメ部へ」

そう言って田中先輩は僕をその部屋に招きいれ椅子にすわらせた。未だによく状況が読み込めていず呆然としてみると、田中先輩が口を開いた。

「改めてようこそ、我がコメ部へ。まずは自己紹介ね。私は部長の田中米よ、よろしくね。米って書いてマイって読むのよ」

と、僕に自己紹介をしてきた。僕はこの人に告白をしようとしていたのだ。勿論名前なんて最初から知っていた。というか：コメ部ってなんだ？

「えっと、コメ部について説明するわね。まああなたもだいたいのは事は知っているとおもうけど、この部活は米を愛する人達が集まって活動しているのよ。今日は遅くなってもう他の部員は帰っちゃったみたいだけど、私のほかに3人の部員がいるのよ。ちゃんと仲良くするのよ」

そういうと、田中先輩は僕のおでこを指で突っついてきた。こういった行動を好きな人にされるのは嬉しいはずなのに、この時の僕は混乱していてそういった感情を感じることは出来なかった。というか、僕はいつ田中先輩に米が好きなんていったのだろうか？僕が好きだと言ったのは田中先輩のはずなのに。

「それじゃ今度はあなたが自己紹介してくれるかしら？」

「あっ、はいえっとあつとその：。ぼ、僕は1年の古河大地っています」

急に話を振られ、しどろもどろになりながらもなんとか、自己紹介をする事が出来た。というか、先輩も僕の事を好きだと言ってく

れたのだから僕の事を知っているのではないのだろうか？それなのに何故自己紹介なんてしなくちゃいけないのだろうか…。

「そっか、古河君っていうのね。大地なんてとてもいい名前じゃない。大地は全ての母親よ。大地が無いとお米だって育たないんだからね。ところで、さっきの告白なんだけど…。」

きた。今までの田中先輩の反応に心配していたが、ちゃんとさっきの僕の言動を告白だと認識していてくれたようだ。

「あんなに情熱的にお米への愛情を伝えてくれるなんて思わなかったわ。あなたのお米に対する情熱伝わったわ。あなたを我がコメ部へ迎えたいと思います」

うんうん。僕の情熱的な告白をしっかりと受け取ってくれたようで何より…。ん？お米に対する愛情だって？いつ僕はそんな物を田中先輩に伝えたというのだろうか。僕が伝えたのは田中先輩に対する愛情だけ……。この時になって僕はやつとある答えにたどり着いたのだった。そう田中先輩は僕からの告白をお米への告白と勘違いし、コメ部への入部希望だと勘違いしているのだという事に。

僕の学生生活はここから変わり始めたのかもしれない。いや、田中先輩に惚れてしまった時点で変わっていたのだろうか。

一章 一部

「よう。昨日どうだったんだよ？」

僕が教室に入り自分の席に着くと、友人の河内浩紀が声をかけてきた。こいつとは幼稚園の頃からの腐れ縁である。顔はいい部類に入ると思うのだがどっちかというところ三枚目の部類に入る男である。

「コメ部に入部したよ」

僕は鞆を机の横に掛けながら、何事も無いように答えた。

「コメ部に入部？ お前昨日は田中先輩に告白したんじゃないのかよ」

昨日田中先輩に告白した事を知っている河内としては当然の疑問を僕に投げかけてきた。なぜそうなったのか一番知りたいのは多分僕だろうが…。

「まあその、なんだ。お前田中先輩がコメ部っていう部活の部長だって事は知ってるか？」

僕は河内にだけはちゃんと説明しておこうと思い昨日の話を始めた。

「ああそれは知ってるよ。お前まさか好きな人がどんな部活をしているのか知らなかったのか？」

「うっ、知らなかったんだよ」

最初知っていたと虚勢を張ろうとしたが河内に嘘を付く気にはなれなかった。

「まあお前の田中先輩への惚れ方は一目惚れだったもんな。相手の事を知る時間もなかったか」

そう言うと、河内はわざとらしく慰めるように僕の肩に手を置いてきて何かを納得するようにうんうんと頷いた。

「で、なんでお前は告白をしないとコメ部に入る事になったんだ？ 付き合う条件として部員の少ないコメ部に入部しろとも言われたのか？」

「田中先輩はそんな交換条件を出して付き合うような人じゃないよ！」

僕は、好きな人が侮辱された様な気がして思わず語気を強め思わず椅子から立ってしまった。クラスメイトの視線が僕に集まるのを感じ僕は冷静さを取り戻し、愛想笑をしながら椅子に再度座りなおした。一瞬静かになった教室は徐々にざわめきを取り戻していった。

「ごめん。ちょっと興奮してしまった」

「いや、俺こそごめん。悪い冗談だったよ」

そう言ってお互い笑いあった。

「いや、昨日ちゃんと田中先輩に告白はしたんだよ」

「うんうん。それで答えは？」

「コメ部への入部許可」

「いやいや、だからどうしてそうなるんだよ」

河内は大げさに椅子から滑り落ちるようなリアクションをとった。

「その間を説明してくれよ。お前って米そんなに好きだったわけ？
ってかお前の家って……」

「分かったちゃんと説明するからちょっと顔近付けろ。周りに聞か
れたくないからな」

さっきの騒動以降、クラスメイトが少なからずこちらに意識を向
けているのに気付き顔を近づけさせて小声で話し始めた。

「昨日はちゃんと『好きです』って伝えたさ。そしたら田中先輩、
俺が米の事を好きだと先輩に伝えたと思ったらしくて」

「つまりお前はコメ部への入部希望をわざわざ先輩を呼び出して言
ったと思われているわけだ」

「うん」

ここまで話を終えると河内は顔を離した。

「だあなんじゃそりゃ」

河内は、頭を抱え込みこれまた大きなリアクションをとりながら
言った。

「ちよっと変わっている人だとは思っていたがここまで変わってい

る人だったとわな。あつこれは別に先輩批判じゃなくお前の心情を察しての発言だからさつきみたいに取り乱さないでくれよ」

河内は俺を制するように手を僕の顔の前に出しながら言った。

「もう取り乱したりしないよ。クラスの注目を浴びたくないしね」

「それで、コメ部に入部するのか？」

「うん。まあ物は考え物だよ。今まで全く接点のなかった俺が憧れの田中先輩と同じ部活に入るわけだ。これは上手くいけば御近付きになれるかもしれないだろ」

これが僕の結論だった。正直僕は米の事には詳しくないが先輩と同じ時間を共有できるのはいい事だと考えた。まだ他の部員や部活の内容はよく分からないけど田中先輩と一緒にならなんでも楽しいはずだと考えたわけだ。

「まあ確かにな。もうお前の中で結論が出てるんだったら俺は何も言わないよ。せいぜい頑張ってくれたまえ」

「あつそれから早速今日の放課後から部活だから、今日から一緒に帰れないよ。ごめんな」

僕はニヤケながらそう言った。部活という形を通してでも、放課後の時間を好きな人と共有して過ごせる事に少なからず喜びを感じているのが思わず顔に出てしまったのだ。

「かぁ。男の友情というものはかくも儂い物なんだな。分かったよ、俺は一人寂しく帰りますよっ」と

河内は拗ねた様な言い方をしているが応援をしてくれているという事を僕はしっかりと分かっていた。

「ありがとうな。河内も早く好きな子見付けなよ」

そう言った瞬間にチャイムがなり、朝のホームルームを始めるために担任の谷口礼二先生が入ってきて僕達の会話は終了となった。

「それじゃ、今日の帰りのホームルームはここまでだ。日直帰りの

号令を頼む」

明日の連絡を終えた谷口先生はそう言った。

「起立。礼」

「さようなら」

日直の号令と共に僕らは挨拶を終え各々動き始めた。

「おう。皆気を付けて帰れよ。部活ある奴はおもいきり青春しろよ。遊んで帰る奴はおもいきり遊べよ」

谷口先生は生徒に帰り支度や部活の支度をしている生徒に向かってそう言った。

谷口先生は「礼二先生バイバイ」「また明日っす」等々声を生徒に掛けられているようだった。若くて生徒と歳も近いこの先生は生徒に人気があるのだった。（若いといってももう30近いのだが）

「河内それじゃな。俺も部活へ行くよ」

そう河内に挨拶し鞆に手を掛けた時だった。急に教室を後にしていた生徒の流れが止ったのだった。

「こんにちは。私はコメ部部长田中米という者だけど、うちの部活の新入部員古河大地君はいるかしら？」

そう言って教室から出ていた生徒の流れに逆らい教室へ入ってきたのだった。僕は呆然とその場に立ち尽くしていた。教室中の視線が僕に向けられたのは言うまでもない。ただ一人谷口先生の視線だけは、田中先輩に向けられていた。

「おいおい、田中さん急に低学年の教室に入ってきて大きな声を出したら皆ビックリしちゃうだろ？」

谷口先生は先生らしく突然の乱入者に注意した。しかし、いつもこの先生が注意する時とは口調も態度も違うようだった。

「あっこのクラスの担任って鮭だったんだ」

鮭？っとクラスに残っていた生徒全員の頭に疑問符が浮かんだが誰一人として疑問を口に出すことが出来なかった。

「米ちゃんここは学校だその呼び方をするんじゃない」

「何よ鮭だって今私のことを米ちゃんって呼んだじゃない。まあそ

の事はいいわ。大地君部活に行きましょ」

流石に今は二人のやり取りに注目が集まり僕に視線は集まっていなかったが最初に僕へ視線が集まった時に場所を把握していたのだろう。田中先輩は迷う事無く僕が立ち尽くしている場所まで歩いてきたのだった。

「いたいた。優しい部長が迎えに来てあげたわよ。早速行きましょう」

そう言うのと僕の手を取り歩き始めた。混雑していたはずの入り口付近も自然と道ができ田中先輩は悠然と僕を連れて教室を後にしたのだった。

「田中先輩教室に乗り込んでくるなんてどういうつもりなんですか」廊下を歩きながら僕は思わず語気を強めて言った。

「だからさっき言ったじゃないあなたを迎えにきたのよ。昨日は他の部員帰って顔合わせてないから知らない人の大勢いる部室に最初は入りづらいんじゃないかなって思ってたね」

「それはありがたいんですが……。もう少し方法を考えてくれるとちょっと嬉しかったです。廊下で僕が出てくるのを待つとか、部室のドアの所で待っているとかが方法あるじゃないですか」

そう言いながらも田中先輩が僕の事を心配してしてくれたのだと思おうと僕の心は嬉しい気持ちで満たされていた。

「あっ……。まあいいじゃないの。あなたがコメ部に入ったって事をあなたのクラスの人達に伝える事もできたんだし」

「今『あっ』って言ったでしょ。『あっ』って。もしかして何も考えずに乱入してきたんですか？」

「そんなはずないじゃないの。私は部長よ。部長はね色々な事を考えて行動しなきゃいけないの。そして私にはその力があるのよ」

田中先輩は口調はしっかりしていたが明後日の方向を向いて言った。

「まあいいですよ。確かに僕は人見知りなところがあるんで知らない人ばかりの所に一人で入るのはちょっと気が重かったですし」

これは本当だ。僕は人見知りなのである。だからこそさっきのクラス中から視線が集まる事に恥ずかしさを覚え田中先輩に文句を少しだけ言ったのである。

「ほらね。私の行動に間違いは無いでしょ」

田中先輩は歩きながら得意げに言った。2つ年上であるにも関わらずこういった動作にちよつと幼さを感じ可愛かった。

「ところで谷口先生の事を鯉って呼んでましたよね？」

恐らくクラスの皆が疑問に思ったであろう事を僕は田中先輩に聞いた。

「ええ呼んだわよ。鯉とは簡単に言うて親戚なのよ。で、昔から鯉って呼んでるの。なんで鯉って呼ぶようになったかは、その内話してあげるわね」

鯉の由来を聞いたかったのだが、本人からその内話すと言われてはこれ以上その話をせがむ訳にもいかずこの話題はここで終了となった。明日は僕がクラスメイトから質問攻めにあうんだろうな。

「ところで、大地」

田中先輩に急に名前を呼ばれて僕は驚いた。しかも呼び捨てだ。

「なんですか？」

「あなた今日は多弁ね。昨日はあんまり喋ってなかったみたいだけど」

言われてみれば確かにそうだった。いくら好きな人とはいえ田中先輩と喋ったのは昨日が初めてだ。と、というか好きな人だからこそ緊張してこんなに話せない。出会って二日目でこんなに親しげに話せるとは思わなかった。

「まあこれからコメ部の部員との初顔合わせだし緊張がほぐれていくのは良い事よ。まあ私を筆頭に皆いい人ばかりだから心配なくて大丈夫よ」

そう言って田中先輩は僕に笑いかけてきた。よくよく考えれば乱入からの流れで僕は田中先輩に話しかけそれで緊張がどこかに行ってしまったように思う。もし、この事まで考えて行動しているのだ

としたら僕はこの人には一生掛けても敵わない気がする。

そうこうする内に部室の前に到着した。

先輩がドアノブを回し、扉をあけるとそこには昨日初めて入った部室と全く変わらない様子が目に入ってきた。まあつまりまだ誰も部室に姿を現してなかったのだ。

「あれおかしいわね。まだ皆来てないみたいね。その内来ると思うからその時に紹介するわね」

田中先輩は自分の鞆を置きながら行った。

「あつ鞆は適当な所に置いといていいわよ。椅子は…はいこれ使つて。機能は適当なのに座ってもらったけど今日は他のメンバーも来るから椅子足りなくなっちゃうからね。場所は開いているとこに適当に座ってね」

部室の端のほうに畳まれて置かれていたパイプ椅子を僕に渡しなから言った。

僕は鞆を机の上に置きその前にパイプ椅子を置き座った。改めてこの部屋を見渡してみると、この部屋の本棚には農業関連の本が多い、そして机の上にはトラクターや田植え機械、コンバインのパンフレットや農薬の資料も置かれていた。とりあえず米に関係するもので溢れているようだった。なんと炊飯器まで用意されている。

田中先輩はパソコンを立ち上げて何やら作業をしているようだった。

「田中先輩何をしているんですか？」

僕は部室を見渡すのにも飽き何もする事がなかったので田中先輩に聞いた。

「ネットサーフィンよ。お米に関する新しい情報が無いか探してるの。んで、何か面白い情報があったらブログで記事を書いて世の中の人に知らせるのよ」

僕が田中先輩の後ろに回りパソコンの画面を見るとそこにはとある農機具メーカーのホームページが映し出されていた。

「昔はこのメーカー農機具の赤色に統一してたんだけど、最近田植え機械や小型の耕運機はカラーリング変えたのよね。まあ伝統を守るのも大事だと思うけど私この色好きなのよね。ってかなんでこの国の主要メーカー2社は同じようなカラーリングしてるのかしらね？後の1社は青色だから一目で皆にどのメーカーか分かって貰えるわよね」

などと話しかけてきが当然僕は農機具の事など何も知らないのが適当に相槌を打っていた。田中先輩と話をしているとノックの音が聞こえてきた。

「どうぞ」

田中先輩がそういうと一人の女性が入ってきた。その女性は制服をきっちり規定どおりに着ていた。それでいて気品というものを感じさせていた。

「こんにちは。あら？こちらの殿方は？」

部屋に入るとすぐのその女性は田中先輩の後ろに立っていた僕の存在に気付き、田中先輩に疑問を投げかけてきた。

「ゆうちゃんこんにちは。この子は新入部員の古河大地君よ。詳しい挨拶は皆が集まってからね」

「よろしく願います」

僕は田中先輩に紹介されて軽く挨拶し会釈をした。

「あらあら、これはご丁寧に。私、2年の入江ゆうと申します。不束者ではございますがよろしく願います」

本当に物腰が柔らかく上品でまるで大和撫子のようなのである。思わず僕は入江先輩に見惚れてしまった。いかんいかん、好きな人の前で鼻の下を伸ばしてしまう所だった。

入江先輩は自分の定位置だと思われる場所に座った。

その瞬間勢いよく部室のドアが開いた。

「おヨネさんやりました！」

そう言って入ってきたのは男子生徒だった。入江先輩とは対照的に制服を着崩している。しかし、腰パンなどだらしない着崩し方ではなくファッションに疎い僕でもかっこよさを感じる着崩し方である。

「何がやったの？　と言うか私をおヨネさんって呼ばないの。折角気に入っている名前が婆臭くなっちゃうじゃないのよ。全く何度言っても聞かないんだから」

やれやれと言った表情で田中先輩は言った。

「これを見てくださいよ」

そういうとその男子生徒は田中先輩にノートを見せてきた。少しだけそのノートを見ることが出来たがどうやらそのノートには元素記号がびっしりと書かれているようだった。まだ化学は水兵リーベーしか習っていない僕には、そのノートに何が書かれているか理解することはできなかった。

田中先輩は男子生徒のを見せてきたノートを受け取り書かれている内容を吟味している。時折何やら独り言の様な事をぶつぶつと言っている。

ちなみにこの男子生徒はこの部屋にとって本来異物であるはずの僕の存在には気付いていないようである。そして、ノートを吟味している田中先輩も僕をこの男子生徒に紹介する事を忘れて没頭している。僕は幾分の居心地の悪さを感じたが自分から声を発する度胸はなかった。その内紹介してくれるだろうと思いついてそのままにいることにした。

「これ前回安食君が前回作った除草剤『アンジキアップ』の改良版よね？　アンジキアップにはどうしても土壌に残留してしまう欠点があったけど、この部分を田んぼに撒いた後で加水分解をおこさせる事で自然にいる微生物でも分解できる物質に変性させるわけね」

田中先輩はノートのある部分を指差しながら言った。僕には何が何やら全く分からない恐らくその部分が重要な場所なのだろう。というかこの僕には記号の羅列にしか見えない物を見てそこまで理解

できるというのが凄い。というかこの男子生徒は安食さんというのか。今まで顔を合わせた事がないので恐らく僕より上の学年なのだろう。

「さすがおヨネさん。すぐに分かりましたね。今日の授業中に急に閃いて授業そっちのけでこの構造式を考えてました。名づけて『アンジキードブルアップ』です」

「授業しっかり受けなさいよ。でも、この欠点としては良い天氣が前後二日位続く時にしか使えないって事よね。湿った土壤に撒いたら直ぐに変性しちゃうし、撒いてすぐに雨が降ったりしたら除草する前に変性して効果が出ないからね」

田中先輩は形だけのツツコミを入れ、その除草剤の感想を述べた。田中先輩も除草剤に興味津々のようだ。正直僕には付いていけない世界だ。

「あら安食君。また新しい除草剤を考え付いたのですか？」

田中先輩と安食先輩の二人で盛り上がっている所に意外な人が声をかけてきた。入江先輩である。

「除草剤の残留なんて事最初から除草剤を使用しなければ問題ない事ではありませんか」

さっき僕に声を掛けてくれた時のように物腰の柔らかい言い方ではあるが確実に敵意のある言い方であった。僕はあの入江先輩がこんな言い方をするのかと少し驚いた。

「なんだ入江も来てたのか。すまん夢中になって気が付かなかったよ。しかし、その言い方はないんじゃないか？お前の興味のある合鴨農法なんて非効率的だよ。大体無農薬で米を作ろうだなんて机上の空論だよ。それが簡単に出来るなら皆やっているはずじゃないか」
安食先輩は少しキツイ言い方で言い返した。どうでも良い事だが入江先輩が君付けで呼ぶという事は、安食先輩は2年生なのであろう。

「なんば言うね。無農薬で作った方が自然にも人にも優しさに決まっとうももん」

????。思わず僕の頭に疑問符が3つも浮かんでしまった。今言葉を発したのは入江先輩のはずである。しかし、使っている言葉があまりにも僕が知っている入江先輩のものとかけ離れていた。まあ僕が入江先輩を知ってからまだあまり時はたつてないのだけれども、それにしても違いすぎた。

「全くあんたは安心した食が進むっちいう名前のくせにいつちよんあんたがしよる事は安全じゃなかね」

「いやいやだからこそ俺は人にも自然にも優しい農薬を作ろうとしているのではないか。入江とはどうもこの分野においては相容れないようだな」

突然の入江先輩の豹変にも関わらず安食先輩は普通に答えている。このような事は日常茶飯事なのだろうか？

そこに遠慮がちなノックの音が部室に響いた。

部室の中にいた人の視線はドアの方に向けられた。そこには一人の女子生徒が立っていた。僕はその女子生徒に見覚えがあった。同じ学年で隣のクラスの寺澤ますみさんだった。寺澤さんと直接話した事はないが、僕の学校は英語がレベルに合わせてクラス分けされておりその英語のクラスと一緒に授業を受けている。

「こんにちは。先輩達また言い合いしてたんですか。廊下にまで丸聞こえですよ」

寺澤さんは部室に入りドアを閉めながら大きな声で元気よく言った。どうやら安食先輩が勢いよく入ってきてそのままドアを開けっぱなしにしてしまっていたらしい。

「ますみちゃんいらっしやい」

「あら、寺澤さんこんにちは。すみません遂興奮してしまったものですから」

「おっ寺澤かこんちは」

僕以外の全員が一斉に入ってきた寺澤さんに向かって挨拶をした。一応顔見知りの僕も挨拶をした方がいいのだろうか。そう思っている時に『パンパン』と乾いた手を叩く音が部室に響いた。

「はいはい、ゆうちゃんも安食君も言い合うのはここまで。お互い好きな分野は違えど米が好きって事は共通しているんだからそれでいいじゃない。ね？」

そう言っただけ田中先輩は二人の顔を見た。

「はい。取り乱してお見苦しい所を見せてしまい申し訳ございませんでした。古河さんもビックリされたでしょう」

「あっいえ……」

正直めちゃくちゃ驚いたが流石に初対面の人に正直には言えなかった。それよりも急に名前を呼ばれたことに驚いてしまった。

「俺もすまなかったな。で、その男の子は誰かな？」

入江先輩が僕の名前を呼び僕が応えた事でようやく安食先輩は僕の存在に気が付いたようだった。

「あっそうそう、さっきゆうちゃんには紹介したけど安食君とますみちゃんにはまだ紹介してなかったわね。この子は一年生の古河大地君、私たちの新しい仲間よ。皆仲良くするのよ」

田中先輩は椅子から立ち上がり皆に向かって僕を紹介した。

「それじゃ大地皆に挨拶して頂戴」

「あっえっと、新しくコメ部に入った1年3組の古河大地です。正直まだ米の事はよく分かりませんがよろしくお願いします」

僕がこう言ってお辞儀をすると皆は拍手をしてくれた。

「それじゃ次は安食君挨拶して頂戴」

拍手が鳴り止むのを待って田中先輩は言った。

「了解です。俺は2年の安食進だ。さっきの会話から分かってもらえると思うが、俺は米に関する事の中でも農業に特に興味がある。農業の事だったらなんでも聞いてくれ。それ以外でも困ったことがあったらなんでも言ってくれよな。たった二人きりの男子部員だ仲良くしような」

そう言っただけ僕の目の前まで近づいてきて握手を求めてきた。僕も手を差し出し握手をした。いくらかっこよくとは言っても制服を着崩していたので少し不良なのかと思ってしまったがいい人のように

安心した。

「もしよければ俺のことはセーフティフードと呼んでくれ」

安食先輩はこれでもかという決め顔でそう言う。握手をしていない方の手の親指を立ててポーズを取った。握手をしながら僕は絶対その呼び方だけはするまいと心に決めた。

「気にしないでね大地。いつも初対面の人にはそう言ってるけど、誰もそんな呼び方してないから。あっ一人だけその呼び方している人が居た……」

「はいはいはい！1年の寺澤ますみです。よろしくです！」

寺澤さんは元気よくそう言う。とまだ安食先輩と握手をしている僕の所へ来て、握手している手の上に自分の手を合わせ握手に参加してきた。

「こちらこそよろしくお願いします。そういえば寺澤さんって僕と英語の授業で同じクラスですよね？」

「ふえ？そうでしたっけ？」

寺澤さんは握手から手を離すと頭に指を当てて考え始めた。それと同時に僕は安食先輩の手も離れた。僕はいつまでも男性の手を握っておく趣味はない。

寺澤さんは僕の顔をまじまじと見ながら考えているようだ。

「うーん。ごめんなさい。ちょっと覚えてないです。私人の顔と名前覚えるのが苦手。あはは。あつでもさっき自己紹介してくれたんで今はちゃんと名前覚えてますよ。新山宇宙さんですよ！」

寺澤さんは本当に申し訳なさそうに言った。覚えられてなかった事に若干のショックを受けたが、別に話したことがある訳でもないし仕方のない事だろう。というかもう名前間違えて覚えているじゃないか。

「いや僕の名前は……」

「分かってるよ。古河大地君でしょ。んもう、ボケたに決まってるじゃん。古いを新しいに、河を山に、大地を宇宙に間違えて覚えるなんて漫画じゃあるまいしある訳ないじゃん。ってか私、自分の

ギャグを解説してるみたいで恥ずかしいよ！」

僕が名前を訂正しようと口を開いた時に寺澤さんが喋ってきた。どうやらさっきの名前間違いはボケだったようだ。とりあえずちゃんと名前を覚えてもらえていた事にほっとした。というか、寺澤さんってこんなに騒がしい人だったのか……。知らなかった。

「皆の挨拶が終わったわね。私は昨日したしいいわね。あっそうそう、私のことは米部長って呼んでね。私、米って名前気に入ってるのよ。間違っても誰かさんみたいに、おヨネさんなんて呼ばない事。大地はいい子だからそんな事はしないと思うけどね」

田中先輩：あっいや要望どおりここからは米部長と呼ぶことにしよう。女性を下の名前で呼ぶなんて少し恥ずかしいけど。米部長は昨日出会ったばかりの僕をそんなに信用してくれているのか。その期待に答えないといけないな。社交辞令も入っているだろうけれど、好きな人にそんな風に言ってもらえるのは本当に嬉しい。

「ところで質問なのですがコメ部はどんな活動をしているんですか？」

僕は入部したものの活動内容を全く知らなかったのでこう質問した。

「そうね。部員全員の活動としては毎週金曜日の放課後におにぎりを作って販売することがあげられるわね。後は年に一度コメの同人誌を発行しているわ。それ以外は基本的にフリーよ。だから本来は金曜日以外部室に集まる必要性はないの。でも、このメンバーは、米という共通の好きなものがある仲間で集まって色んな話を話すが楽しいからこうやって集まってきたのよ。米に関する事だけじゃなくて色んな話をするのが楽しいの。ちなみに我がコメ部のスローガンは『ラブコメしようよ！』よ。それじゃ新入部員も迎えた事だしいつものやっときますか。せーの！」

「」「ラブコメしようよ！」「」

米部長の掛け声と共に皆、こう言うと右手を高く突き上げた。寺澤さんにいたっては飛び跳ねている。そして僕は取り囲まれもみくちゃにされてしまった。まるでさよならホームランを打ったバッターに対するような、手荒い歓迎ではあったが歓迎してくれている事だけはしっかり分かった。この部活に入ることに関分の不安があったが、この歓迎のされ方で少し安心してした。言っておくが僕はMではないぞ。

解放された時には僕は、服装は乱され床に寝そべる格好になっていた。嬉しいけど本当に手荒だな。ってかこの歓迎寺澤さんの時も行っただろうか。もし行っただのならその場に居たかった。あついや別に変な意味ではなくて。

「突然で驚いちゃったでしょ。ウチの部は気合入れる時や何かいい事があったりした時に皆で『ラブコメしようよ!』って言う決まりなのよ。次からはちゃんと恥ずかしがらずに大地も言うのよ」

「ったく誰がこんな決まり作っただろうな。何回もやってるけど未だに恥ずかしいよ」

「その割にはセーフティーフード先輩いつもこの掛け声する時ノリノリじゃないですか」

「恥ずかしさとノリの良さは必ずしも比例しないものなのだよ寺澤君」

安食先輩は指摘されるとわざと作っただような声で言った。

「ちなみにこの決まり作っただのは私だけど文句があるなら聞くわよ？」

米部長がずっと安食先輩に近づきながら言った。

「いえいえ誰がおヨネさんに文句なんていいましょうか」

「だからおヨネさんって言うのはやめなさいってば」

そう言うのと皆互いの顔を見て笑い合ったのだった。僕も床に寝そべったまま笑った。

「ほら立てよ」

そう言って安食先輩は僕に手を差し伸べてきた。その手を握り返

し僕は起き上がり服装を整えた。

「ちなみにこの歓迎の仕方もウチの部の伝統なのよ」

「えっ女子生徒が入部した時もこんな手荒な歓迎するんですか？」

「私の時は胴上げでしたよ。私もこの歓迎のされ方されてみたかったです」

寺澤さんが自分の顔を指差しながら言った。

「流石に女の子をこんな目に合わせるのはね。それに安食君もいるし体どこを触られるかわかったもんじゃないわよ。だから女子は胴上げよ」

「おヨネさん酷いです。僕がそんな男に見えるんですか！」

安食先輩がいきり立ち言い返した。

「胴上げする時だって何重にも手袋させられて全く感覚分からなかったし」

「その配慮には本当に感謝でしたよ。というか、いくら私が可憐で小柄で軽いかわゆい女の子だといってもたった三人に胴上げされるのはちょっとした恐怖でしたよ」

「あらあら寺澤さんいいじゃないの私の時なんてたった二人に胴上げされたのよ。しかも、その時は安食さん手袋はめていませんでしたしね」

「それを言うなら俺なんてさっきの手荒な歓迎をたった一人にされただぞ。最初俺は新人イジメかと思ってしまったよ」

皆、それぞれの入った時を懐かしむように言った。恐怖やイジメ等物騒な単語が出ているが皆の口ぶりは楽しそうだった。

一章 二部

「自己紹介も一通り終わって歓迎の儀式も終わったし、大地の歓迎会の意味も込めてお茶会にしましょうか。お茶の準備して来るから、皆座って待っててね」

「私もお手伝い致しますわ」「私もお手伝いしますよ」

米部長が準備に取り掛かろうとすると、他の女子二人組みは手伝いう為に米部長の元へと移動した。

「ありがとうね。私はお湯を沸かしてお茶を淹れるから、二人はお茶請けと湯飲みの準備をしてくれるかしら」

「かしこまりました」「了解です!」

そう言うのと三人とも準備に取り掛かった。米先輩はケトルにミネラルウォーターを入れお湯を沸かし、入江先輩は戸棚からお茶請けを取り出し盛り付けし、寺澤さんは湯飲みを人数分取り出し机に並べ始めた。

「僕も何か手伝いましょうか?」

新人である僕が何もせず座っていていいのか心配になり、湯飲みを持ってきた寺澤さんに聞いた。

「いえいえ。こういった作業は女性陣に任せてください。そのお気持だけで十分ですよ。ね、米先輩入江先輩」

「そうよ。それに今日の主役はあなたなんだしね。ドンと座ってなさい」

「そうですわ。そう言ったお気持だけで本当に十分でございます。あっ安食さんは手伝っていたいてもよろしいのですよ?」

人数分の湯飲みを机に並べ米部長の元へ行った寺澤さんと入れ替わりでお茶請けを持ってきた入江先輩がにこやかな顔をして言った。「おいおい、入江は俺に家事をさせたらどうなってしまうか知ってるだろ? 以前お前が無理矢理手伝わせた時の事を忘れたとは言わせないぞ」

「アレは確かに酷かったですね。安食さんに突っかかって後悔したのはあの時ぐらいです。すみませんでした。安食さんもゆっくりしててください」

二人は遠くの方を見ながらそう言った。その時だんな事が起こったのか僕は知る由もなかったけれども、二人の会話から察するとよっぽど酷い状況になってしまったのだろう。

遠くを見ていた入江先輩は我に返ると慌てながらも雅に米部長の方へ戻って行った。

僕は安食先輩が依然手伝いをした時に、どんな状況になったのか気になったので安食先輩に聞くことにした。

「安食先輩、さっきの会話ですがどんな状況になってしまったんですか？」

「ん？あつまあそのなんだ…。その時の状況：状況：状況な…。簡単に言うとかラガラ！バリン！ビッシャー！という状況だな」

「とりあえず食器か何かが割れたりした悲惨な状況だという事は分かりました」

「分かってくれたか。実はな俺は家事全般が苦手なんだ。苦手と言うのとはちよつと違うかもしれないが…。家事をやるうとしてもまともに出来ないんだ」

「何か理由あるんですか？」

「まあ理由はある。しかし聞いたとしても面白い話とは言えないぞ？それでもどうしても聞きたいと言うのなら話してあげよう」

話始めた時は遠い目をしていた安食先輩だったが徐々に饒舌になってきた。実はそのトラウマの原因を僕に言いたくて仕方がないのではないだろうか。ここで断るのも無粋だよな。

「それじゃ教えてもらえますか」

「よしきた。俺には曾祖父がいるんだよ。これが絵に描いたような古い考え方を持った人だな。小さい頃家の手伝いをしようとして台所に行くと『男のする事じゃないからそんな事はしなくていい！』って曾祖父が怒る訳だよ。良い事をしようとして怒られるってのは

結構なトラウマになるんだぞ。曾祖父の考え方は古いってのは理解しているが、今でも手伝いをしたら怒号が飛んでくるんじゃないかって不安になってな。それで、家事をすると何かしら失敗をしてしまうんだ。それなのに入江の奴は俺に無理矢理以前手伝わせたんだぜ」

僕達が話していると、準備を終えた米部長達が僕達の方へ近付いてきた。どうやら僕と先輩が話をしている内にお茶会の準備は整ったようだ。

「はいはい。ゆうちゃん、ますみちゃん席に着いてね。今お茶を湯飲みに注いであげるからね」

「あっ私が注ぎますから先輩は座っててくださいよ」

「そう？それじゃお願いできるかしら」

そう言うとき舞部長は持っていた急須を寺澤さんに渡し、自分の席へ腰を降ろした。

ん？急須？僕のイメージではお茶会と言うからてっきり紅茶が出てくるのだろーと思っていた。よくよく机の上を見ると、和食器の湯飲みとお茶請けとしてせんべいや雷おこし、ポン菓子などお米を主原料としたお菓子がならんでいた。

そう言えば舞部長達はティーカップと言わず湯飲みって言ったよな。というか、今まで机の上にあるものに気が付かないなんてどうしてるんだろ。入江先輩や寺澤さんが来た時やそれ以外でも見る機会沢山あったはずなのにな。

それ程、人というものは自分が興味ある事しか見ていないって事かな。等と考えていると寺澤さんがお茶を僕に注ぎに来た。

「はいどうぞです」

そう言うとき、僕の湯飲みにお茶を並々と注いだ。

「ありがとうございます」

「えへへ、沢山飲んじゃってくださいね。おかわりもありますからね」

そう言うときにこやかに笑うと寺澤さんは最期に自分の分のお茶を

注ぎ席に着いた。

席順は僕と安食先輩が隣り合い、僕の正面に寺澤さんが座り安食先輩の正面に入江先輩が座っている。そして米部長は上座の位置に座っている。今は最初開いていたノートパソコンを閉じ横のほうに置いている。

「さて、それじゃお茶会始めましょうかね。お茶会と言っても別にお茶にこだわっているわけじゃないんだけどね。お茶葉も安物だけど勘弁してね。それじゃ乾杯」

「「「乾杯」」」」

米部長の音頭に合わせて僕達は湯飲みを持ち軽く当てあった。

僕のだけ以上に並々に注がれていたので乾杯をした拍子に少し零れて指に掛かってしまい熱かったが、この空気を崩さない為に我慢した。

それから乾杯の時に改めて気が付いたのだが米部長、寺澤さん、僕は陶器の湯飲みなのに安食先輩と入江先輩の二人は紙コップだった。

「そういえばさっき男性陣早速仲良く話しているみたいだったけど何を話していたの？」

「それは男同士の秘密だよな」

安食先輩はそう言う僕に親指を立ててきた。

「安食先輩が言ってるほしくないのなら僕はいいませんよ」

「あつはつは。大地君、君はいい後輩だな。俺は君に出会えて嬉しいぞ」

「安食君が、何故家事が出来ないのかという話でございますよね」

安食先輩が僕に抱きつこうとしていた時に入江先輩が言った。この言葉を聞いて安食先輩は僕に抱きつくのを止めたので正直僕は助かったと思ってしまった。

「おいおい入江、そこは俺達の話聞いていたとしても言わぬが花だろ。折角男同士の秘密を共有できたと思っていたのにな」

「おほほほ。耳の良さには自信がございますのよ」

「悪いのは口だけか」

安食先輩は小さな声で僕にそつと言った。僕に言われてもリアクションに困ってしまうのだが。

「安食さん聞こえていますわよ」

入江先輩本当に耳がいいようだ。

「安食君の家事は本当に壊滅的に酷かったもんね。湯飲みは割るしお水は零すし……。確か子供の頃にお手伝いをしている時にお化けを見たのがトラウマになっているのよね？」

「ふえ？そんなんですか？私は子供の頃宇宙人に連れ攫われて家事が出来なくなるチップを埋め込まれたって聞きましたよ」

「ちなみに私は、幼稚園の頃から完璧に家事をこなせていた天才時だったけれども、好きな女の子に家事をするような女々しい男の子は好きじゃないって言われてトラウマになったってお聞きしましたよ」

みんなそれぞれ安食先輩から聞いた内容が全く違っていた。ここまで皆言ったのだから僕も言って大丈夫だろう。

「あの僕がさっき安食先輩から聞いたのは子供の頃家事を手伝っていたら曾祖父から怒られたからだそうです」

僕がそういう終わると安食先輩以外の部員はお互いの顔を見合わせて、その後安食先輩の方へ顔を向けた。皆の顔は僕も含めて訝しげだった。

「おいおい、大地君男同士の秘密と言った事はいくらその全貌がバレようと自分の口からは言うべきではないぞ」

安食先輩は、部員全員に視線を向けられているにもかかわらず平然とお茶を啜り僕に言った。

僕だったらこんな表情で人に見られたらそんなに落ち着いてられないぞ。

「いやいやいやいや。安食先輩男同士の秘密とかいいながらなんか皆にもトラウマの理由言っているじゃないですか！しかも、なんか皆聞いている理由がそれぞれ違いますし」

「つまりあんたはこん部員ば全員、騙しとったっちいう事ね？」

入江先輩の方言がまた出てきた。どうも怒ると方言になってしま
うようだ。

「うう～。この純粋な私を担ぐなんて酷いですよ」

寺澤さんは頬を膨らまして怒っている事をアピールしている。

「いやね。私は別に騙されとったちゃ良かつよ。ばってん部長や可
愛か後輩ば騙したっちゅこつが許せんたい。あんたは冗談のつもり
やったかんしれんばんばってん、古河君げな今日あんたと始めて合
ったとばい。そげんかもんに嘘ば付かれたっち知ったらショックば
受けるんじゃないかね？」

「すまんすまん。俺も悪気があってやった訳じゃないんだ」

安食先輩は手を顔の前にやり入江先輩にあやまった。

「誤る相手が違うっちゃなかね？私は気にしとらんっち言よろうが。

「部長、寺澤、大地すまなかつたな」

安食先輩は自分の席から立ち上がると頭を下げた。

「まあその何だ。自分のトラウマを人に話すのってちょっと恥ずか
しいだろ。だから、話す時はちょっと嘘ってかおちゃらけてしまっ
たんだよ。本当にすみませんでした」

「分かればよろしいのですよ。すみません私も少々言い過ぎてしま
ったかもしれません。どうかご容赦ください」

さっきまで怒った顔をしていた入江先輩が笑みを浮かべながらい
った。言葉も方言じゃなく丁寧な言葉になっている。こんなにすぐ
切り替えができるなんて女性は凄い。

「あっいや別に僕も気にしていないから大丈夫ですよ。きっと僕が
今日始めて部活にきたから気を利かせて話を冗談交じりにしてくれ
たんですよ」

素直に謝られた上に僕との会話が発端なのだからとりあえずフォ
ローを入れる事にした。

「うう私はちよっと怒ってますけど私の心は海の用に広いで許し
てあげますよ」

寺澤さんは自分の胸に手を当てながら言った。

余談だが寺澤さんの胸はその何と言うか：めっちゃくちゃ大きい。ちなみに入江先輩はちょっと胸の発育は良くないみたいだ。米部長は僕だけの秘密だよ。僕は一体何を言っているんだろうか：。

「はいはい。安食君が謝ってみんなが許したんだからこの件はこれで終わり。私も別に本当にこれっぽっちも一ミリたりとも全く全然気にしてませんからね」

「いやいやおヨネさんそれめちゃくちゃ気にしているでしょ！」

その後、お茶会は順調に進んだ。

初対面の人と話すのが苦手な僕に皆適度に話を振ってくれた。根掘り葉掘り僕の事を質問攻めにするのではなく、自然と会話に入るような流れだった。

そのお陰かまだ合って間もないというのに僕は部員全員と自然と話が出来るようになった。

日本茶やお菓子も美味しかった。普段日本茶なんてものはめったに飲まないのだが、この日本茶ならまた飲みたいと思える程だった。これは好きな人が準備をしたというのも含まれているかもしれないが。寺澤さんには失礼だが次は是非米先輩にお茶を注いでもらいたいと思っている。

ポン菓子を食べている時に安食先輩がポン菓子の作り方には『ポイル・シャルルの法則』が関係している等と熱弁を揮っていたが皆話し半分に聞いていた。僕はまだその法則を理解できないし、他のメンバーはタコが出来るほどこの話をきかされているのだろう。というか、このお茶会を通じてなんとなく安食先輩のこの部活における立ち居地が分かってきた気がする。

最初は見ただ目でカッコイイ、農薬の事で頭がいいというイメージだったがどちらかと言うと河内と同じような三枚目みたいだ。

そして僕はやっぱりこの部活に入って正解だったと思う。入部一日目でこんなにも米部長と話せるようになったのだから。

昨日まで米部長は僕の存在すら知らなかったのに今日はもうこんなに話している。今この瞬間が幸せでならない。部活の他のメンバーの事は心配だったが今日実際に接してみて不安はなくなった。

確かに個性的な部員が多いが知り合って間もなく行われているこのお茶会を居心地の良い物に感じている。

このメンバーとなら上手くやれる、と僕の第六感が告げている様に感じる。

米部長と過ごすのは勿論、これからこのメンバーで過ごす事がどこかワクワクしている僕がそこにはいたのだった。

「あら。もうこんな時間になっちゃたわね。そろそろお開きにしましょうか」

米部長が部室の壁に掛かっている時計を見ながら言った。

楽しい時間はすぐに過ぎてしまうと誰かが言っていたが、僕が楽しいと感じている時間もまた例外ではなかったようだ。

片付けは僕も手伝い直ぐに終わった。

「それじゃ帰りましょうかね」

僕達は部室を出ると皆で下駄箱に向かった。

下駄箱は学年とクラスで分かれている。寺澤さんとはクラスも隣なので下駄箱も隣接している。

僕が靴を履き替えていると寺澤さんが声を掛けてきた。

「皆個性的で楽しいでしょ？私、入ってまだ間もないんだけどこん

なに打ち解けてるんだから古河君も安心して大丈夫だと思うよ」

「うん。僕人見知りをしてしまうんだけど、まさか今日初対面の人とこんなに話せるようになるとは思わなかったよ。寺澤さんを含め皆に感謝しているよ」

「そつまあ私なんて何にもしてないんですけどね」

寺澤さんは少し照れたように言った。

「ほら二人とも何してるの？先輩達を待たせるとはいい度胸ね」

靴を履き替え先に玄関で待っていた米部長の声が聞こえてきた。

「すみません。今行きます」

僕と寺澤さんはお互いの顔を見合わせて笑いつて皆の待つ玄関の方へ掛けていった。

僕が家に帰り着いて思った事が一つあった。

「あっなんで安食先輩と入江先輩が紙コップだった理由聞いてないや」

第二章 一部

次の日の朝僕が学校へ歩いて向かっていた。

僕の家から学校までは歩いて三十分程度の距離である。本来ならば自転車通学でもいいのだがいい運動になると思いあえて徒歩通学を行っている。どうしても時間が無い時には自転車を使って通学するように、一応自転車通学の許可は学校に申請し取得している。

基本的に学校までの道のりは平坦なのだが何故か学校の直前に一度短い下り坂があり、その後長い上り坂があるという意味の分らない地形の場所に立地していた。

何故上り坂になるのに一度下るのが分からない。そのせいで上り坂がより長くなってしまいうじゃないか。これは僕達の学校の生徒の共通認識だった。

まあ帰る時は楽なんだけどね。自転車なんか帰るとき下った時の力だけで小さな上り坂の上まで行けてるし。

「おい大地」

そんな事を考えながら坂を上っていると後ろから声を掛けられると同時に肩を誰かに叩かれた。

振り返るとそこには河内がいた。河内は自転車通学をしているが今は自転車から降りて手で押している。

「なんだ河内か。おはよう」

「おう。おはよう」

「調度よかった。俺の荷物もかごに乗せてくれよ」

そういいながら僕は河内の自転車のかごに自分の鞆を入れた。

「おお軽くなった。これで少しはこの坂を登る元気も出てくるよ」

「俺は重くなってしまったがな」

僕が晴れ晴れして背伸びをしなげらうと、河内が言い返してきた。

「まあ別にいいけどな。ところで昨日は凄かったな」

この話題にはなるだろうと思っていたけれどもまさか直ぐに振ってくるとはな。まあ教室でこの話題になるよりはいいか。どうせ、クラスメイトもこの話を俺に聞いてくるだろうが。

「まあな。まさか米部長がいきなり教室に来るとは思わなかったよ」
「おまえコメ部に入ってよかったな」

河内が会話の流れを無視して唐突にそんな事を言ってきたので驚いた。僕はコメ部に入ってよかったと思っているが、まだその事を河内には言っていない。

こいつもしかしてエスパーか？

「どうしたんだよ。唐突に」

「あついやだっておまえ、昨日まで田中先輩の事田中先輩って呼んでいたのに、もう今日は米部長って役職を付けているけど下の名前で呼んでるじゃん。それって少なからず好きな先輩とお近づきになれたってことだろ？」

「おまえは俺がただ米部長って呼んだだけでよくそこまで考えるな。米部長って俺が呼んでいるのは先輩自身が『米』という名前を気に入っているから米部長って呼んでって言ったからだよ。おまえ妄想力半端ないな。これも日頃の妄想の賜物か？」

「妄想力なんていうなよ。人の気持を考えるのが上手いと言え。それは置いといてどちらにしろ全くおまえの事を知らなかった先輩がおまえの事を認識しただけでもよかったじゃないか」

「ああおまえに言われるまでもなく、俺も昨日同じ事を考えていたよ。それに部活のメンバーも皆良い人みたいだし、成り行きで入った部活にしては上出来だよ」

「まあその部活が楽しくなりすぎて先輩より部活を好きになるなんて事が無いように気を付けろよ。それじゃ意味がないからな」

「気を付けるよ。でもどうせやるなら部活も真剣にやるよ」

「そうだな。まあ頑張れよ、また話を聞かせてくれ」

ここまで話すと調度、靴箱と自転車置場の分かれ道に差し掛かった。話をしながら坂を登ると少しは気が紛れるらしい。その分話す

から息切れはしてしまうが。

「それじゃ俺はチャリを置いてくるよ」

「おう」

河内は自転車に乗って自転車置場へ、僕は下駄箱の方へそれぞれ向かっていった。

「あつ俺の鞆河内の自転車のかごに入れたままだったや」

下駄箱で靴を履き替えようとしていた時になって、鞆を持っていないことに気が付いた。

「まあいつか教室に持ってきてくれるだろう。ちょっと得したな」
そう心の中で思いながら靴を履き替えて教室へと向かった。

僕が教室に入るともう殆どの生徒が登校してきていた。各々グループで朝のひと時を楽しんでいるようだった。高校に入学して約一ヶ月経ちある程度グループは固定され始めているようだった。

ちなみに僕は幼稚園の頃からの腐れ縁である河内とつるんでいる。しかし、他の男子生徒と話をしないという訳ではない。河内が自分から色々な人に話しかけるので僕は河内を通して他の生徒と徐々に話すようになっていき、入学一ヶ月にしては上出来な程クラスメイトと仲良くなれていた。

この事には河内に感謝をしなければいけないだろう。

僕が高校に入る上で一番心配していたのは友人が出来るかどうかという事だったのだから。

「あ、あの。古河さん。ちょっといいですか？」

自分の席に着くと誰かが声を掛けてきた。

顔を上げるとそこにはクラスメイトの正田帆乃さんが立っていた。彼女に関しては、入学式直後に行ったクラスでの自己紹介では俯いて蚊の鳴く様な小さな声で出身中学と名前だけを述べていたのが印象的に残っている。僕以上に人見知りというか、上がり性なのだろう。

「ん？別いいけどどうしたの？」

普段話しかけられない人に話しかけられる理由は昨日の一見位しか考えられなかったが、正田さんの出方を伺う様に聞いた。これが告白の為に僕を呼び出すのだったらいんだけどな。正直、米部長という心に決めた人が居る僕の目から見ても正田さんは可愛い。

「あ、えっと昨日の事なんですけど……」

やっぱ昨日のことだった。僕の儚い願いは簡単に打ち崩された。

「ああ昨日、僕の部活の先輩がこの教室に乗り込んできた事？」

「はい。昨日その部長さんが谷口先生の事を急に鯉って呼んでいたみたいですけど、谷口先生と部長さんはどういう関係なんですか？」

「えっとそれはね……」

僕が話し始めると、クラス的女子達のリーダー的存在になりつつあるグループの女子達がこちらの方をちらちら見ているのに気が付いた。

上がり性の正田さんが話しかけてくるのはおかしいと思っていたがどうやらそのグループの差し金のようだ。

「僕も良く分からないけど舞部長と谷口先生は簡単に言うとか親戚らしいよ。詳しく聞いた訳じゃないからはっきりとは分からないけど、小さい頃から鯉って呼んでいたから学校でも遂、口に出ちゃったんじゃないかな？」

「そうなんですか。あのありがとうございました」

僕の返答を聞くと正田さんは深々とお辞儀をして、さっき僕達の方を見ていた女子のグループの元へと戻って行き、早速僕の返答をそのグループに教えているようだった。

あんまり話したことのない人と話すのはちょっとまだ緊張するな。って考えていると後頭部に鈍痛が走った。

「痛てえな！」

椅子から立ち上がって後ろを向くとそこには河内が立っていた。手には二つの鞆を持っている。

「人に糞重い鞆を持たせといっておまえは、教室で美少女とお喋りか

よ。ってかおまえの鞆重いよ。健全な学生なら置き勉位しろ」

そう言っ僕て鞆を手渡してきた。

「あつすまなかつたな。素で鞆をかごに入れてたの忘れてたんだよ。後、美少女と朝から会話出来たのは僕の日頃の行いがいいからだよ」
「おっかしいな。それだったら俺は毎日美少女と会話ができるはずなのにな」

「いやおまえは日頃の行いよくないだろ」

「うるせえやい」

キーンコーンカーンコン

僕達が話しているとチャイムがなった。

話していたクラスメート達は自分の机へ戻り始めた。

「鞆ありがとうな」

「気にするな。今日だけは許してやるさ。後、置き勉しろよ」

そう言っ河内も自分の席へ戻っていった。

チャイムが鳴り止む頃に谷口先生が教室へ入ってきた。

「よし、日直号令」

「起立。礼」

「「おはようございます」」

「着席」

そうしていつもと同じ朝のホームルームが始まった。

ホームルームが終了して先生が教室を出て少ししてから、僕は入部届けを手に持ち動き始めた。昨日米部長から、担任の印鑑を入部届けに貰ってくるようにと言われていたからだ。

教室内に谷口先生がいる内に声を掛けようかとも思ったが、昨日の今日で僕が谷口先生に声を掛けると、またクラスの注目を浴びてしまうと思ひ先生が廊下に出てから声を掛ける事にした。

僕が廊下に出ると谷口先生は十メートル程前を歩いていた。

廊下には一組と五組の生徒が多く見受けられた。手に教科書やノート筆記具を持っているので恐らく移動教室なのだろう。

谷口先生は多くの生徒から挨拶をされていた。この先生は他のクラスの子供にも人気があるんだな。噂では一部の女子生徒は本気で先生に恋心を抱いているという話も耳にした事がある。

そう思いながら僕は少し早足で歩き先生との距離を詰めて話しかけた。

「谷口先生ちょっとよろしいですか？」

そう声を掛けると谷口先生は立ち止まってこちらを向いた。

「古河どうした？ん？ああ入部届けの印鑑だな」

谷口先生は直ぐに僕が手に持っているものに気が付きそう言った。「はい。よろしくお願いします」

「今印鑑ないから入部届けを預かつといて帰りのホームルームが終わってから渡すな」

「はいすみません。ありがとうございます」

そう言って僕は手に持っていた入部届けを谷口先生に渡した。

「しかし、昨日はビックリしたな」

目的が済んだので帰ろうかと思っていると、谷口先生が僕に話しかけてきた。

「あっ部長がご迷惑をおかけしてしまって申し訳ありませんでした」

「いやいや。古河が誤る必要はないよ。米ちゃん：あついや田中と俺の関係は聞いたか？」

「詳しくは聞いていませんが親戚だという事は聞いています」

「そうなんだよ。俺は一人っ子だし田中は他の兄弟と歳が結構離れている。だから俺と田中は兄弟みたいな関係で子供の頃を過ごしてきたんだよ。だからまあ田中は俺にああいう風に接してしまう。学校では先生と生徒として接っしろって言っているんだけどな」

「そうなんですか先生も大変ですね。ところで米部長の幼少時代ってどんな感じだったんですか？」

僕は好きな人の幼少時代が気になって谷口先生に質問した。さすがにプライベートな質問だから答えてくれるかどうか半々といったところだろうか。

「めっちゃくちゃ可愛かったよ」

即答だった。しかも顔を緩ませきった表情で答えてきた。

「今も勿論可愛いんだけどさ。昔は礼二お兄たんって呼んでくれてたんだぜ。いやマジで可愛かったぜ」

「せ、先生ここ廊下ですよ」

先生は僕がそう言うと言分の周りを見渡したもうすぐ授業の始まる時間という事もあり、周りに人があまり居なかったが先生は少し顔を赤らめた。

「まあそのなんだ、古河がコメ部に入ったのも何かの縁だ。田中は昨日みたいに思い込んだら一直線の所もあるからしっかり支えてやってくれ」

そう言うと言先生は職員室の方へ歩き始めた。僕も教室へと戻り一時間目の授業の準備を整えた。

一時間目の授業中ずっと米部長の事を話す谷口先生の事を考えていた。

谷口先生もしかして、米部長の事を溺愛してるんじゃないだろうか。実際の兄妹じゃないからシスコンとは言えないと思うけれどそれに近いんじゃないか。

俺が米先輩目当てでコメ部に入ってたって知ったら谷口先生はどんな反応を示すんだろうか。さっきの米部長の話をする時の事を思い出すとちよっと怖い気がした。

二章 二部

放課後、僕は部室へと向かっていた。今日は流石に米部長も僕を迎えに来なかったので少し安心した。

鞆の中には、谷口先生から返してもらった入部届けも入っている。ノックをして部室に入ると僕以外の部員はもう全員集まっていた。「すみません。遅くなってしまいました」

「別に大丈夫よ。私達も皆今さっき来たところだしね」

「あっ部長、入部届けに谷口先生の印鑑貰ってきました。僕の書く所も全部書いてきたんで手続きお願いしますね」

鞆から入部届けを取り出して米部長に手渡した。

「はいはい。えっと記入漏れはないみたいね。これは責任を持って処理しておくわね」

米部長は僕から渡された入部届けに目を通して言った。

「鮭は印鑑貰う時何か言ってた？」

入部届けをクリアファイルに挟みながら言った。

「いえ別にこれといって言っではいませんでしたよ。ただ、米部長とは兄妹みたいな関係だって言っていました」

「まあそれは否定しないわ。鮭学校では生徒に人気あるけど普段はどことなくちょっと抜けているところがあるから大地、クラスで何かあったら鮭の支えになってあげてね」

「僕に出来る範囲であれば」

僕は何故か二人からお互いの事を支えてあげてほしいと言われる不思議な立場に置かれてしまった。

お互いの事を生徒と先生という立場でありながら心配し合う二人は、本当に兄妹のような絆があるのだろ。

ただ一つ安心したのは米部長が谷口先生を溺愛しているようではないという事だった。

「なんだ。大地の担任は鮭なのか」

僕と米部長の会話を聞いていた安食先輩が話しかけてきた。

「そうですよ。安食先輩谷口先生ご存知なんですか？」

「勿論知っているさ。去年俺のクラスの副担任だったんだよ。今年から新一年の担任に昇進したんだよ」

「そうだったんですか」

「俺のクラスの女子の中には本気で恋をしてた奴何人かいたぜ。実際に告白をしに行ったやつもいるらしい」

「えっそうなんですか？好きになるってのはあると思いますけど告白までって凄いですね」

僕は素で驚いた。生徒が教師に憧れから来る恋心を抱くことはあるだろうと思っていたが告白までする人がいるとは思っていなかったからだ。

噂で僕のクラスの女子の中にも谷口先生を好きな人がいると聞んだけどその人も告白したりするのだろうか。

「まあ当然全員断られているけどな。全くクラスの女子、鮭なんかに惚れないで俺に惚れればいいのにな。俺だって鮭に負けてないぜ」
安食先輩は立ち上がりポーズを取っている。自分のかっこよさをアピールしているのだろう。

「そうですよ。セーフティガード先輩はモテるはずですよ！」

突如寺澤さんが会話に入ってきた。

「おお寺澤さんがとう。もっと言ってやってくれ」

寺澤さんに向かってポーズを取りながら行った。カッコイイポーズというよりもボディビルダーのポーズのようだ。

「はい！セーフティガード先輩は喋らないで、動かなかったらもつとモテはります！」

「もはやそれ人間じゃなくて愛玩物としてモテてますよね！」

「冗談に決まってるじゃないですか～。最初の先輩がモテるはずって言ったところから」

「あんた鬼や！」

そう言うとき安食先輩は椅子へ崩れ落ちた。そんな安食先輩の様子

を寺澤さんはにこやかな顔で眺めていた。

「寺澤さんご苦労様」

入江先輩はそう言うのと寺澤さんの頭を撫でた。

「安食さんを凹ませるの上手くなったわね」

「ううあんまり上手くなりたい事じゃありませんよお」

寺澤さんは少し不満の入り混じった声で言った。ただ撫でられるのは嬉しいのか顔はそんなに不満げな表情ではなかった。

「セーフティガード先輩本当にすみませんでした。昨日の帰りに入江先輩とちよつとしたゲームをやってそれで負けちゃってその罰ゲームが、今日安食先輩を凹ます事だったんですよ」

寺澤さんは安食先輩のほうへ向くと今度は表情も申し訳なさそうに言った。

「全ての根源はおまえかよ！」

安食先輩は再び立ち上がると入江先輩の方を向いて言った。その表情は怒りというよりも、罰ゲームであり本心でなかった事に対する安堵の色合いが強いようだった。

一応形上入江先輩にツツコミを入れたのだろう。

「はいはい、落ちも付いたしそろそろいいかしら」

米部長が手を叩きながら言った、米部長は人の注目を自分に集めて話したい時に手を叩く癖があるようだ。

そういえば、幼稚園の先生や小学校低学年を受け持つ先生達もそうやって生徒の注目を集めるよな。僕達部員は米部長に子供扱いされているのだろうか？

そう考えながらも僕達部員は気が付くと全員体ごと米部長の方を向き静かに米部長が話し始めるのを待っていた。

こんなに効果があるんだったらそりゃ手を叩いて注目を集めるはずだな。

「今日は金曜日ね。毎週恒例のコメ部としての活動を行うわよ。大地は初参加よね。って、昨日入部したんだから当たり前か。えっとこの間ちよつと説明と思うんだけど、個人としてじゃなくコメ部と

しての活動何があったか覚えてる？」

米部長は部員の視線が集まる中立ち上がって話し始め、僕に質問してきた。

「えっと毎週金曜日は放課後におにぎりを作って販売するんですよ」

「正解。という訳で今日はおにぎりを作って販売するわよ。そろそろ時間ね」

米部長は壁に掛けてある時計を見ながら言った。何の時間なのだろうか？

「そうですね。それじゃ俺と大地で取ってきますよ。おヨネさん達は準備をお願いします。大地付いてきてくれ」

そう言うと、安食先輩は立ち上がり僕に着いて来るように促した。どこへ行くのか分からないがとりあえず僕は安食先輩に着いて行く事にした。

「いつてらっしゃい。よろしくね」

という、米部長の声で僕達は見送られた。米部長や入江先輩、寺澤さんも部室で何が準備を始めているようだった。

「安食先輩一体僕達は何をしにどこへ行っているんですか？」

「おにぎりを作るためのご飯を取りに行っているんだよ。おヨネさんの知り合いがやっているご飯屋に毎週届けてもらっているんだ」

「ご飯屋ですか？」

「ああ中々知られてない職業かもな。イベントなんかで大量にご飯がある時あるだろ？そういう所から注文を貰ったり食堂から注文を貰って商売しているんだよ。その用途に合った米をブレンドしてくれたりするんだぞ」

「へえそんな職業もあるんですね。そういえばどこに取りに行くんですか？」

「ああそこの渡り廊下の所だよ」

安食先輩は窓の外に見える渡り廊下を顎でしゃくりながら言った。そこは部室塔と教室や職員室のある本部塔とを繋ぐ渡り廊下だった。

た。渡り廊下の近くには教師用の駐車場と主に車が入るために使用される裏門がある。おそらくその駐車場にご飯屋さんが車で届けてくれるのだろう。

渡り廊下に着いてしばらくすると一台のカブが裏門から入ってきて僕達の方へ近寄ってきた。よく出前に使われるタイプのやつだ。僕と話していた安食先輩は、近付いてくるカブに気が付くと運転手に手を振った。

カブの運転手は渡り廊下とアスファルトのぎりぎりの所にカブを停めると颯爽とヘルメットを外した。どうでもいいが、カブのくせにフルフェイスヘルメットだ。

ヘルメットを脱ぐと中から綺麗な女性が現れた。歳は二十代後半といったところだろうか。僕は正直おじさんをイメージしていたのでこれは以外だった。

「こんにちは。いつもすみませんね」

「気にすんな。おっそっちの坊主は新入部員か？」

その女性は安食先輩の横に立っている僕に気が付き眼光鋭く僕の方を見ながら言った。

綺麗な顔に似合わない男口調と相まって威圧感がある。

「はい。昨日から入部させて頂きました古河大地と申します」

「昨日からか。そいつはフレッシュじゃねえか。まあ頑張れよ。それからあたいにそんな畏まった言葉なんて使わなくていいぜ」

その女性は僕の頭を乱暴に撫でながら言った。

「おっとあたいの紹介がまだだったな。あたいは武藤莉音ってんだ」
武藤さんはそう言うとともに僕の頭を撫でた。撫でたというよりも僕の神をぼさぼさにしていると言う方が正しいかもしれな。

「おっと、言いたい事は分かってるぜ。こんな男言葉使っというて莉音なんて可愛い名前のかよって言いたいんだろ？」

「あえっと……」

「あーあー分かってるからみなまで言うな。そいつはあたいも自分

で思ってるんだからよ」

全く思っていないと言ったら嘘になるが、僕はそんな事を初対面の人に向かって言うつもりは毛頭ない。しかし武藤さんは勝手に話を進めていく。

「上に五人男兄弟がいる末っ子で育ったからよ。こんな口調になっちゃまったってわけさ。女の子が生まれて嬉しかった親父が莉音って可愛らしい名前付けたらしいんだけどさ。それだったら性格も女の子らしく育てろってんだよな」

そう言う武藤さんは豪快笑った。ここまで豪快に男らしく笑う人は男でも見たことがない気がする。

「あの武藤さんそろそろご飯を貰えますか？」

そんな笑っている武藤さんに安食先輩が遠慮がちに言った。

「おおそうだったな。全くあたいはお喋りが過ぎて仕方ねえな」

武藤さんはそう言いながらカブの荷台から二つのプラスチックケースの様な物を取り出した。恐らく内部は保温性があるようになっていてこれにご飯が入っているのだろ。

「おい坊主これ持ちな。少しばかり重いかも知れねえが男だからでえじょうぶだな」

二つのプラスチックケースを重ねた状態で渡された。僕は急に渡されずっしりとした重さを腕に感じた。その重さにバランスを崩しそうになってしまったがなんとか体制を保つことができた。

「それじゃまた後で空き箱を回収しにくるぜ」

武藤さんはヘルメットを被りながら言った。

「いつもすみません」

「気にすんなってさっきも言ったろ。米によろしく言っといてくれそれじゃしばしの別れだ」

武藤さんはカブのエンジンを掛け一度エンジンを大きく蒸かすと僕ちに親指を立てて走り去ってしまった。しばしの間その走りあった後を呆然と僕は見てしまった。

「なんと言うか個性的な人ですね」

「ああそうだな。一つケース持つぜ」

そう言って二つ重なっていたご飯の入っているケースの内上の一
つを安食先輩は僕から受け取った。

「それじゃ戻るか」

「そうですね」

僕達は来た道と逆に戻り部室へと戻った。

普段あまり運動をしない僕はご飯の入ったケースを持って階段を
上ると息切れをしてしまった。毎朝長い坂を登って幾分運動をして
いるつもりになっていたがまだまだ運動の量は足りないようである。

部室に戻ると、机の上が綺麗に片付けられていた。その代わりに
机の上には水の入ったボールやしゃもじ、小皿に入った塩等が準備
されていた。僕と安食先輩は持ってきたご飯の入っているプラスチ
ックのケースを机の空いている所に置いた。

「古河君、セーフティーフード先輩お疲れ様でした」

声を掛けてくれた寺澤さんに目をやると白地にピンク色のフリフ
リが付いたファンシーなエプロンを着ていた。

こう言っではなんだが寺澤さんらしいエプロンである。

「いえいえ大丈夫ですよ」

こう言いながらも息を切らせてしまっているので説得力はなかつ
ただろう。

寺澤さんがエプロンを着ているという事は他の部員も着ているの
かと思いい目をやると、入江先輩のエプロン姿が目に入った。

入江先輩は以外にも水玉模様のエプロンを着ていた。かつてに純
和風のエプロンを着ているのではと想像してしまっていた。純和風
のがどんな物かは知らないが。

しかし、大和撫子の様な入江先輩が水玉の可愛いエプロンを
着るというのはギャップがあっという間だ。

さて、一番気になる米部長はというと…。

割烹着を着ていた。うんそうだね、純和風のエプロンってよく考
えたら割烹着だよ。どうせなら米部長にもフリフリのエプロンを
着てもらいたかった。確かに米部長驚くほど割烹着似合っているけ
れど、これは可愛いというより日本のお母さんという感じの似合い
方だった。

ここで、僕はある事に気が付いた。僕はエプロンを着なくていい
のだろうか、という事に。エプロンを着なければならぬにしても
僕は今日、エプロンは持ってきていない。どうせうればいいのだろ
う。ここは米部長に聞いてみよう。

「米部長、皆さんエプロン着ているんですが僕も着ないといけな
いんですか？その僕今日エプロン持ってきてないんですが……」

「あっ昨日持ってくる様に言うの、忘れてたわね。ごめんなさい」
米部長は申し訳なさそうに僕に言ってきた。

そして、ロッカーまで行き何か白い物を取り出して再び僕の元へ
戻ってきた。

「今日もところはとりあえずこれを着てもらえるかしら？」

米部長に手渡された物を広げるとそれは、割烹着だった。

「私の予備の割烹着がロッカーに入っていてよかったわ。さあさあ
ちやっちゃんと着る」

割烹着って男も着てよかったのかな？あんまり男の人が来ている
イメージってないけど。でも米部長が僕にわざわざ自分の予備の割
烹着を貸してくれたんだ。

これは着るしかないだろう。ってか予備って事は米部長はこれに一
度は袖を通したって事だよな。なんていうかその……ラッキー？し
かもこれってパールックだよな。カップルになる前からパールック
ってなんか照れるけど嬉しくね？

「米部長ありがとうございます。よろこんで着させていただきます」
僕はそう言ってブレザーを脱ぎ割烹着を着た。始めて着る物だっ
たので少し手間取ってしまったが米部長に手伝ってもらってなんと
か着ることができた。

最初もつと着ぐるしい物なのかと思っていたが意外に動きやすかった。着ている物もしっかりガードされているので割烹着とは僕が考えているよりも優れた物なのかもしれない。

「さあそれじゃおにぎり握るわよ」

米部長は机の上に置かれている、二つのプラスチックケースの内一つの蓋を開けた。

蓋を開けるとケースの中から蒸気が立ち上ってきた。それ共に食欲をそそるご飯の匂いもしてきた。

「大地ちよつと来て」

米部長は僕を手招きして呼んだ。僕は急いで米部長の隣へと行った「実際に私がおにぎり握って見るから見ててね」

米部長はまずボールの中に入っている水で手を湿らせると、その手に塩をふり掛けた。その後しゃもじで適量ご飯を取った。

「性格には決めた無いけどご飯はこの位の量取ってね」

米部長はしゃもじで取った量を僕に見せると、ご飯を自分の左手に乗せた。

「あなた三角握りはできる？」

「いえ、今までやった事がないので多分できないと思います」

「そうなんだ。それじゃよく見ていてね」

そう言うとき米部長はおにぎりを握り始めた。最初はただ手に乗せられていただけのご飯があれよあれよという間に三角形になっていた。

「凄いですね。こんなあつという間に綺麗な三角形になるんですね」僕は目の前で始めて三角おにぎりが握られるのを見たので地味に感動してしまった。

「はい、これ食べてみなさい」

米部長は握りたてのおにぎりを僕に渡してきた。好きな人の握りたてのおにぎりが食べられるのは嬉しい。これでこそコメ部に入った価値があるというものだ。

「それじゃ遠慮なくいただきます」

僕は舞い部長から渡されたおにぎりを一口かじった。

「おいしい」

「へへん。そうでしょ」

米部長は誇らしげだ。

「僕始めて人が握ったおにぎり食べたんですよ。コンビにとかで売っているおにぎりは食べたことあったんですが。塩だけで味付けされてるおにぎりがこんなに美味しいだなんて知りませんでした」

僕は残っていたおにぎりも全て食べてしまった。

「へえ初めてだったんだ。それも珍しいわね。お母さんに作ってもらったお弁当に入ったりしなかったの？」

「僕、いつもお昼はパンなんですよ。小中は給食でしたし」

「そうなんだ。ちなみに私はお昼はいつも米を食べてるわよ」

米部長はどうでもいいことで少し張り合ってきた。

「おにぎりってね確かにコンビにの物も美味しいけどやっぱり機械で握るより、やっぱり人の手で握った方が美味しいのよ。掌の細菌がおにぎりに付いてその働きで美味しくしてくれるのよ。あつ勿論ちゃんと手を洗って握らないといけないけど、それでも微量の細菌は残るのよ。で、そいつらが美味しくしてくれるって訳。おにぎり売る時は細菌が付いてるとか言っちゃ駄目よ。女性部員が愛情を込めて握ったからこんなに美味しくなるんですよとか言っておきなさい」

確かに今の話は聞いていて食欲のそそる話ではなかった。しかし、僕はそんなに嫌な気持ちにもならなかった。菌というのは人間の生活において重要な役割を果たしているという事を僕も元々知っていたからだ。パンだって菌が居なかったら作れないし。

米の話をしているのに対極のパンなんて例えを出したら米部長怒っちゃうかな。

「さっそれじゃ早速おにぎり作るわよ。大地はちょっと練習してみ

なさい。私教えるの苦手だから見よう見真似でやってみて」

皆、おにぎり作りに取り掛かった。しかし、安食先輩だけは少し離れた場所にある椅子に座ったままだった。おにぎり作りも家事の一種に入るのでやらないのだろう。

僕はさっき米部長がやっていた事を思い出し、まずボールに入っている水でまず手を湿らせた。その後塩を手にとった。

「大地もうちょっと塩手に付けていいと思うわよ。で、手に取ったらもみ手をして掌全体に塩を行き渡らせるの。基本的に放課後のこの時間におにぎり買う人は運動部の人が多いから少ししょっぱい位が調度いいの。まあ普通の一般生徒の中にも買う人居るけどね」

僕が手に取った塩の量を見て米部長が忠告してくれた。僕はまだこの段階までしか来ていないのに他の部員はもうおにぎりを握り始めていた。

米部長は勿論のこと、入江先輩、寺澤さんも結構なペースでおにぎりを握っていく。僕は機械がどの位のペースでおにぎりを握っていくのか知らないが、もしかしたら機械よりも早く握っているのではないかと思ってしまった。

と、見とれている場合ではない僕も早く握らなければ。

僕はしゃもじでご飯を取り掌に乗せた。

「あつ！」

僕は思わず声を出してしまった。

ご飯が熱かったのだ。僕は熱い焼き芋を手渡された時のようにご飯を両手に小刻みに移動させた。手を湿らせているお陰でご飯粒が掌にくっ付いてこないのは不幸中の幸いだ。というか、掌に付かないように湿らせているのだろうか。

というか、こんなに熱い物を顔色一つ変えずに握っている米部長達の感覚神経はどうなっているのだろうか？

「熱いでしょ。でも、握っていく内に慣れるから大丈夫よ」

米部長は笑いながら僕にそう言った。見ると入江先輩と寺澤さんも笑っている。

笑いながら僕の方を見ているにも関わらずペースは全く落ちていない。

「本当ですか？まさかこんなに熱いなんて思いませんでしたよ」

「本当本当。実際に同じ温度のご飯を私たちは握っているんだからね。人間の順応力って凄いのよ」

「そうですよ。古河君私たち別に手の皮が厚い訳じゃないですよ。面の皮は厚いかもありませんが。アハハハ」

寺澤さんは自分で言ったギャグに自分で笑っている。

「あら、寺澤さんその言葉遊び面白いですわね。面の皮が厚いという慣用句はあつかましいという意味で使われる慣用句でございますよね。手の皮が厚いという事から面の皮に持っていく、それを慣用句として違う意味に持っていくだなんて。しかも、熱いと厚いも掛かっていますわよね」

入江先輩は本当に感心したように言った。

「うう。私も自分で言って自分で笑つといてなんなんですが、ギャグをそこまで親切に解説されると恥ずかしいですよ」

寺澤先輩はわざとらしい泣き声で言った。寺澤先輩はこの位で恥ずかしがるとは面の皮は厚くないようだ。なんて事を考えたがこんな事言ったら全体的に僕が滑った事になりそうだったので口には出さなかった。

そうこうしている内に手に取ったご飯が握っても大丈夫な位の温度になっていた。

僕は見よう見真似で握ってみるが何度手を動かし握っても綺麗な三角形に近付いては行かなかった。

「米部長上手く握れないです」

僕が握ったおにぎりを米部長に見せた。

「気にしない気にしない。最初は誰だってそんなもんなんだから。えっとね、上手く言えないんだけど上に被せる方の手をこう拳の辺りから曲げてここで三角の角を握るのよ。で、テンポよくおにぎりを回しながら握るの。あんまり何度も握ってしまうと、手に付けた

塩が全部ご飯にくっ付いてしまつてしょっぱくなり過ぎるからね」
米部長はそう言う。と僕の目の前で説明しながら握ってくれた。米部長はご飯を手に手取つて十回程握ると綺麗な三角おにぎりになっていた。

僕はその倍以上の回数握つても綺麗な形にならなかったのに。

今まで握っていた、おにぎりをお皿に置き僕は再度手を水で湿らせてご飯を手に取りさっき、教えてもらった事を意識しながら握り始めた。

蓋を開けて少し時間がたったせいかご飯の熱さは一箇目程熱いとは感じなかった。

すると、まだ不恰好ではあるものの一度目よりは三角形に近い形に握る事ができた。

「うんうん。二回目にしては上出来じゃない。これからどんどん握つていけば、綺麗にそして早く握れるようになっていくわよ」

米部長は僕が握ったおにぎりを見ながらそう言った。

米部長たちはもう、一つ目ケースに入つたご飯を握り終わつて、二つ目に取り掛かっている。

「本当ですわね。今日始めて握られてそれ程上達されるなんて素晴らしいですわ。私が始めて握った時はそうわいきませんでしたわよ」
「そうなんですか？ちなにみ入江先輩は何歳の時に始めておにぎり握つたんですか？」

僕は米部長は入江先輩に褒められるの嬉しくて少しはにかみながら入江先輩に聞いた。

「そうですわね。確か私は三歳の頃だつたと思いますわ」

「……」

「ちなみに私は一歳の時に始めて握ったわよ。その時は三角おにぎりじゃなくて俵型をにぎつたけど。三角は二歳になってからだつたわね。初めて私が握った頃に比べれば上出来よ」

「……」

よかった。僕はどうかやら三歳児や一歳児にはおにぎりを握る能力

は負けていないようだ。

あれ？どうしたんだろさっきまで褒められて嬉しかったはずなのに、少し複雑な心境になってきたぞ。

いいんだ。これから頑張ってもっと上手く握れるようになってやる。

僕は三つ目のおにぎりを握るためにご飯を掌に乗せた。二個目を握った時にあまり熱さを感じなかったので油断していたが今度は、二個目の蓋を開けたばかりだったのでまた熱かった。

しかし、今度は声を出さずになんとか我慢する事が出来た。

「寺澤さんは何歳の時に初めておにぎり握ったんですか？」

「私は中一の時だから十二歳ですね。中学の家庭科の授業でおにぎりを握るテストがあったんですよ」

「へえ、そんなテストをする学校もあるんだね。僕が行っていた中学ではおにぎりのテストはなかったな。その代わりかどうか分からないけど、りんごの皮むきのテストはあったよ。だから僕は無駄にりんごで、うさぎさんを作れるようになってしまいました」

「うさぎさんですか！いいですね。家庭的な男の人って私好きですよ」

と、寺澤さんは僕に言っているはずなのだが何故か目線はチラチラと安食先輩の方に向けられていた。

安食先輩は少し離れた所に座っていたが、その視線に気が付いて僕達の方へ近づいて来た。

「寺澤お前この間は、『家事をやらない硬派な男の人私好きですよ。』って俺に言ってなかったか？」

安食先輩は途中寺澤さんの声色を真似て言った。あまり似てはいなかったけど。

「あれ私そんな事いいましたっけ？どっちにしろ乙女の恋心は秋の空並みに変わりやすいんですよ」

どうも、寺澤さんの言ってた事はあまり本気で受け取らない方がいいようだ。僕も後で安食先輩みたいに傷つくのは嫌だし。それに

僕には米部長という心に決めた人がいるし。

安食先輩は地味にシヨックを受けて、元の場所へと戻っていった。安食先輩を弄るのは、入江先輩だけかと思っていたがどうも寺澤さんからも弄られているようだ。といういか、寺澤さんは結構ノリで会話をしている気がする。見ている分には面白いからいいけど、俺も安食先輩同様に弄られたらシヨック受けるだろうな。

まあでも、根幹では皆良い人だから大丈夫かな。安食先輩もそのノリに合わせてリアクションを取ってくれているのだろうし。多分……。

僕は三つ目を作り終えて四つ目に取り掛かった。自分で言うのもなんだが確実に一回一回上手くなってきている。

僕が四つ目を作り終わると調度米部長達も全てのご飯を握り終わった所だった。

「よし、終わったわね。今からこれ売りに行くわよ。でも、その前に流石に大地の作ったのはまだ商品として出すわけにはいかないから、調度四個あるしこれは部員で味見しましょう」

そう言うとき米部長は僕が一番最初に作った不恰好なおにぎりを手に取って、頬張った。

それに続いて入江先輩、安食先輩、寺澤さんも各々僕が握ったおにぎりを手に取り食べた。

「最初のはやっぱりちよつとしょっぱいわね。でも、大地の気持がしっかり握られていて美味しいわよ」

「うんうん美味しいぞ」

「大変美味しゅうございますわ」

「おいしい！古河君の手にはいい最近がいるみたいですね」
皆食べ終わると口々に僕の握ったおにぎりを褒めてくれた。

自分で作った物を食べてもらって褒めてもらえるのがこんなにも嬉しい事だとは思わなかった。思えば自分で作った物を人に食べてもらったのはこれが初めてだ。

自然ともっと喜んでもらいたい、次はもっと上手く作れるように

なろうという気持ちになってくるから不思議だ。
まあ作ったと言ってもおにぎりなんだけどね。

二章 三部

「さっそれじゃ今日も売りに行くわよ。ご飯の美味しさを皆に伝えるのが私たちの役目だけど、まずは食べてもらわないとこの美味しさは分かってもらえないわ。だから、男子には可愛い女性部員が手作りました。女子にはカッコイイ男子部員が手作りましたって宣伝して売ってもいいわ。まあ二年生三年生にはもう、去年までの活動で私たちのおにぎりの美味しさ分かってもらっていると思うけどね。まだ新一年生の中には私達の活動を知らない生徒もいるから、どんどん売りながら宣伝しなさい。各自受け持つ場所は分かっているわね？」

「分かっていますわ」「もちろんです」「当然」

各々返事をする。と駄弁を売っている人が駄弁を入れるような箱におにぎりを入れてその箱を首から提げている。

安食先輩以外はエプロンを着たままだ。

ん？という事は僕も割烹着を着たまま部室の外に行かないといけないのかな？女性部員のエプロン姿は需要があると思うが男性部員の割烹着姿に需要があるとは思えないが……。

「じゃ大地は私に着いてきてね。それじゃ掛け声行っとくわよ。せーの」

「「「「ラブコメしようよ！」「」「」」」

今回始めて僕はこの掛け声を皆と一緒に言う事ができた。

掛け声が終わると各々部室を一目散に出て行った。

「それじゃ私たちも行くわよ。もうそれ来たままでいいから」

僕は割烹着を脱ごうとしていたけれども結局、脱ぐ前に米部長に連れ出されてしまった。

どうやら米部長の受け持ちは第一グラウンドらしい。僕達の高校

にはグラウンドが二面ある。その内第一グラウンドはおもに野球部が使用し、第二グラウンドはおもにサッカー部が使用している。

つまり野球部を相手にしないといけないという事か。野球部は変に初対面の人ともなれなれしくて正直絡み辛いんだよね。僕の経験則からだから全ての野球部員がそうなのは分らないけれど。

第一グラウンドに僕達が到着すると、練習をしていた野球部員達が目散に僕達の方へ走ってきた。

体育会系の人が自分目掛けて走ってくる姿は圧巻だった。そのまま僕は人に轢かれてしまうのではないだろうかと思った程だ。しかし、実際には勿論轢かれるはずもなく野球部員達はしっかりと米部長の前でストップし二列に整列した。

「野球部は毎回の事ながらすっかり統率が取れているわね。今日はちゃんと一年生もいるわね。ウチの部活にもまた新しく部員が入ったのよ」

そう米部長が言うのと野球部員の目が僕に向けられた。どうもここで一言挨拶しないといけないようだ。

「こんにちは。コメ部新入部員の古河大地って言います。よろしくお願いします」

「「「よろしくおねがいます!」「」」」

僕が挨拶すると、野球部全員が一切の乱れもなく返事を返してきた。僕はあまり大きな声で言わなかったのみそれに対して凄い気迫のこもった返事を返してもらってなんだか申し訳なく思ってしまった。

「この間は一年生裏山を走らされていなかったのよね。それじゃ今日は一年生から売りましようかね。ってか毎回思うんだけど、全員買わなくてもいいのよ。食べたいなって思う部員だけで」

部室では可愛い女の子が握ったという宣伝までしてまずは食べてもらいなさいと言っていた米部長だが、流石に部の強制力で無理矢理買わせるのは気が引けるのかそう言った。

「いえ。マジでうちらコメ部さんの毎週金曜日のおにぎり販売は楽

しみにしてるんすよ。練習途中で調度お腹が空いてきた時にまだ、暖かさの残る手作りのおにぎりはお腹に沁みて、日本人でよかったって思えるっす。なあ皆」

「「「うっす!」「」」」

部長が米部長に答え、部員にその回答でいいか問いかけると再度、一切の乱れもなく野球部員達は返事を返してきた。

野球部に関しては米部長の掲げたご飯の美味しさを広めるという目標は達成しているようだった。

「それじゃ一年前に整列しろ」

部長の掛け声で一番後ろに並んでいた一年生と思われる部員が前に掛けてきた。見知った顔も複数見受けられる。一年部員が前に来たことに伴い、二、三年の部員は一年が並ぶスペースを明けるため後ろに掛けていった。

この間十秒程であったがそのわずかな間に再び野球部員達は綺麗に並び直した。

「それじゃいつも通り販売するわよ。おにぎり一つ五十円、お一人様二つまでとさせていただきます」

米部長は一番後ろの野球部員まで聞こえるように大きな声でそう言った。

「今日は全部私がやるから大地はそのやり方見ててね。で、お客様が戻る時にありがとうございましたって声を掛ける事」

さつきとは対照的に小さな声で米部長は僕に囁いた。

そして、おにぎりの販売が始まった。

米部長は売る時に一人一人と言言二言会話をしているようだった。おにぎりの美味しさだけじゃなくてこういったちょっとした事が米部長がこの野球部員達に慕われている理由なのかもしれない。

なんか。僕のイメージとしては小料理屋の女将さんといった感じだ。調度割烹着も着ているし。

野球部員にありがとうございましたと僕が言うと「どうも」とか「お疲れ様です」等と言葉を返してくれた。

僕ぼ作ったおにぎりが今売られている訳でも、僕が今苦勞して働いている訳でもないけれど、こう言った言葉を返してもらえるのはとても嬉しかった。

僕も早く、米部長達みたいにおにぎりを上手く作れるようになり一人で売りに行けるようになりたいと思った。

部室でおにぎりを褒められた時といい、今野球部員に言葉を返してもらっている時といい僕の部活に対するモチベーションは上がりまくっていた。

ただ、好きな人の近くに居たいが為にしかも勘違いが元で入部したというのに人生とは不思議なものである。

まあ今もこうして米部長と一緒に放課後を過ごせている事がめちゃくちゃ嬉しいけど。

そうこうする内に野球部員全員がおにぎりを買った。一年生部員は先におにぎりを買ったものの、流石に先輩達より先におにぎりに口を付ける事に抵抗があるのか端の方で全員が買い終わるのを待っていた。

そして、はれて全員が買い終わり、皆一斉におにぎりを食べ始めた。おにぎりに齧り付く顔は皆いい顔をしていた。そんな顔を見せられてしまったら、またモチベーションが上がってしまうのではないか。

「凄い売れ行きですね」

第一グラウンドから校舎の方へ歩いて行きながら僕は米部長に話しかけた。

「お蔭様でね。野球部はウチの部活のお得意様なのよ。他の運動部もただけだね。私達が来るのをいつも待ってましたって言ってくれるのよ。そういうのってたとえお世辞でも嬉しくて頑張ろうって気になるのよね。それに食べてもらってご飯の美味しさを分かってもらえたら一石二鳥だしね。さあ後一頑張りするわよ。どっちかっていうと今からが大変よ」

何が大変だと言うのだろうか？あれだけ景気よく売ってまだこれ

から何かあるというのだろうか？

「後、十個位おにぎり残っているからこれを売らないといけないのよ。さっきは固定客だったけど、今からは廊下を歩いて一般の生徒に売らないといけないからね」

「ああそういう事ですか」

僕は靴箱で下穿きから上履きに履き替え校舎内に入った。

「おおにぎりいかがですかあ」

すると米部長は野球場での売り子のように声を張り上げ廊下を歩き始めた。廊下にはあまり人がいないが、廊下にいる生徒は皆その声を聞くと僕達の方へ視線を移した。

最初は声の主である米部長を見て、その後僕を見る。何故か僕に移された視線はなかなか外される事がなかった。注目を浴びることがあまり好きではない僕にとっては好ましくない状況だが、米部長は多分毎週こうやって活動しているので皆に知られているが僕は今日始めてこの活動をしているので注目を浴びているのだろうと、自分で納得していた。

するとそこに二人の女子生徒が僕達の元へやってきた。

「いらっしゃ。おにぎり一つ五十円、お一人様二つまでとなってます」

米部長は笑顔で言った。セールス用じゃなく素の笑顔というところにもお客様達は米部長に好感をいだくんだろうな。

「えっとそれじゃおにぎり一つずつください」

二人組みの女子生徒の一人が言った。米部長に言っているにも関わらず何故か二人の視線は僕に向いていた。

「はいはい。一つずつね。かしこまりました。それじゃ一人五十円ずつ頂戴いたします」

米部長がそう言うのと二人組みはやっと僕から目を離し財布と取り出しお金を渡しおにぎりを受け取った。

「「どうもありがとうございました」」

僕と米部長は声をハモらせて二人組みに言った。二人組みはおに

ぎりを手に持ち廊下を歩いて行った。この二人組みもおにぎりを食べて美味しいと思ってくれるといいな。

しかし、何故こうも僕の方を見るのだろうか？さっきの僕の考えにしては見られ過ぎている様な気がするが……。

「ちょっと大地も売り子やってみる？」

米部長は僕の方に顔を向けると聞いてきた。

「そうですね。折角なんでやらせてもらっていいですか？」

「もちろん」

首から提げていた箱を外し米部長は僕にその箱を僕に渡してきた。渡された箱を僕も米部長と同様に首から提げた。首とお腹の部分に重さが分散されて意外と持ちやすかった。先人の知恵とは素晴らしいものである。

「おにぎりいかがですか」

僕は勇気を出して声を出した。折角の申し出を断るのは悪いと思っ
て引き受けたものの、殆ど知っている人がいない場所で声を出して、物を売るというのはやっぱり少し恥ずかしい。

「大地声が小さいわよ。何恥ずかしがる事なんてないわよ。どうせやるなら何でも楽しまないとはいけないわよ」

「はあそんなもんですかね」

「ほら、どんどん声を出す！」

「おにぎりいかがですか」

「まだ小さいわよ」

自分では頑張っ
て声を出したつもりだったがまだ小さいようだった。

「米部長って最初から売り子の時声出せました？」

「そうね。私は地声が大きいし、わりかし最初から声出せたわよ。そうだあなた野球は好き？」

「はい。好きですが……」

何故急に野球の事など聞いてくるのか分からなかったが一応質問に答えた。これはどういった意図のある質問なのだろうか？

「それじゃ勿論野球場に見に行った事あるわよね？」

「はい」

これまた意図が分からない。僕と今から野球談義を始めたいのだろうか？

それならそれで結構だ。米部長も仮に野球好きなのであれば僕と同じ趣味だ。これを機に野球観戦と一緒にしたり出来るかもしれない。

「野球場にビールやグッズの売り子がいるでしょ。その人達の物まねをしているって思ってたってやらんさ。本当は駄弁の売り子の人の物まねがいいんだけど、最近の若者は実際に駄弁の売り子さんを見たことないでしょ？」

うん、話が繋がった。ここに持ってきたかったわけか。でも、米部長が野球場に売り子を知っているって事は少なくとも野球場に野球を見に行った事があるってことだよな。

つまり、すくなくらず野球にも興味があるって事だ。今日をその事を知ることが出来ただけでもよしとしよう。僕は無理矢理ポジティブに考えた。

「米部長。一言だけ言っていいですか？」

僕が改まった様な口調で言ったで部長はどうしたのかと疑問を浮かべた顔で僕を見た。

「米部長も十分最近の若者じゃないですか！」

僕はポジティブシンキングをした後にどうしても、米部長の言った最近の若者発言が気になったので、思わず大きな声で突っ込んでしまった。ここが廊下で僕の知らない人が大勢いる事も忘れて。

今までも何故か廊下にいる人の目が僕に向けられていたが、この大きな声で殆どと言っている程視線が僕に集まってしまっている。

米部長が周りを見渡している僕の方に手を乗せてきた。

「もう、ここまで注目を浴びちゃったら小さい声も大きい声も一緒だよ。じゃあもう大きい声を出すしかないね」

米部長はにっこりと素晴らしくいい笑顔で僕に言っていた。どう

せならこんな状況じゃない時にその笑顔を見たかった。

しかし、確かにここまで注目を浴びてしまったら同じだ。もう、
どうにでもなれ。

「ええ分かりました。僕も男ですよ。こんな状況になったのならや
ってやりますよ！」

僕はやけになってしまった。

「おにぎりいかがですか！」

僕は大きな声で言った。

米部長は隣でうんうんとうなずいている。

「こちらにいます可愛い可愛い部長の手で握られた美味しい美味し
いおにぎりですよ」

廊下にいた男子生徒の目が一斉に部長に向けられた。

「ちよっ何言ってるの！」

米部長は僕に向かって講義した。

「えっだって米部長が可愛い女子部員が握ったって言ってでも売り
なさいって言ったんじゃないですか。それに、米部長実際に可愛い
ですし」

「確かに言っただけど、それはゆうちゃんやますみちゃんの事を言っ
たのよ」

米部長は珍しく恥ずかしがっているようだった。自分が可愛いと
言われる事になれていないのだろうか。そんな恥ずかしがる米部長
も可愛かった。

米部長の抗議があつたが僕はその宣伝文句を止めずに言い続けた。
横で米部長が抗議をしている姿が可愛くて仕方が無かったのだ。

この時にはもう大きな声を出すことも恥ずかしいと思わなくなって
いた。自分の恥ずかしさよりも、米部長が恥ずかしがる姿を見たい
というウエートが僕の中で大きく占めていた。

僕の中にこんなSっ気が潜んでいるとは思わなかった。

僕の売り方がよかったというよりも、本当に米部長が可愛かったおかげだろう。廊下にいた複数の男子生徒がおにぎりを買ってくれたおかげで残りのおにぎりは後一個になっていた。

まあ実際にはこのおにぎり誰が握ったのか分からないので、米部長以外の女子生徒の可能性や、最悪男子生徒である安食先輩が作った可能性もある訳だがそこは言わぬが花だろう。

米部長はおにぎりを売る時にはちゃんと笑顔でありがとうございまずと言っていた。少しでも引きつった笑顔の様な気もしたがそれはきつと気のせいだろう。

僕は少し売る時に手間取ってしまう時もあったが、米部長が横から助けてくれたのでなんとか仕事をこなすことが出来た。

最後の一個を売ろうと廊下を歩いていると、同じクラスの正田さんが僕達の方へ向かって歩いてくるのが見えた。

「あっ……あの……」

正田さんは僕達の前に来ると申し訳なさそうに声をかけてきた。

「いらっしやいませ。おにぎりですか？」

相手はクラスメイトだけれども今はお客様。僕はこういった態度を取るか考えて、先程までと同じようにお客様に接するのと同じように話しかけた。

「は……はい。そのたまたま廊下を通り掛かったら古河さんがおにぎりを売っている声が聞こえたので」

「そうだったんだ。ありがとう。そして正田さん運がいいね」

「えっと何がですか？」

「おにぎりこれが最後の一個なんだよ」

「そうなんですか。よかったです」

正田さんは口ではよかったと言っているがその表情はそんなによろこんでいるようには見えなかった。まだ緊張しているのだろうか。

というか、僕もお客様として扱おうと思っていながら普通にタメ口をきいてしまっている。今朝正田さんと少し話したから、僕は幾分正田さんに対して人見知りをしなくてすんでいるのだろう。

というか、コメ部に入ってまだ二日目だけれどもコメ部に入る前よりも人見知りをしなくなったような気がする。たった二日でそんな事はあるのだろうか？自分が気付いてなかったただけで実はそこまで人見知りじゃなかったとか？

僕はそんな事を考えながらおにぎりを紙で包み疋田さんに手渡した。

「えっ五十円になります」

「はい」

疋田さんは肩に掛けていた鞆のチャックを開け中から水色を基調とした可愛い財布をとりだし、その財布から五十円玉を取り僕に手渡した。

「「ありがとうございます」」

僕は五十円玉を売上金を入れる袋の中にしまい、米部長と声をハモらせて言った。

疋田さんはその声を聞くと僕達から離れていくだろうとてっきり思っていたが、その場に留まっていた。

「ん？疋田さんまだ何かあるのかな？」

僕は不思議に思い疋田さんに問いかけた。

「あっあの……一つだけ聞いていいですか？」

疋田さんは相変わらず緊張したような声で聞いてきた。

「ん？何？」

僕はそれもすでに問いかけだしね、などという決まりきった文句を言わず素直に疋田さんの、問いかけを聞くことにした。

「あの……その……えっと……古河さんはなんで割烹着なんか着ているんですか？」

「……………」

野球部の面々があまりにこの割烹着に対してリアクションを取らなかったので完璧に自分の服装を忘れていた。

野球部の所に行く時まではこの格好を気にしていたのに。

これで、何故廊下で皆が僕の方に視線を向けていたかも納得でき

る。皆割烹着姿の変な男の姿を見ていたのだ。変と思って見ていたものの誰も僕に言う事はなかったのだ。

米部長はそんな質問をぶつけられて戸惑っている僕の横で声を殺して笑っている。無理矢理この格好で僕を連れ出したくせに酷い。Sっ気に目覚めたと思っていた僕だがどうやら、最初から周到に米部長に苛められていたらしい。やはりこの人何枚も上手だ。

「あっ……えっとこれはね……」

「ご、ごめんなさい。私余計な事聞いてしまいましたね。今の質問は忘れてください」

僕の戸惑いっぷりが端から見ても分かったのだろう。疋田さんはそう言くと、回れ右をして、走り去っていった。

「くっくく。なかなか面白い子ね。割烹着を指摘するとわね」

米部長はお客様である、疋田さんはいなくなると声を出して笑った。

「今の今まで自分が割烹着を着ているという事を忘れていましたよ。というか、この格好で無理矢理連れ出した米部長が笑わないでくださいよ」

僕は少しだけそっけなく言った。

「ごめんごめん。まさかあんな大人しそうな女の子が指摘してくるとは思わなかったからつい」

それには確かに同感だった。疋田さんは人に遠慮してそういった事を指摘できない人だと僕も思っていたから。

「最初一つ聞いていいですかって時は私に何か質問あるのかになって思ったのよね。少しちらちらと私を見ている気がしてたし」

確かに僕との会話中米部長の方を見ていた気はしていた。でも、それは言い方は悪いかもしれないが緊張からくる挙動不審の一つだと僕は思っていた。

「でも、それこそあんなに緊張する人が初対面の人に質問するなんて事あるはずないじゃないですか」

「そうそれよ。だからとっさに大地への質問に代えたのかなって思

ったの」

確かにそう考えれば辻褄は合うかもしれない。初対面の人に質問するよりもまだクラスメイトで喋った事のある僕に質問をした方がいいと考えたのかもしれない。しかも、僕の答えも最後まで聞いていかなたつかし。最初から僕への質問は興味がなかったのかもしれない。それになにより僕は今朝足田さんから、米部長に関する質問を受けている。もしかしたら、その事を米部長に直接聞きたかったのかもしれない。

でも、仮にそうだとして何故そこまでこだわるのだろうか。僕は一応朝質問に答えてクラスメイト達は足田さん経由でその答えを受け取り、一通りの好奇心は充たされたと思っていたのだが。

「まあ真実は闇の中ですよ」

「そうね。さっきの子しか答えは知らないからね」

「米部長、僕のクラスに乗り込んできて足田さんに聞いたですなんて事しないでくださいよ」

「やあね。そんな事するわけじゃないの」

米部長は否定しながらも、目は僕を見ていなかった。冗談のつもりで言ったが本当にするつもりだったのか？釘をさしておいてよかった。

僕達が部室に戻ると、他の部員は既に帰ってきていた。

「おっおヨネさんに大地おかえり」

僕田地が部室に入ると、椅子に座っていた安食先輩が声を掛けてきた。

「ただいま」

「ただいまです」

僕達は挨拶を返した。

入江先輩と寺澤さんは流しでおにぎりを作るのに使った道具や、おにぎりを作るのに使った箱を洗っている。安食先輩は家事が出来

ないので座っていたのだろう。

「私も手伝うわね」

米部長はそう言うのと僕から箱を受け取り、腕まくりをしながら流しの方へ向かった。

「それじゃ洗物はおヨネさん達に任せて俺たちはいくか」

安食先輩た椅子から立ち上がり僕に向かって言った。

「どこへ行くんですか？」

「借りた物を返しにだよ」

米屋さんが持ってきたご飯の入っていた箱を持ちドアの方へ向かって歩きだしていた安食先輩は僕の方へ振り向いてニヒルに言った。この先輩は本当に喋り過ぎない時はカッコイイな。

僕は安食先輩に続いてドアを出て行った。

よく考えたらまた割烹着を着たまま外へ出るようになってしまった。

着いた先は予想通り僕と安食先輩が数時間前にいた渡り廊下だった。恐らくご飯の入っていた箱の返却が目的だろう。

僕と安食先輩が数時間前に、武藤さんからご飯を受け取った場所に着くと調度裏門から武藤さんがカブに乗って入ってくるところだった。

これまた颯爽と渡り廊下にベタ付けし、カブを停めるとフルフェイスヘルメットを颯爽と脱いだ。

まるでビデオでも見るかのように同じ事が僕の目の前で繰り返されている。違うのは日光の強さだけだ。

「よう。坊主ども今日もしっかり売れたか？」

武藤さんはポケットからタバコを取り出して吸い始めた。学校内は前面禁煙なのだが……。

「はい。お蔭様で今日も全部売り切れました」

安食先輩はタバコに目をやったものの注意をせず武藤さんの質問

に答えた。まあ僕も注意できないだろうけど。後は先生達がこの現場を目撃しない事を祈るばかりだ。

「そいつは結構なことじゃねえか」

武藤さんは僕と安食先輩の頭をぐりぐりと乱暴に撫でながら言った。この歳になって一日に何度も自分より幾分年上の人に頭を撫でられる日があるとは思わなかった。

武藤さんは頭を撫で終わると、ポケットから携帯灰皿を取り出し灰をその中に落とした。一応最低限のマナーは持っているようだ。

「それじゃ箱回収していくぜ」

そう言うとき安食先輩が持っていた箱を受け取り式台に積み始めた。「武藤さんこれ今日のご飯代です」

安食先輩は内ポケットから茶封筒を取り出し武藤さんに渡そうとした。

安食先輩頭は武藤さんに撫でられて折角セットしていたのに見る影も無くボサボサになっている。

「かっいつもいらねえって言ってるだろ。ウチはガキから金を巻き上げるほど困っちゃいねえんだよ」

武藤さんは箱を積み終わると差し出された茶封筒に目をやりその後、安食先輩をじっと見ながら言った。

僕だったら茶封筒を直ぐにしまい逃げ出しそうな程迫力のある目をしていた。

「そう言ってもらえるのは嬉しいんですけどこっちもこれを武藤さんに渡さないと色々大変なんですよ。ここは一つ俺を助けると思っ受けてってくださいよ」

安食先輩は勇敢にも武藤さんに対してそう言った。

「うーん。そうか。そこまで言われちゃアタイとしても受けとらねえわけにはいかねえな。アタイが原因で問題が起こっちゃいけねえからな」

そう言って武藤さんは茶封筒を受け取り乱雑にズボンのポケットにしまった。

「こっちも本当に武藤さんには助けられえいるんですよ。あの価格でおにぎりを提供出来るのも武藤さんのお陰なんですから」

「それこそ気にすんじゃないかねえ。こっちは最初無料で提供しようと思っていたのに米の野郎が硬くて無償じゃ受けとらねえなんていいやがってよ。あいつは本当に頑固だよな。てめえら部員もアイツのしたじゃ大変だろ？まあそこもアイツのいい所なんだろうけどな。野郎共舞を支えてやれよ」

また、頭を乱暴に撫でられてしまった。

今鏡で見たら僕の髪型は酷いことになっているんだろうな。

「それじゃアタイはそろそろ失礼するぜ」

タバコの火を携帯灰皿で消しその吸殻をそのまま携帯灰皿に入れながら言った。

「本当にありがとうございました。また来週もよろしくお願いします」

そう言って安食先輩は頭を下げたので僕も慌てて頭を下げた。

「止めてくれ。アタイは人に頭を下げてもらえる様な奴じゃねえ。

来週も同じ時間同じ量同じブレンドでいいんだよな？」

「はい大丈夫です」

安食先輩は頭を上げて言った。

武藤さんはカブに跨りエンジンを掛けていた。

「ところでそっちの古河だっけ？」

「はい、そうです」

不意に名前を呼ばれて驚きながらも答えた。

「お前中々割烹着似合ってるぜ。くくくっははははは」

武藤さんはそう言うヘルメットを颯爽と被り走り去って行った。後姿からも体が揺れているのを確認できたので笑いは全く収まっていなかった。安食先輩はその様子を見ながら苦笑いをしていた。

今回はちゃんと自分が割烹着だって自覚あったし、あそこまで笑ってもらえると逆に心地がいいな。

「それじゃ部室に戻って帰るか。もう向こうの片付けも終わっている頃だろう」

「そうですね」

こうして僕の部活二日目始めてのおにぎり売りは終わったのであった。

三章 一部

週が明けて月曜日になった。

土日は別段なんのイベントもなく終わってしまった。花の高校生としてこんなことでいいのかとも思うが、どうせ僕を含め多くの高校生は休日が無為に過ごしているだろうと思うし、その使い方が間違っているとも思っていない。

まあ恋人でもいれば違った休日の過ごし方にでもなるのだろうか。その為にも米部長ともっと親しい関係になりたい。

あっ断っておくが別に休日の度にイベントが全くない訳ではない。たまにはイベントがある休日だって僕にもある。

そいえば土曜日はイベントとまではいえないかもしれないが、地元の本屋には行ったな。

妹が本屋に行くと言っていたので、ちょっとお米に関する本でも買って読んでみようかと思い一緒に行ったのだ。

地元の本屋はめちゃくちゃ大きくも、小さくも無い普通の規模の本屋だ。僕はそこでいつも漫画を買うくらいしか利用していない。

本屋に行ったものの予想以上にお米に関する本が置いてあり素人同然の僕には、結局どの本を買えばいいのか分からなかった。

しかし、本といえは漫画位しか買わない僕が、普段探さないお米に関する本を本屋で探すことにより、普段と違った本屋に見えてちよつと楽しかった。いつもの同じ景色が違った風景に見えたのもコメント部に入ったお陰かなと少し感謝した。

しかし、本当に最近僕はコメント部に酔狂しているな。なんでもかんでもコメント部に感謝している気がする。

好きな人と一緒に居ることを可能にしてくれているコメント部に無意識に感謝しているのだろうか？つとこれも酔狂しているって事かな？

そういえばお米の本結局分からなかったし、今度米部長と一緒に

本屋に行つて選んでもらおうかな。本も買えて米部長と一緒に時間を過ごせて一石二鳥だ。我ながらいい考えだな。

とまあここまで考えた所で調度学校に着いてしまった。校門を過ぎると下駄箱はもうすぐだ。

今日も、河内にあわよくば鞆を持ってもらおうと思ったが、今日は河内に会わなかった。全く河内のせいで昨日より労力を使うはめになってしまったじゃないか。うん、これは完全に逆恨みだな。

俺が基本的に登校時間同じなのに対して河内は結構ランダムだ。遅刻ギリギリの時もあるかと思えば、朝早くに学校に来ているときもある。

まあ高校に入って遅刻はまだ一度もしていないが。

僕が下駄箱に行くと、複数の生徒が上履きに履き替えていたが僕のクラスの生徒は見当たらなかった。

僕がなかば無意識で下駄箱から上履きを取り出すと下駄箱から手紙のような物が落ちてきた。否、ようなものも何もこれは手紙である。

靴を上履きに履き替えるという毎回学校の登下校の度に行っている、なんでもないイベントが一気に男子学生の一生に一度は遭遇してしまいたイベントベスト五（僕調べ）に入るであろうイベントに早変わりした瞬間である。

あっえっとこれは順当に考えてラブレターだよな。まさかこの僕が下駄箱の中にラブレターが入っているというイベントの当事者になろうとは。

とりあえず中身を見て見なくてはいけないな。さっきは河内と会わなかった事を残念に思ったが今となっては会わなくてよかったと思っっている。

僕はそのラブレターと思わしき手紙をブレザーのポケットに突っ込み、上履きに履き替えた。普段何も意識しなくても簡単に靴から上履きへの履き替えなんて出来るくせにこういった焦っている時に限ってなかなか上手く上履きを履けないのは不思議である。

僕は何とか上履きを履き終えて近くのトイレへと向かった。もちろん早歩きでだ。

トイレの中には幸いにも誰もいなかった。そしてすぐさま個室に入るとポケットの中からラブレターを取り出した。

よく見ると可愛いキャラクターが描かれている便箋の表に「古河大地様へ」と可愛い丸文字で書かれていた。

裏返してみたがそこには差出人の名前は書かれていなかった。

ドキドキしながら、糊付けされていた便箋の封を開けると中から一枚の紙が出てきた。

そこには宛名と同様可愛い丸文字で『放課後お話したい事があります。三組の教室ですつと待っています』と書かれていた。

ちよつと文体が硬い気もするけれどこれはもうラブレターで決定だよな。しかし、好意を寄せてくれているのは嬉しいが僕には、米部長という心に決めた人がいるからな。

しかたない、ここは放課後この子に会って男らしく断るか。

しかし、このラブレターどこにも差出人の名前が書いてないけれど誰がだしたんだろう？

まあ相手が誰でも断る事には変わりはないけれど。しかし俺って意外とモテるんだな。

手紙を便箋の中に戻して、それをサイドポケットに入れて個室を出た。トイレを出る時に手を洗いながらふと洗面台に設置されている鏡を見ると僕の顔は緩みきってしまっていた。

しっかり気を引き締め真面目な顔をしていたつもりだったが、僕の顔は正直物らしい。

しかし、流石にこのままの顔で教室に行くわけにはいかないな。自分でも鏡を見てこのにやけ方は気持ち悪いと思った位だから、回りからみたらどう思われるか知れたものではない。

という訳で、僕は鏡の前で少し気持を落ち着けてからトイレを出た。

トイレから出ると調度、河内に会った。

「おっこんな所で会うなんて珍しいな。朝から便所か？ 鞆も教室に置かずにトイレに駆け込むなんてよっぽど緊迫した状況だったんだな。間に合ったのか？」

この男何もこのタイミングで登校してこなくてもいいのに。

「間に合ったも何も別に用を足していたわけじゃないよ」

僕と河内は一緒に教室の方へ歩きだした。

「用を足していた訳じゃない？ じゃあトイレに何の用事があるんだよ？ まさか誰かをトイレに呼び出して苛めていたのか？」

「お前の発想力は面白いな。しかし、残念ながらそんなことはしてない」

「まあそうだろうな。後半は冗談で言った。じゃあ何故だ？」

「実はな……」

僕は回りに知り合いが居ないかどうか確認した。幸いな事に知り合いは居ないようだった。

「下駄箱にラブレターが入っていたんだよ」

僕は河内の耳元に口を寄せ小声で言った。しかし、男の耳に囁くとは気持の悪い事この上ないな。

「んな！ ラブレっむぐ」

「しっ、声がでかいって。大きな声をだすな」

僕は突如大きな声を出した河内の口を手で塞ぎながら言った。男の口を自分の手で塞ぐとは気持悪いこと、以下同文。

「ん、ん」

河内は声を出すことが出来ないので肯いている。僕の言う事を分かってくれたのだろう。

というか、口の隙間から僕の掌を舐める事はやめてほしい。普段掌に与えられない感覚が襲ってきて変な気分になるじゃないか。ってそんな事は今どうでもいい。

僕は掌を河内の口から離してやった。

この騒ぎで少し周りから注目を浴びてしまったので周りには愛想

笑をしておいた。

「というか、ここ数日俺よく周りから注目を浴びてしまっているな。注目を浴びるの嫌いなのに……。」

「はあはあ、で、ラブレターは誰からもらってどんな事が書かれていたんだ？」

口を押さえられていて息苦しかったのか、河内は肩で息をしながら聞いてきた。俺の掌を舐めるくらい余裕があったくせに。一応僕に配慮してくれて小声で喋ってくれているのはありがたい。

「差出人の名前書いてなくて誰からかは分からないんだ。でも、手紙に三組の教室で放課後待っていますって書いていたから、多分三組の誰かじゃないかな？」

「お前今人生に三度あると噂されているモテ期なのか？」

「いや別にそんなにモテている訳じゃないだろ。ラブレターなんて初めて貰ったし。あついや昔……。」

「なんだお前俺に断りもなくこのラブレター以外にも貰った事あるっていうのか！」

今まで小声言っていたが少し語気を強めて言った。

「貰ったって言っても幼稚園の頃だよ」

「幼稚園だと。相手は知香ちゃんか？梨花ちゃんか？千春ちゃんか？それとも……」

河内は幼稚園の頃同じクラスだった女の子の名前を片っ端から挙げていく。幼稚園のクラスメイトなんてよく皆覚えてるな。

名前を言われれば確かに思い当たるが、僕はそんなに直ぐに幼稚園の時のクラスメイトの名前出てこないぞ。特に女子は。

「ルリちゃんだよ」

「何？ルリちゃんだと！お前クラスのマドンナじゃないかよ！」

ルリちゃんクラスのマドンナだったのか。そう言われても正直僕にはピンとこない。ルリちゃんの漢字すら直ぐには思い出せないくらいだし。まあ幼稚園の時に漢字まで意識していなかったからかも知れないが。

「マドンナだったのか？というかもう十年位前の話だからノーカンだろ。問題は今だよ」

「まあルリちゃんの事は後々問い詰めてやるが、確かに今日貰ったラブレターの方が大事だな」

河内はなんとか落ち着いてくれたようだった。

「お前どうすんの？」

「えっ？ああ返事か。勿論断るよ」

「相手が誰か分からないのか？それちょっと勿体ないか？」

「相手が誰でもだよ。俺は今米部長一筋なんだからな」

「おうおう、一途だね。まだその恋も実ってないっていうのに」

河内は噓し立てるような言い方をした。

「これから実らせてみせるさ」

「全くその子も俺に惚れたら即行でオッケーだったのにさ。よりも寄ってこんな奴に惚れるから」

「まあ人徳ってやつだよ」

僕はわざと偉ぶった口調で言った。

「ところで何なら俺が放課後その子と会って断ってきてやろうか？」

河内は急に真面目な顔をして言った。人見知りをする僕がちゃんと断れるか心配してくれているのだろう。

「ありがたいけど遠慮しておくよ。そこはちゃんと自分の口で責任を持って断りたいしね」

「そうか。それならいいんだがな」

「それにお前あわよくば俺に振られたその子を慰めて自分が付き合おうと思っているだろ？」

「なんだ、バレていたか」

真面目な会話もいいけれど、僕たちにはこう言った少しおどけた会話が合っている。

そして教室に付いた。

僕は朝学校に着いて直ぐにトイレに駆け込んだので普段より教室

に遅く着いたので、いつも僕が教室に入る時より多くの生徒がもう、教室の中にいた。

この女子の中にラブレターの相手はいるのだろうか？

そう考えると途端に女子がみんな僕を見て、そわそわしているように見えてしまう。俺って実は自意識過剰だったのかな。

断ると心に決めているけれども、今日は一日ずっとそわそわして過ごしてしまうだろうな。

今日も学校生活が始まった。

僕はそわそわしているなかふと、ルリちゃんの事を授業中思い出していた。

ルリちゃんとは年長さんで初めて同じクラスになった。帰りのバスが一緒だったので年中の頃から顔は知っていたけれど、同じクラスになるまで話した事は一度もなかった。

僕のルリちゃんの印象は大人しい控えめな子だという事だ。僕も昔から人見知りをする子だったので、僕と少し似ているなと幼心に思っていた記憶がある。

だから、河内の言っていたクラスのマドンナという感想にはすぐにピンとこなかった。

ルリちゃんとはいつもバスを待っている間だけ遊んでいた。僕とルリちゃんが乗るバスには僕達のクラスからは誰も乗らず必然最後は僕とルリちゃんだけが教室のいつも残っていた。そのせいもあり自然とその時間を一緒に遊ぶようになっていたのだ。

その時間は遊ぶけれども、それ以外の時間を別に一緒に過ごすという訳ではなかった。ただバスに乗るまでの時間を一緒に過ごすだけ。そんな関係だったのだ。

そんなある日ルリちゃんからラブレターを貰ったのだ。

まあ男の子は往々にして女の子よりも精神の成長が遅い訳で……。僕はそのラブレターを貰うまで全くと言ってもいい程ルリちゃんを

異性として意識していなかった。

その結果ラブレターを貰ってルリちゃんを変に意識してしまうようになり、それまでのように自然に遊ぶことが出来なくなってしまうのだ。きっとこれが他の男友達にバレたらからかわれてしまうという意識のも働いたのだろう。

だから、僕はルリちゃんに自分の口でそのラブレターに対する答えを言っていない。

僕はそれからバスが来るまでの時間他のクラスの男の子の所に遊びに行くようになった。今思えば、あんな控えめの性格のルリちゃんが男の子にラブレターを渡すというのはとても勇気のいる行為だっただろう。

勇気を出してラブレターをくれたルリちゃんに、申し訳ないことをしたと思う。

結局幼稚園を卒園して違う小学校に進んでそれっきりルリちゃんが今どうしているかは知らない。

ルリちゃんもきっと僕のように、僕のことをたまに思い返す位だろう。もしかしたら、僕のことなんてもう忘れてしまっているかもしれないな。

なんだ、僕なんだかんで結構ルリちゃんの事覚えてるじゃないか。でも、やっぱり漢字は思い出せないな。

たしか瑠璃色の瑠璃じゃなかった気はするんだよね……。いい機会だし久々に卒園アルバムでも見返してみるかな。

こんな事を考えたり、クラスの女子の視線にそわそわしている内に放課後となった。

放課後僕はとりあえず部室へ顔を出すことにした。

ラブレターに時間の指定はなかったが、教室に生徒が残っている内は差出人も現れないと思ったからだ。

クラスで変な噂が立つのはその生徒も避けたいだろう。まして、その告白が成功するならいいが僕の答えはそうじゃないのだから。部室にノックしてから入ると、もう僕以外の部員は来ていた。今日は強制じゃないのに皆本当にこの部活好きなんだな。

まあ僕も来ているから人のこと言えないだろうけど。

部室に入って部員に挨拶をすませると、僕はすっかり僕の間所として定着した安食先輩の隣の席に腰を降ろし、椅子の隣に鞆をおいた。

隣の安食先輩を見るとぶつぶつと独り言を言いながら農薬の専門書とにらめっこをしているようだった。

さっき僕と挨拶を交わしたというのにもう自分の世界へと没頭しているようだった。

入江先輩と寺澤さんは机から少し離れた所でお喋りをしているようだった。安食先輩に配慮してか幾分小さな声で喋っているので、話の内容は分からないけれど。

僕は席を立て、米部長の所へ行くことにした。

米部長は自分の席で、日課のネットサーフィンをしているところだった。

米部長の後ろまで来て声を掛けるのは悪いかなと思っていると、米部長が僕のほうを向いた。

「よし！今日もちゃんと来たわね。まあと言っても今日は別に強制じゃないし、サボってもよかったんだけどね」

「ええ！もしかして米部長は僕が来ない方がよかったんですか？」僕は好きな人の来なくてもよかった発言に地味に傷ついてしまった。もちろん米部長はそういう意味で言ったのではないだろうけれども。

こう見えても僕は傷つきやすいガラスのハートを持つ花の男子高校生なのである。まあ冗談だけど。

「違う違う。金曜日なれないこととして疲れたんじゃないかなって思っ
てね。リフレッシュも大事よ」

おお米部長は逆に僕のことを心配してくれたらしい、好きな人に心配されるなんて嬉しいな。って僕はさっきと真逆の事を思っているな。

「リフレッシュなら土日でできましたよ。それに、この楽しい部活に來たほうがよりリラックスできますよ」

「あら。嬉しい事言ってくれるじゃない」

米部長に会うのが一番のリラックスです、と言いたいが流石にそれは止めておいた。一対一でならまだしも、他の部員もいる前でいう度胸は僕にはない。というか、また告白みたいにスルーされたら怖い。

「そういえば土日といえば僕、土曜日に本屋に行ったんですよ。それで、お米に関する本を買ってみようかなって思ったんですが、思いのほか種類が多くてどれを買えばいいか分からなかったんですよ。米部長お勧めの本とがあります？よかったら今度本屋に一緒に行ってほしいんですけど」

僕は、お米の本を出汁に米部長をさりげなく本屋に誘ってみた。

出汁にはしているが、お米に関する本が欲しいのは本当だ。これだけは言っておく。

「あっそうだったんだ。お米の本いっぱいあったでしょ？えっと大地はお米のどんな事に興味があるんだっけ？」

「まだ、よく分からないですよ。だからまずお米の基本が知りたいんですけど……」

僕は成り行きでこの部活に入ってしまったので、是が非でもお米のこれを勉強したいというのが無いのが現状だ。

ただ、この楽しい部活をより楽しむ為にお米の事をしっかり知りたいと思っている。

「そうねそれだったら……。大地ちょっと着いてきて」

そういうと、米部長は席を立ち上がった。

ん？もうこれから直ぐに本屋に向かおうというのだろうか。米部長とのデート（ただ本屋に行くだけ）は嬉しいけれども、今日はこ

の後ラブレターの差出人とも会わないといけないしな。

「大地何してるの？早く着なさい」

米部長の声が見るとそこは部室にある本棚があった。

あっそうか、お米に関する本だったらこの部室に基本的にあるのか……。折角今日は無理にしても米部長と出かける口実が出来たの思ったのにな。まあその分本を買いお金が浮いていいけど。

僕はそんな事を考えながら米部長がいる本棚の方へと向かった。

「えっとね。お米入門に調度いい本が確かあったのよね」

米部長は本棚にびっしりと詰っている本の背表紙を指でなぞりながら一冊一冊確認している。

本棚で何やらやっている僕たちが気になったのか、入江先輩と米部長も僕たちの所へやってきた。

「あら？何かお探しのですか」

「そうなのよ。大地がお米の入門編みたいな本が読みたいらしくて。確か入門に調度いい本、この本棚にあったよね？ちょっとタイトル忘れちゃって、どの本か分からなくなっちゃったのよ」

「えっとそれでしたら確か……」

入江先輩米部長からそれだけ聞くと、迷うことなくその本棚から一冊の本を取り出し米部長に手渡した。

「多分これでございますわ」

そう言って入江部長は一冊の本を本棚から抜き出した。

「ああそうだったわね。こんなタイトルだったわ。ゆうちゃんありがとう」

「入江先輩凄いです！もしかしてこの本棚のどこにどの本が入っているって覚えているんですか？」

寺澤さんがテンションの高い声で入江先輩に聞いた。今まで折角安食先輩に配慮して、大きな声を出していなかったんじゃないかって？

「別に凄くなんてございせんわ。たまたまその本の事を知っていただけです。それから……」

そう言う入江先輩は寺澤さんの口の前に自分の右手の人差し指を立てた。

「今日は安食さんが集中していますから、少し声を落としてお話ししましょうね」

「えへへ。そうでしたごめんなさいです」

寺澤さんは照れたような笑みを浮かべて頭をかきながら言った。

「じゃ大地これね。これでお米の基本は大丈夫だと思うわよ」

「ありがとうございます」

米部長から差し出された本を受け取りそのタイトルを見るとそこには『お米のい・ろ・はく基礎から始めよう』と書かれていた。

「それ貸してあげるから読んでみるといいわ。他にもこの本棚の中で読みたい本があったらどんどん読んでいいわよ。部員は家に持って帰ってもいい事になっているし」

「とりあえずこの本を読んでみますね。俺正直今まだお米がどうやって作られるのかもよく分かってないですし」

「まあ焦る事はないわよ。人は人、自分は自分なんだからね」

そう言う米部長は自分の席へと戻っていった。

僕も自分の席へ戻り、借りた本に目を通すことにした。

借りた本は本当に分かりやすかった。

お米作りの基本的な流れや、代表的な農薬の紹介、お米の品種改良の歴史や配合の系譜を簡潔に分かりやすく、しかしちょっとディープな部分まで書かれていた。

すっかりその本に夢中になり一気に半分読んでしまった。そこでふと時計を見ると、本を読み始めてもう二時間以上たっていた。

やばい、流石にそろそろ教室にいけないといけない。

「すみません。ちょっとこの後用事があるんで先に帰らせてもらいますね」

僕は慌てて、『お米のい・ろ・はく基礎から始めよう』を鞆に

入れながら言った。

「あらそうなの？それじゃ私達も一緒に帰りましょうか？」

米部長は時計を見て時間を確認すると、他の部員に言った。

「あついえ僕のことは気にせず米部長達はまだゆっくりしといてください」

本当なら米部長と途中までも一緒に帰れるのは嬉しいけれども、今日は教室によらなければならない。そうするときと教室に行く理由を聞かれてややこしくなってしまう。

好きな人に嘘を言うのは心苦しいが今日は仕方ないだろう。

「そう？」

「そうなんです！まだ安食先輩も集中しているみたいですし、ここで僕と一緒に帰ってもらうのはなんだか心苦しいです」

僕はそう言いながら、もうすでに出口の方へと向かっている。

「それじゃ米部長、安食先輩、入江先輩、寺澤さん今日はお疲れ様でした。明日の部活も楽しみにしています」

僕はそう言って一礼して部室を出て行った。

はぁ俺馬鹿だ。確実に今のは挙動不振だっただろう。しかも、先輩達の返礼も聞かないまま部室を出てきてしまった。これってめっちゃ失礼な事だよな。

思いの他本に集中してしまい、時間がたってしまい焦ってしまっただけ。明日の部活大丈夫かな……。でも、きっとあの人達なら大丈夫だな。どんな僕でも受け止めてくれると思う。きっと……。

それよりも今の問題は、どう断るかだよな。下手に遠まわしに言っただけで傷つけてしまったかもしれないだろうし。

どうやって話を切り出そうかと考えている内に一年三組の教室に着いてしまった。

ただでさえ、遅くなってしまったので教室前でうだうだと考えて相手をこれ以上待たせる訳もいらないと思い僕は意を決して教室のドアを開けた。

そこには一人の女性が立っていた。当然だが男子生徒じゃなくて

よかった。

その女性とは疋田帆乃さんだった。僕の考え通り差出人はクラスメイトだったのだ。

ドアを開けた僕に疋田さんも気がついたようだった、僕の方を向いてはいるが恥ずかしいのか、視線は下の方に向けられていた。

僕はそんな疋田さんの方へと歩いていった。

疋田さんは教室の隅方にいたので、疋田さんの所へいくまで少し時間がかかってしまった。その間僕と疋田さんは一言も喋れなかった。

疋田さんの前に僕は立つと勇気を振り絞り、声をかけた。

「えっと……手紙くれたのは疋田さん？」

流石にラブレターという単語を使うのは恥ずかしかったので手紙と言ってしまった。

「はい……突然すみませんでした」

まあ今の状況からしてまず間違いないとは思っていたが疋田さんで合っていたらしい。

やばい流石にこのシチュエーション緊張する。下手したら米部長に告白した時よりも緊張しているかもしれない。

「あの……私好きなんです」

疋田さんは耳まで真っ赤にして僕の目をしっかり見ながらそう言うてきた。

しまった……。告白をされてしまった。僕は正直面と向かって好きですと言われる前に、気持は嬉しいけどごめん、と断りを言うつもりだった。

その方が僕にも相手にも良いと考えていたから。

疋田さんはまだ僕の目を見据えている。早く答えを言わないといけないけど、緊張と焦りから上手く言葉が出てこない。

「あっそ、その……」

早く答えないと。勇気を振り絞って告白をしてくれたのだから。

「その……気持は嬉しいんだけど……ごめんね」

僕は疋田さんにとって残酷な宣告を口に出して伝えた。

最初から断るつもりだったにしてもやっぱり、いざ口に出すと気が重くなるな。人は誰しも自分に好意を寄せてくれている人を嫌いになんてなれないだろうから。むしろその逆で僕なんかを好きになつてくれた事が嬉しい。

でも、僕には既に好きな人がいる。だから今告げた答え以外の事を疋田さんに告げることはできない。

僕は男女の友情を否定しないから、友達になる事はできるかもしれないけれどここで「友達でいいなら」などと言ってしまったら、変に疋田さんに希望を与えてしまうかもしれない。

それなら、今まで通りのたまにクラスの中で会話を交わす程度の関係がお互いにとっていいだろう。

「そうですか……」

疋田さんは僕を見据えていた視線を、僕の足元へと落とした。

顔を下げているから表情は見えないが、肩が少し震えているのでもしかしたら泣いているのかもしれない。

凄い罪悪感がある。

でも、これは仕方のない事だここで玉虫色の返事をする位ならちやんと、答えた方がいいんだ。

僕は自分に言い聞かせるように心の中でそう繰り返した。

「そうですよね。考えてみたら、そうに決まっていますよね……」

疋田さんは僕に背を向けてそう言った。声は少し震えている。やっぱり泣いているんだ。

「急にお米が好きだからコメ部に入りたいって言ってもそんな簡単に入れるわけ、ないですよね……」

僕は、泣いている疋田さんに声をかける事ができない。多分これ以上自分の言葉で疋田さんを傷つけてしまう事を恐れているのだろう。

……………?

?

？

今コメ部って言った？

「ちよつと正田さん！」

僕は教室を出ようとしていた正田さんに慌てて声をかけた。

「な、なんでしょうか？」

正田さんは僕の方を向かずに返事を返してきた。

「今……コメ部に入りたいって言った？」

僕は恐る恐る聞き返した。

「はい……そう言いました……」

やはり聞き間違えではなかったようだ。

「あのコメ部なら入部できると思うよ」

「本当ですか！」

正田さんはさっきまでの沈んだ声が嘘のような明るい声を出した。今までクラスでだって正田さんのこんな声は聞いた覚えが無い。よっぽど嬉しかったんだろうな。

正田さんは身を翻し僕の方へと歩み寄ってきた。正田さんの目はまだ少し赤い。やっぱりさっき泣いていたんだな。

というか今更だがコメ部に入れなかった事がそんなに悲しかったのだろうか？

「本当だよ。まあ普通に部活動だからわざわざ僕を通さなくても直接部室に来て大丈夫だったと思うよ」

「その……。やっぱり最初は少しでも知っている人に相談しないと不安だったの……」

正田さん少なからず僕を頼りにしてくれたのかそれは純粹に嬉しいな。

「それじゃ今日はもう遅いし明日の放課後一緒に部室に行って紹介するって事でいいかな？」

「はい。よろしくおねがいします」

はずんだ声でそう言うのと正田さんは深々と僕に頭を下げた。

「そんな頭なんて下げないでよ。クラスメイトなんだし当然でしょ」
「古河さんって優しいんですね」

そう笑顔で僕に言っていると、疋田さんはさっき教室を出ようとしていた時とは全く違う軽やかな歩みで教室を出て行った。

僕はその後姿をしばし呆然と見送ったのであった。

とりあえず……。

最初、なんでダメと言ったのか聞かれなくてよかった。あの手紙をラブレターと勘違いしてましたなんて、恥ずかしくて言えない。

というか、手紙だけじゃなくて普通「好きです」と面と向かって言われたら告白だと思ってしまおうよ。若干一名告白だと思わない人を僕は知っているけど。

けど、こんな早とちりをするようじゃ僕も米部長に文句は言えないな。主語って大事だよな。

とりあえず明日疋田さんを部長達に紹介するか。

河内に今日の事なんて言おうかな……。

次の日、授業中女子の視線を感じる事は全くなかった。というか、当然かラブレターすら実は昨日もらってなかった訳だから。

視線を感じていたのはやはり僕の自意識過剰だったわけだ。

河内には昨日ラブレターなんてものは貰っていないし、そんな話はない夢でも見たんじゃないか？という意見を無理矢理通した。自分が勘違いをしていたなんて自分の口から告げたくなかったから。

僕がそう言っていると、河内は意味ありげな表情をして僕の方に手を乗せうんうんと肯いていた。うるせえ慰めなんていらねえよ。

三章 二部

帰りのホームルームが終わると僕は正田さんと一緒に廊下を歩いていた。勿論一緒にコメ部の部室へと向かっているのだ。

正田さんは少し緊張した表情をしている。初対面の人に会うというのは誰でも緊張するもんな。米部長が僕にしてくれたみたいに、僕も正田さんの緊張を少しでもほぐしてあげたらいいんだけど、僕にそんなスキルないしな……。

基本的に人見知りが二人集まると、会話が全くなくなる。そんな典型的な例が僕と正田さんだろう。

しかし、沈黙も気まずいよな。多分正田さんも同じような事を考えているだろう。でも、会話のきっかけが見つからない。

「もう入梅しているっていうのに最近あんまり雨降らないね」

沈黙に耐え切れず何か話さなくてはと、考えた挙句こんな事を聞いてしまった。天気の話は会話の導入としては、常套手段だろう。「そうですね」

「ねー」

会話終了。僕に「そうですね」とだけ答えられてそこから、会話を発展させる技術はなかった。それにしても「ねー」ってなんだよ「ねー」ってこれじゃ会話をする気がないと思われても仕方ないぞ。というか、正田さんも「そうですね」とだけ返してくるとはて……。もつとキャッチボールが出来るような言葉を返してくれる事に期待したのに。もしかしてこの沈黙に耐え切れていないのは僕だけなのか？

まあ自分から会話を始めるとして盛り上げるのを正田さんに期待する僕もどうかと思うけど。

結局その後一言もお互い喋らないまま部室の前に着いてしまった。本当に自分の社交性の無さにがっかりするな。コメ部に入って初対面の人とすんなり打ち解けて少し自信が付いていたところなのに。

あれは僕が頑張ったんじゃないくて、他の部員に異常に社交性があったからすんなりいったんだな。

「えっとそれじゃ着いたし入ろうか？」

「はい」

正田さんの賛同を得て僕はドアをノックして部室へと入った。そこにはやっぱりもう既に全員が揃っていた。

「こんにちは」

僕の挨拶に部員の面々が僕に視線を移し、挨拶を返してきた。そして正田さんが僕の後から入ってくると、視線は僕から正田さんへと移っていった。

「あれ？隣のクラスの正田さんじゃないですか。どうしたんですか？」

僕が正田さんの事を紹介するより早く寺澤さんが聞いてきた。

「その子ますみちゃん知り合いなの？」

「知り合いというか英語の授業で同じクラスだから顔と名前を知っているだけです」

寺澤さん正田さんの事は覚えてたんだ。僕も英語一緒に受けているのに覚えていてくれなかったけど。

「あっえっと紹介しますね」

僕がそう言う与会話の流れから寺澤さんに向けられていた視線が再度僕に向けられた。

「こちらは僕のクラスメイトで正田帆乃さんです。お米が好きでコメ部に入部したいと相談を持ちかけられたので、今日部活に連れてきました」

「正田帆乃といいます。よろしくおねがいします」

僕の紹介が終わると正田さんは一歩前に出て自分でも挨拶をした。正田さんの耳は真っ赤になっている、どうやら昨日耳が真っ赤になっていたのはただ単に、人見知りからくる恥ずかしさだったらしい。

「そうなんだ。こちらこそよろしくね。コメ部は来るものは拒まず、

去るものは追わずだから入部は大歓迎よ！私は……」

「コメ部部長の田中米先輩ですよね」

米部長の自己紹介を遮るように疋田さんは言った。

「あれ？私の事知ってるんだ。あっそっか、大地と同じクラスだから私が乗り込んだ時の自己紹介聞いてただろうしね。でも、それが元でわ新入部員が入ってくれた訳だから大地のクラスに乗り込んだのは正解だったわね」

「あ、えっとそれもありますけど、部活に入るのであれば同じ部活の先輩や同期の方のお名前位知っておくのが礼儀かと思ひまして、失礼ながら調べさせてもらいました」

疋田さんは視線を下に向けて、あまり大きな声で言った。

「そちらの制服をかつこよく着崩されている方が、安食先輩ですよ。私もセーフティーフード先輩って呼んでもいいですか？」

疋田さんは顔を安食先輩の方に向けて言った。しかし、視線は安食先輩の目を見ていないようだ。

「いかにも俺は安食だ。勿論セーフティーフードと呼んでもらって構わないぞ。遂に俺のニックネームも今まで接点のなかった下級生に知れ渡るまでになったんだな。ハハハハハハ！」

安食先輩は自分でカッコイイと思っているのであろうポーズを取り豪快に笑っている。

「そして、そちらの気品溢れる女性が入江先輩ですよ。私も先輩のような気品溢れる女性になりたいです」

こんどは入江先輩の方を向いて言った。しかし安食先輩の時と同じように目は合わせていなくなっていた。

「あらあら、お上手ですこと。たとえお世辞であっても嬉しいですよ。疋田さんよろしくね」

入江先輩は優しい微笑みを見せて言った。この人本当に雅だな。あの方言暴走さえなければ……。

「寺澤さんはいつも英語の授業で博識ぶりを拝見させていただいています。部活でも色々教えてくださいなね」

今度は寺澤さんの方を向いて言った。幾分顔見知りで安心していいのか今度はちゃんと寺澤さんの目をみて言っているようだった。というか顔見知りなら、俺じゃなくて寺澤さんに相談すればよかったのに。その方が同性同士気兼ねなくよかったんじゃないかな。

まあ同じクラスという事で僕を頼ってくれたのかな。

「博識なんてとんでもないよ。疋田さんも頭いいじゃん。一緒にテスト勉強とかしようね！」

僕が部員を紹介するまでもなく疋田さんはコメ部の面々の事を既に知っていた。

というか、恥ずかしくて視線を合わせていないとはいえ結構自分から喋るじゃないか。もっと緊張して全然喋れないかと思っていたので少し安心した。

でも、それじゃここに来るまでの間なんで僕とあんまり喋ってくれなかったんだろうか。もしかして僕って嫌われている？

あつても昨日は少し話したしな。僕の事を優しいって言ってくれたし。

「それじゃ新入部員が入ったという事で、あれやりましょうか」
おっあれと言うとあれだな。確か女性の場合は胴上げなんだよな。俺は突然もみくちやにされて驚いたけど、疋田さんも急に胴上げなんかされて驚くだろうな。

「せーの！」

「「「「「ラブコメしようよ！」」「」「」」」」」

米部長の合いの手を合図に僕たちは掛け声を言った。というか、他の人は気にしていないみたいだけど、今疋田さんも一緒に言わなかった？

この掛け声の事までもしかして調べていたのかな。それとも僕の聞き間違えかな。

掛け声を言い終わると僕たちは疋田さんを取り囲んでいた。

「さあやるわよ。男子は下半身を持っちゃダメよ！本当なら手袋をめちやくちや重ねさせるんだけど今日は時間がなかったからね」

「あ、あの私スカートの下にクォーターパンツ履いてますし大丈夫ですよ」

いや、そういう問題ではない。たとえパンツが見えなくても女兒の生足に触れるという事が問題なのだ。

僕と安食先輩は黙って疋田さんの後ろの方へと移動した。

「はいそれじゃ疋田さん力抜いて」

疋田さんは一瞬困惑したような表情を見せたが、体の力を抜こうとしてくれているようだった。

僕と安食先輩は疋田さんの肩に手を乗せて後ろにひっぱった。疋田さんの体が後ろに倒れると皆の腕に疋田さんに乗せた。

「それじゃ行くわよ」

米部長のこの掛け声を合図に胴上げは始まった。

「わっしよい！」

「わっしよい！」

「わっしよい！」

「わっしよい！」

米部長のわっしよいから始まり安食先輩、入江先輩、寺澤さんが神輿をかつぐ時のような掛け声を順番に言った。

これは順番的には次僕が言わないといけないだろう。

「わっしよう！」

僕は恥ずかしさをこらえながら言った。でも、この感覚少し癖になりそうだ。

僕の掛け声を最後に胴上げは終わった。一人一回言ったら終わることになっていたのだろう。

胴上げを止めて疋田さんを足元から優しく降ろそうとしたけれども、疋田さんは上手く立てずに結局床に寝そべるような格好になってしまった。

今まで多分疋田さん胴上げなんてされたことなかったんだろ。まあなかなか高校入学までの人生で胴上げをされる機会がある人の方が少ないだろうし。

「疋田さん改めてよろこそ。コメ部へ」
そう言つて米部長は手を差し出し疋田さんを立ち上がらせたのだつた。

そこからは数日前、僕にしてくれたように、今度は疋田さんへの歓迎の意をこめてのお茶会が開催された。

今日は僕はお客様じゃないので、準備を手伝おうとしたがやはり断られた。

机には僕と、安食先輩、疋田さんが座っている。僕と安食先輩はいつもの席に座り、疋田さんはいつも米部長が座っている場所の向かい側に座っている。

疋田さんも手伝いを申し出たがやはり、今から行うのは疋田さんの歓迎会ということで断られていた。

そんなこんなで三人だけ机に残っている。

疋田さんは席に座って机の上においている自分の手に視線を向けている。

安食先輩が疋田さんに会話を振っているが中々会話のキャッチボールにまでは発展しないようだ。僕はそんな会話にならない会話を横から眺めていて、たまに安食先輩が僕に話を振ってくるので相槌を打ったりしている。

安食先輩は会話の進め方上手くて、僕はどんどん会話に引き込まれたけれど疋田さんはそうではないようだ。安食先輩の持ちネタ何故家事が出来ないのか？という事にもさほど関心を示さなかった。そんな様子に僕は、同性との会話ですら疋田さん緊張しそうだもんな。異性二人との会話でいつも異常に緊張しているんだろうと思ひ半ば無理矢理納得した。

これだったら疋田さん、向こうで同性同士準備に参加した方が楽だったんじゃないかな。

あまり会話の弾まないまま、お茶会の準備が整ったようだった。

米先輩が部員の湯飲みにお茶を注いでいった。（今日もやはり入江先輩と安食先輩の湯飲みは紙コップだった）

「それじゃお茶会を始めましょうかね。ささやかだけど、帆乃ちゃんの歓迎会のつもりよ。楽しんでね。それじゃ乾杯！」

「「「乾杯」」」」

僕達は米部長の音頭で乾杯をした。疋田さんもちゃんと言ってくれたので安心した。僕を含め部員皆、今日の主賓である疋田さんの湯飲みに自分の湯飲みを当てた。

疋田さんは自分に注目が浴びて少し、戸惑ったような表情を見せながらもそれに対応していた。

「疋田さんって先週の金曜日、おにぎり買ってくれたわよね？」

乾杯が一段落して落ち着いた所で米部長が疋田さんに聞いた。

「はい。おにぎりとおいしかったです」

「ありがとう。そう言ってもらえると私たちもコメ部をやっていたかがあるわ。今度は疋田さんもおにぎりを作って売る側になるのよ。一緒に頑張っていきましょうね」

そう言って米部長は疋田さんと握手をするべく席から立ち上がり、身乗り出して手を差し出した。

疋田さんも少しビックリした表情をしたものの、席から立ち上がりその握手に答えた。

「おお！いいですね。青春って感じがします。私も混ぜてくださいよお」

そう言って寺澤さんも立ち上がり握手に手を重ねぶんぶん振り始めた。

そこへ入江先輩と安食先輩も、何やら二人で目配せをして立ち上がり手を重ねた。

これって僕もやらないといけない雰囲気だね。ここで、僕一人だけやらないのも空気が悪くないそうだし。

そう思い僕も立ち上がり手を重ねようとした所で握手は終了してしまった。

僕が呆然と立ち尽くしている中他の部員達は疋田さんも含めて席に着いてしまった。

「全く、大地が参加するの遅いから握手終わっちゃったじゃないの」「はあすみません」

僕は呆然と立ち尽くしたまま平謝りをした。

「くっくく、冗談よ冗談。そんなに呆然としないでよ」

そう米部長が言うと、他の部員も笑を堪えていたのか一斉に笑い始めた。疋田さんも控えめではあるが確実に口元は笑っていた。こんな状況になってはもう僕も笑うしかない。

僕も笑いながら自分の席に座ったのであった。というかこのオチ……。僕ってもしかして部員に三枚目だと思われてる？そのポジシヨンは安食先輩だと思っていたのにな。

まあ疋田さんも笑ってくれた事だしよしとするか。

その後は疋田さんも少し緊張がほぐれたのか、少しずつではあるが会話をしてくるようになった。

そして、お茶会もお開きとなった。

安食先輩以外の皆で後片付けをして今日の部活は解散の運びとなった。

僕は疋田さんが少しでも今日のお茶会で部活になれてくれたのならしいなと思いつながら、帰宅の徒についたのであった。

疋田さんがコメ部に入部してから二週間とちょっと経った。

疋田さんは少しずつではあるが部活のメンバーとなじんできているようだった。特に米部長によく懐いている。二人で部室の中でも色々な話をしているようだった。

ただ、僕と安食先輩と話す時はまだ緊張するのか口数が少なくなっ
てしまい、未だにあまり会話のキャッチボールが成立しない。

最初この部に入る時は僕に相談してくれたのになんだかちょっと寂

しい。米部長も取られちゃった気がするし。まあ元々僕のものでもないけど。

先週の金曜日は、僕のおにぎりも合格を貰い売ることができた。正田さんは一発で合格を貰っていたけれども……。

そして売るのは米部長と正田さんが一緒に回り、僕は一人で売ってまわった。

特定の部活に売りに行くのではなく、校舎の中を回るよう言われな何とか受け持ったおにぎり全部を売る事ができた。その中には僕が握ったおにぎりもあり、それを食べてもらって美味しいと言ってもらえたのは本当に嬉しかった。

もちろん今回は割烹着姿では売っていない。おにぎり握るときは持参したエプロンを使ったし、売る時はちゃんと脱いで行った。

正田さんの入部は僕にとっていい刺激となっている。お米が好きだと正田さんは言っているが正直お米に対する知識は僕と同じくらいのもうだった。お互い切磋琢磨して部活と一緒に頑張っていきたいと思っている。

その為にも正田さんと仲良くなりたいたいと思っているのだがなかなか上手くいかない。それどころか、僕はたまに正田さんが僕のことを嫌っているのではないかと感じる時がある。

正直嫌われるような事をした覚えはないんだけどな。まあクラスも部活も同じなんだし、これからゆっくり仲良くなっていけばいいか。まさか僕が自分から女性と友人として、積極的に仲良くなりたいと思う日がくるとはな。基本的に受け身体質の僕としては珍しい事である。

毎日部活に行く時は正田さんを誘って一緒に行っている。けれども関係は全く進展せず、未だに会話のキャッチボールも一対一ではままならない状況である。

それでも毎日誘う俺っていつの間にか積極的になっていたのかな。多分、正田さんが僕に最初に入部したい旨を伝えてくれたのが嬉しかったんだろうな。

今まで人に相談をされるという経験が無いに等しいからな。それに
足田さん可愛いし。

そして金曜日。週に一度のコメ部全体としての活動おにぎりはん
ばいである。

僕は今回で三回目。まだ米部長や入江先輩、寺澤さんの早さには
かなわないが、僕も徐々にではあるが早くなってきている。家でも
練習をしている効果が出ているようだ。

速さでいうと、僕の方が少し足田さんより早い。けれども形の点
で言えば足田さんの方が数段綺麗である。

こういった点からお互い切磋琢磨したいんだけどな。

予断だけれども、足田さんは小学校の時に家庭科の授業で手作り
したエプロンを家から持ってきて使っている。その為に僕たちが小
学生の頃に流行っていたキャラクターがそのエプロンにはでかでか
とプリントされていた。

しかし、可愛い人は何を着ても可愛いものである。

おにぎりを作り終わると僕達は各々部室を出ておにぎり売り
に行った。

僕は先週同様校舎の中を売って歩くようにと言われた。先週は米
部長と一緒に回っていた足田さんも今日からは一人で売る事となっ
た。

僕は早速担当の場所へと向かった。勿論今日はエプロンを脱いで
制服姿だ。

「おにぎりいかがですか。握りたてのおにぎりですよ」

僕は担当の場所に着くと大きな声を出して言った。流石に三回目
ともなると少し慣れてきているので、恥ずかしいとあまり思わなく
なっている。

僕が一声をあげると、すぐにお客さんが寄ってきてくれた。その

中には先週も買ってくれたお客さんが結構いる。

先週買ってくれるた時に来週も同じ時間位に来ますと声を掛けたのがよかったのだろうか。リピーターになってくれたという事は少なからず、僕達のおにぎりに満足をしてくれたという事だろう。素直に嬉しい。

以前は部員の数が少なく、僕が今受け持っている場所を回るのは後回しになっていたらしいが、人数が増えたからこの場所も最初から回ることができるようになったのだそうだ。

ここで新しい顧客を獲得して、米の素晴らしさを少しでも感じて貰えるように僕もしっかり頑張らないとな。

僕が校舎の最上階である三階まで売り歩くとおにぎりは全て売り終える事が出来た。僕の担当している校舎には、職員室も入っている事もありお客さんの中には先生方の姿もちらほら見受けられた。先生方も放課後はやっぱりお腹が空くんだな。

おにぎりも売り終り部室へと歩を進めていると、現在は物置として使われている教室の中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「だからもういいって言っているでしょ。全くあんたは……」

「ご、ごめんなさい」

一人の声は、疋田さんの声だ。疋田さんの担当はここじゃない筈なのだが……。

というか、何か揉め事かな？

僕は首から下げていたおにぎりを入れる箱を外して隅に置くと、中からばれない様に窓から中の様子を覗く事にした。

中にいたのはやはり疋田さんだった。その疋田さんは何故か床に座っている。肩を震わせているのでもしかしたら泣いているのかもしれない。

もう一人は意外な人物だった。

僕のクラスメイトの中川さんだ。中川さんは僕のクラスの女子の中心的なグループのリーダーをしている。人望が厚くそのグループだけじゃなくクラスの女子全体のリーダー的存在だ。

確か疋田さんも中川さんのグループの一員だったよな。しかし、こんな人気の無い教室で何をしているのだろうか？

「もういいわよ。どうせあんた私に有益な情報なんて持ってこれないでしょ？」

「で、でも。私頑張りますから、も、もう少しコメ部にいさせてください」

疋田さんは中川さんの足にしがみ付いて懇願し始めた。

「ああもううるさいわね！」

足にしがみ付く疋田さんを中川さんは振り払った。

これは虐めだろうか？ 会話に情報やコメ部という単語も入っていないな……。

そうか……。そういう事か！ 僕は一人自分の頭の中で合点するとその教室の中へ入ることにした。

僕がドアを開けて教室に入ると二人の視線は僕へと向けられた。

「あら、こんにちは古河君。えっとこんなところでどうしたの？」

中川さんはさっきまで聞こえていた声とは全く違う声で、僕に話しかけてきた。

疋田さんは立ち上がり制服を治している。目が赤くやはりさっきまで泣いていたようだ。

「えっと調度この前を通りかかったら、部活の仲間の疋田さんの声が聞こえたから」

「そうなんだ。えっとね、誤解したままじゃいけないから言っておくけど、これ虐めとかじゃないからね。だって、私と帆乃は大の仲良しだもん」

そう言って中川さんは、制服を治していた疋田さんの手を取り中の良さをアピールしてきた。

「そ、そうなの。古河君誤解しないでください。私と中川さんは仲良しなの。さっきのはちょっと遊んでいただけ」

疋田さんはそう言って、中川さんの言葉を肯定した。

「疋田さんいいんだよ。僕はもう全部この状況のこと分かっている

から。そうだよ、中川さん。いやルリちゃん」

僕は正田さんに優しい口調で言いい、その後中川さんに視線を移した。

「何を分かっているというんですか？」

中川さんは少し強い口調で僕に言った。

「僕は何故急に正田さんがコメ部に入部したいと僕に言ってきたのか。そして、入部したのかずっと疑問に思っていた。けれど、正田さんは熱心に部活に顔を出しているから最近では、本当にお米が好きなのかなと思いついていた。こんなの最初はお米に関心が無かったのに入部した僕が言うのもなんだけどね。けれど、この状況でやつと僕は正田さんがコメ部に入部した理由が分かったよ」

僕はここまで一気に言った。まるで、探偵が推理を披露する場面のような自分の事ながら思ってしまう。

僕は意外と、こういった演出が好きなのかもしれない。

「古河君、私は本当にお米が好きだからコメ部に入ったんですよ。それ以外の理由なんてないです」

「帆乃黙りなさい。古河君がこういった考えを持っているのか聞きますましよう」

正田さんが蚊の囁くような声で言うのを遮るように中川さんは言ってきた。最初僕に対して掛けてくれた優しい声はもうそこにはなかった。

「それじゃ僕の考えを遠慮なく言わせてもらおうよ」

言って二人に順番に目をやった。返答はなかったが僕はそれを肯定と受け止めて、発言を続けることにした。

「正田さんが僕に最初に声を掛けてきたのは、米部長が僕たちのクラスに乱入してきた次の日だった。その時正田さんは僕に、米部長と谷口先生の間を聞いてきた。そして、僕はグループの女子達に僕から聞いた内容を正田さんが話しているのを目撃している。その中にはもちろん女生徒の中心である中川さんもいた。確かに噂好きの女生徒達はこの話が気になっていたんだろう。しかし、君に取っ

て本当は質問内容なんてどうでもよかったんだ。疋田さんが僕に近づく口実が欲しかっただけなんだ。僕が部活動でおにぎりを売っている時に、疋田さんが買いに来たものが理由だ。そこで、疋田さんは見てしまったんだ。僕と米部長が仲良く会話をしているところを。実際米部長も疋田さんの視線を自分に感じたと言っていた。そして、より僕と米部長を監視しやすくなるように疋田さんをコメ部へとおくりこんだ」

僕は二人の前をうろうろしながら言っている。僕は何を勘違いしているのか、探偵のような断定口調を使っているが内心はドキドキしている。

それを悟られない為にもうろうろと歩いて緊張を表にださないようにしているのだ。

「その考えではまるで私が古河君に惚れていて、その米部長と仲良くしているのを聞き嫉妬して、帆乃を潜入させたみたいじゃない。私言っておきますけどごめんなさい古河君の事好きでもなんでもないですよ」

中川さんは僕の考えに反論してきたが、その視線は僕に向けず自分の指先に向けられていた。爪のゴミでも取っているのだろう。こんな茶番早く終わらせて直ぐにでも帰りたいという表情をしている。「それはそうでしょうね。僕に対する中川さんの気持は好意ではなく嫌悪から来ているのだから。そうでしょ？中川さん。いや……ルリちゃん。この間卒園アルバムを改めて見返してやっとな、君が幼稚園の頃にラブレターをくれたルリちゃんだと気が付いたよ。苗字は勿論だけど、劉備の劉に官吏の吏で劉吏と読むのは珍しいからね。それで気が付いたよ。幼稚園の頃に勇気を振り絞り渡したラブレターに、僕が返事をしなかったことにまだ怒っている。それで、僕が他の女性と付き合い幸せになるのが許せなかったんだ」

中川さんは自分の指先から目を離し、今は僕に視線を向けている。顔には驚きの表情が見て取れた。

どうやら僕の考えは当たっていたようだな。一安心だ。ここであ

たみかけよう。

「そして、何故疋田さんをスパイに使ったのか。それは君が疋田さんを苛めているからだよ。さっきのこの教室での行動が何よりの証拠だ。疋田さんは例え中川さんの命令でコメ部に入部したのだとしても、もう僕たちの大切な仲間だ。これ以上疋田さんに手を出すとこののなら、コメ部が黙ってはいないからそのつもりでいてね。それから……。幼稚園の時返事をせずに今まで逃げていてすみませんでした」

僕は頭を下げた。この謝罪が遅すぎるとは自分でも思っている。幼稚園の頃大人しかかったルリちゃんが苛めをするような子になってしまった原因が、もし僕が返事をしなかった事によるショックも含まれているのであれば、虐めの原因の一部は僕にもある。

沈黙だけだ教室の中に流れている。僕は頭を下げたままだ。

「えっととりあえず頭を上げてくれますか」

中川さんが沈黙を破り、声を出した。

僕はゆっくりと頭を上げた。その時中川さんは頭を抱え俯いていた。疋田さんは困ったような顔をして僕と中川さんの顔を交互に見ていた。

「古河君って私と同じ幼稚園だったんですか？」

「……えっと中川さん私立愛心幼稚園だよね？」

中川さんが僕の考えの根底を覆すような質問をしてきた。僕は思わずその質問に即答できなかった。

「どういうつもりだろうか。ここまで来てまだしらばっくれるつもりだろうか？」

「あら。本当に私と同じ幼稚園だったんですね」

しかし、中川さんは今度はすんなりと同じ幼稚園だったという事を認めた。

「ほら、幼稚園のバスを待つ間よく一緒に遊んだじゃない」

「ちよっと待ってください思い出します」

そう言う中川さんは額に手を当てぶつぶつと呟き始めた。

僕は少し心配になってきた。さっきまでああも自信満々に探偵気取りで話していたが、もしかして僕の考えは外れていたのだろうか。いや、きっと中川さんは僕に凶星を突かれ焦っているに違いない。

中川さんが考えている間、僕も脳裏に色々なことが浮かんた。

「ああ！」

中川さんが大きな声を出し手を打った。

「思い出しました。幼稚園の時最後のバスに乗るのはクラスに二人だけしかいなかったもので、仕方なく遊んでいた相手は古河君だったんですね」

「ん？仕方なく遊んでいた？僕は中川さんにラブレターまで貰っているのに仕方なくとはどういう事なのだろうか？」

「古河君あなたの考えは全てにおいて間違っていますよ。帆乃ちよっと古河君と二人で話をするから教室から出てなさい」

疋田さんはそう中川さんに言われると肯いて教室から出て行った。一言も喋らなかったのはもしかして、中川さんに黙りなさいと言われていたからだろうか。

「人払いをしてどうするつもりなの？今度は僕に暴力を揮うつもり？」

「そんなつもりはさらさらありません。あなたの誤解を解く上で帆乃に聞かれると困る話もあるから、出て行ってもらっただけです。まず第一に私はあなたにラブレターを出した事などありません。あなたに好意を寄せた事がないのですから、その反動に嫌悪を抱くという古河君の考えはありません」

「そんな事はないはずだよ。僕は君から手紙を貰った。その手紙にはしっかりと君の文字で『すきです』と書かれていたんだ」

「それも含めて思い出しました。私は確かにそのような手紙をあなたに渡しました。しかし、その手紙はあなた宛ではなかったんですよ。私はその手紙を隣のクラスのユリちゃんに渡してもらいたかったんです」

「え？僕はそんな事言われた覚えてないよ。というかユリちゃんて

女の子じゃない！」

「私はちゃんとあなたに伝えたはずです。しかし、あなたは走って私の前から逃げてしまった。そして、次の日から私と遊ばないようになっちゃいました。私は女の子が好きだというのが気持悪がられたのだと思ってしまいました」

「えっと。それじゃ僕が中川さんにラブレターを貰ったというのは僕の勘違いかな？」

「そうです」

今度は僕が頭を抱えてしまった。僕は手紙を見て舞い上がってしまい中川さんの話が頭に入ってなかったんだろうな。幼稚園の時の淡い思い出は僕の勘違いだったのか恥ずかしい。

けれど、それではこの中川さんが疋田さんを苛めている状況は何なのだろうか？

「話を続けてもいいですか？」

「お願いします」

僕は頭が混乱し自分の考えがまとまりそうに無かったので、続きを話してもらうことにした。

「何故、帆乃がコメ部に入部したのかを話しますね。私は正直女の子が好きです」

そうなんだ。さっきラブレターが実は女の子宛だったという話を聞いて薄々は思っていたが、今も女の子が好きなんだな。この性癖を知られたく無いから疋田さんを外に出したのだろう。

「けれど、流石にクラスメイトに女の子が好きだと言う訳にもいきません。でも、女子は恋の話とかが自然と出てくるので体外的に大人の男性である、谷口先生が好きだと言っているんです」

「それで教室に乗り込んできた米部長が、谷口先生と仲が良さそうだったから二人の事を調べさせる為に疋田さんを送り込んだんですか？」

僕が混乱しながらもその状況から考え付く答えを中川さんに言った。

「いいえ」

また僕の考えは違っていたらしい。

「私が送りこんだ訳ではありません。しかし、グループのリーダーというものをやっていると周りが私の恋路を気になるらしくて……。田中さんと谷口先生の間係をしつかりと調べる為にも、古河君に近付いてコメ部に入部して調べるべきだとの意見が出てきて……」

「その役目に気の弱い疋田さんが無理矢理やらされる事になったんだね」

「違います」

また違った。

「帆乃は自分からその役割を買って出たんです。私は本当に谷口先生が好きな訳ではなかったので、そんな事どうでもよかったのですが、何故か帆乃が乗り気だったんです。きつとあの子この役目を達成してグループの中で地位を高めたかったんでしょうね」

「じゃあさっきこの教室での事はどう説明するの？僕はこの目で中川さんが疋田さんを床に座らせて酷い事を言っているのを聞いたよ」
「それはこんな何の為にもならない事を帆乃にやめて欲しかったからです。まあ確かに酷い言い方になってしまっていました」

ここまで言う中川さんは急に顔を下に向けた。

「ここからは少し内緒の話です。あつもちろん私が女性が好きだというのも秘密ですよ！」

今まで比較的落ち着いた声で話していた中川さんが少し大きな声で言った。

「人の性癖を言いふらす趣味は僕にはないですよ」

「私は古河君に女の子が好きだから避けられるようになったのだと思ひショックを受けました。だからそれから女の子が好きだということは誰にも言わず、隠して生きてきました。あなたの事は小中と上がつていく内に忘れてしまいました、その事だけはずっと覚えていました。だから、好きな女の子には逆に冷たくして私に近付かないようにしてきました」

疋田さんは真剣な顔で僕の顔を見据えながら言った。

「えっともしかしてその論理からいくと、中川さんって疋田さんを好きという事？」

僕がそう言うのと中川さんは顔を赤らめて俯いてしまった。

「どうやら凶星だったらしい。」

「ええそうよ！私は帆乃と出会った時から恋に落ちたわよ！でも、どうせ帆乃は私の気持を受け入れてくれない。だからずっとあの子に冷たくしているのに一向に私の前から消えてくれないの。絶対に恋人にならない人がずっと一緒にいるのがどんなに辛いかあなたに分かる！」

中川さんは顔を上げると真っ赤にしたまま声を荒らげて言った。
すると、教室のドアを開けて疋田さんが入ってきた。

中川さんの声大きかったし明らかにさっきの話聞かれてしまっているよな。

「帆乃、あなた聞いていたのね？」

中川さんは俯いて動揺したような声を上げた。

疋田さんはその問いに対して肯くことで答えた。

しかし、中川さんは俯いているのでその首肯を見ていない。

「えっとその違いの、あついや違わないんだけど違いの。その好きというのはその、あええっとうんど。そう、友達として好きという事なのよ」

中川さんは動揺してしまいさっきまでのクラスの中心的存在という雰囲気が全くなくなってしまっている。

「というか、僕はどうすればいいんだろうか。」

「もういいんです」

動揺している中川さんに向かって一言落ち着いた口調で疋田さんが言った。

その口調には今までのおどおどした感じは見受けられなかった。

「もういいって。私の言い訳はもういいって事？そうよね、同性が好きなんておかしいわよね。私から離れていっちゃうわよね」

さっきまで好きという事を疋田さんに否定していたのに、自分から同性が好きだと言ってしまったているぞ。よっぽど同様しているんだな。

「わ、わわ、私から離れていってもいけど一言だけ言わせて。今まで冷たくしてしまつてごめんなさい」

そう言つて中川さんは教室から出ようとドアの方へ歩いて行つてしまつた。

「違います！」

そんな中川さんを大きな声を出し疋田さんが引き止めた。

その声に反応し中川さんは歩と止め振り向いた。しかし、顔は俯いたままだ。

「私も劉吏ちゃんの事が好きなの！」

顔を真っ赤にして疋田さんが言つた。

中川さんは顔を上げて、疋田さんを見据えている。その顔には驚きの表情が浮かんでゐる。

いやいや、この展開僕が一番驚いているから。

「私は劉吏ちゃんのそばにずっといたい。どんなに冷たくされても傍にいたい。劉吏ちゃんの力になりた。劉吏ちゃんが好きな男性と結ばれて幸せになるなら、それが私の幸せだからこの役目も自分から引き受けたの。私は劉吏ちゃんから離れたりしないよ」

疋田さんは最後のほうはもう目から涙を流しながら言つていた。

「あえっ……」

中川さんの目も涙が溢れてきている。

疋田さんが中川さんのところまで歩いて行き優しく抱きしめた。

二人とも抱き合つたまま泣きじゃくっている。

僕、もう帰つていいかな。なんか完璧部外者の空気になっているのだが。

「ねえ劉吏ちゃん」

「な、何？」

「私に向かつて好きって言つて。さっきは教室の外からしか聞けな

かったから」

「うん」

そう言う中川さんは少し間を置き目から涙を拭い真剣な顔になった。

「帆乃好きです。私と付き合ってください」

「はい。よろこんで」

そう言う中川さんは目に涙を浮かべながらも満面の笑みで答えた。その表情は僕から見ても本当に可愛かった。

二人は落ち着きを取り戻すと僕の方を向いた。

「古川君が勘違いの考えを堂々と私達に言ってくれた事がきっかけで、付き合えるようになりました。勘違いしてくれてありがとうね」
勘違いを感謝される日がくるとは思わなかったな。

「えっとまあ、結局虐めじゃなかったし僕も安心したよ。えっとこれから色々大変だとは思うけど頑張ってね」

「はい！」

満面の笑みで返された。

というか、この二人手を恋人繋ぎしているぞ。こんなに相思相愛なのなら僕がきっかけを作るまでもなく近いうちに付き合っていたんじゃないだろうか。

「あの私これでコメ部にいる理由が無くなってしまったので辞めますね。本当にご迷惑おかけしました。折を見て部員の皆さんにもご挨拶に伺います」

「あっうん」

もうどうにでもなってくれ。

「それじゃ失礼します」

二人は僕に一礼すると見詰め合いながら恋人繋ぎをしたまま仲良く教室を出て行った。

僕恥ずかしいじゃねえか！

勘違いの考えを探偵気取りで堂々と述べてそれが完全な間違い。しかも、幼稚園の時の想い出まで勘違い。

途中から二人の世界に入って僕蚊帳の外。

少し人見知りが少なくなったからといって調子に乗りすぎたかな。とりあえず、部室に戻って正田さんが部活を辞めた事を説明するか。

しかし、これどう説明したものかな……。

あっ正田さんのおにぎりを入れていた箱も持って帰らないといけないや……。

外を見れば雨まで降ってきやがった。

四章 一部

僕は部室にもどると一連の出来事を説明した。流石にありのままを話す訳にはいかないと思ったので谷口先生を好きなクラスメイトがいて、谷口先生と米部長の関係を誤解してしまいその調査をする為に入部してきて、今日その誤解が解けたので退部する事になったと伝えた。勿論二人が付き合う様になったとは言っていない。

二人がまだ、公言していないのに僕が言っているのか分からなかったからだ。

「はいはい、了解」

正田さんが退部したという事を話すと米部長は以外に軽い口調で返してきた。正田さんの退部をもっと残念がらると思っていたのにな。

「まああの子がお米を好きでこの部活にいるんじゃない事はなんとなく分ってたしね。ねえ皆」

「おっ、おヨネさんもやっぱりそう思ってたんですね」

すぐさま安食先輩が米部長に賛同した。

「ええ。私もそう思っていましたわ。でも、一生懸命活動なさっていたので最近は勘違いかと思っていたところでしたわ」

「です。私も思ってたです。自分からお米を好きって言って入部してきたのに、知識は古河君並でしたし。あれ？でもそういうえば古河君もお米を好きって言って入部してきたんですよね。なんなんだろうこの正田さんと古河君の感じ方の差は……」

途中から寺澤さんは独り言のように小さな声で呟いていた。それでもしっかり聞こえているぞ。独り言なら周りに聞こえない様にしてください。

それにしても、この部活のメンバー皆なんというか。人の本質を見抜く力もあるのだろうか。僕が全く違和感を覚えなかった正田さんに対して、バリバリの違和感を覚えていたんだな。

「やっぱり皆そうよね！」

すみません。ここに一人だけ例外がありますが……。

「それに正式には、疋田さんは退部じゃないわよ」

「えっ？退部じゃない？」

米部長の言葉にビックリしてすぐさまオウム返しで聞いてしまった。

退部じゃないってどういう事なのだろうか。もしかして、米部長こんな穏やかな顔をしているけど内心ではめっちゃ怒っていて、退部より思い除名にするとか言うのだろうか？

この部活に除名という罰則があるかどうかは知らないけれど……。「そんな深刻な顔してどうしたの？」

言われて気が付いた。僕は深刻な顔をして米部長を見据えていたようだ。内心で考えていただけで、表情には出していなかったつもりなのに。

「退部じゃないっていうのはあの子が正式な部員じゃなかったからよ」

ますます意味が分らない。僕は確かに疋田さんが米部長に入部届けを提出するのをこの目で見ています。それなのに何故正式な部員じゃないのだろうか。

ほかの部員の方へ顔を見遣ると、この発言に関しては僕以外の部員も驚いた表情をしていた。

「あら。なぜ正式な部員じゃなかったのか分らないっていう顔をしているわね」

これも、見透かされていた。この人本当はエスパーなのではないかとたまに思う時があるぞ。

しかもこれだけ人の事を見透かすくせに自分が告白された事には気が付かないし……。泣きたくなるね。

「なに簡単な事だよトソン君」

米部長はノリノリで立ち上がり右手の人差し指を立てながら言っている。

「私が入部届けを受理してないからよ」

「えっ受け取ったのに受理してなかったんですか？」

「そうよ。さっきも言ったけど帆乃ちゃん本当にお米が好きで入部したんじゃないみたいだったから、しばらく様子をみようかなと思って私の所で入部届けを止めてたってわけ。退部する時の手続きも面倒臭いしね」

「そうだったんですか。もしかして僕の入部届けもまだ受理してないとか……？」

「大地の入部届けは提出された次の日の朝すぐさま受理したわよ。逆に大地は絶対に辞めないって私の勘が告げてたからね」

とりあえず僕の入部届けが受理されていた事にはほっとした。

「まあ何はともあれまたこの五人で再出発ですね。おヨネさん」

「そうね。これからも皆で頑張っていきましょうね」

米部長がそう言うのと僕や入江先輩、寺沢さんは各々肯いた。

「それじゃ今日は二回目になっちゃうけど気合を入れる意味でもう一度あれやっときますか。せーの！」

「」「」「ラブコメしようよ！」「」「」

全ての片付けも終わり帰る時間となった。（予断だがいつもよりご飯の入っていた容器を返すのが遅くなった上に雨まで降っていたので、武藤さんには少し恨み節を言われてしまった）

「さてと、帰りましょう。外雨降っているけど皆傘持ってきた？」

「私はこんな事もあるうかとこの時期は置き傘しているです。えへへ、えらいでしょ」

「寺沢さん偉いですわよ。私は折りたたみ傘をいつも鞆に忍ばせていますわ」

得意げに言う寺沢さんの頭を撫でながら入江先輩が言った。

僕も入江先輩同様にこの時期はいつも鞆に折りたたみ傘を入れている。鞆から取り出そうと手探りで鞆の中を探す。

あれ？無いぞ。いつ何時雨が降っても大丈夫なように入れている

はずなのに。

「俺はお袋が朝、傘を持っていけって言っていたから持って来えますよ」

安食先輩は何故か親指を立てて白い歯を見せながら言った。

その間も僕は傘を捜すが見付からない。

「あれ？大地どうしたの？」

僕が鞆の中を落ち着き無く手でまさぐっているのを不思議に思っただろう、米部長が僕に聞いてきた。

「あついや。俺もこの時期いつも鞆の中に折り畳み傘を忍ばせているんですが、鞆の中に無いんですよね」

「そうなの？いつも入れているなら忘れるはず無いわよね。どれ貸してみなさい」

そう言うと米部長が僕から鞆を取り上げて、その中に手を入れ笠を探し始めた。

まあ別にやましい物が入っている訳ではないからいいのだが、鞆って意外とプライベートな部分だと思うので急にその中に手を入れられるとビックリするな。

女の子がスカートの中に手を入れられる様なものかな。いや、流石にそこまでの事じゃないか。

「無いわね……」

手で探して見つけれなかった米部長は、鞆の中身をテーブルの中に出して探し始めた。

机の上には次々と僕の教科書やノートが置かれていく。もうここまでされたらプライベートもへったくれもないな。好きに探してください。

「結論。折り畳み傘はない」

僕の鞆の中身を全て出し終えた所で米部長はそう言った。

「そうみたいです」

鞆の中身を出されるまでもなく、あれ程手探りで探してもなかったので大方の予想は付いていたけれども。

しかし、何故ないのだろうか？

「まあ家で何かの拍子に鞆から出して、そのまま入れ忘れたんじゃないの？ 雨に濡れちゃいけないし、今日は私が家まで送っていつてあげるわ」

「そうですね。もし家で探して見付からなかったら明日教室の中も探して……今なんていいました？」

「へっ？ 私が送ってあげるって言ったのよ」

「いいんですか？ でも、先輩遠回りになってしまうんじゃない……」

僕は冷静に一応の礼儀として断りを入れた。しかし、心の中ではガツポーズだ。雨で僕が傘を持っていなくて送ってくれるということは、必然的に相合傘じゃないか。

「おヨネさんなら俺が送って行ってもいいですよ」

安食先輩なんという事を言うんだ。僕は遠慮を一応しているとはいえ米部長と一緒に帰りたいというのに。

しかし、僕は一度遠慮をした手前積極的な発言をする訳にもいかず、話の成り行きを見守ることにした。

「大丈夫よ。私がしっかり部長として送っていくから」

「そうですか？ それじゃお願いします」

安食先輩も本人が送っていくと言っている以上あまり強くは言えないのだろう。食い下がる訳でもなくすぐに引いた。

これは僕にとって最高の形だ。米部長と家まで一緒に帰るなんて、しかも相合傘だなんて。まるで夢のようである。夢じゃないかほっぺを摘んで確かめたいところであるが、皆から不振がられるとけないのでそれはしないことにした。

「それじゃ帰りましょうかね」

米部長は机の上に広げられた僕の鞆の中身を鞆に入れなおすと皆に向かってそう言った。

これを合図に僕達はぞろぞろと部室を後にして、靴箱へと向かった。であった。

靴箱で下穿きへと履き替え僕は、学校を後にした。

校門を出て坂を下り再び登ったところにある交差点で安食先輩と入江先輩は僕達に別れを告げ、違う方向へと歩いて言った。

そこからしばらく歩いた所にあるコンビニに差し掛かると、寺澤さんがそのコンビニに立ち寄るとのことだったので、寺沢さんとはそこで別れる事になった。

コンビニには一緒に寄ってもよかったのだが、寺澤さんはバス通学でコンビニの近くにバス停があり、バスの時間までそこで時間を潰すとの事だったので先に帰らせてもらうことにした。

これで、米部長と僕は二人きりになった。もちろん傘は一本しかないので、相合傘の状態だ。

思えば米部長と二人きりになったのはこれで、三度目だ。最初は告白をした日。二度目は初めておにぎり売りに行った日。

でも、学校外で二人きりになったのって初めてだな。しかも相合傘だし。学校を出る時まで、ただ単に喜びだけが先行していたけど少し緊張してします。

この部活に入って人見知り少しはよくなったと思ったのにな。まあこれは人見知りというより好きな人と相合傘をしている事による緊張なんだろうけれど。

安食先輩や寺澤さん達がいた時は会話が弾んでいたのに、それが嘘のように今は会話が無い。

寺澤さんとコンビニで別れてしばらく会話の無いまま僕は歩いていた。

「よく考えたらこれって相合傘よね」
ふと、米部長が呟いた。

米部長気付いてなかったのか？ただ単に後輩が濡れたらいけないと思って送ることを申し出ただけなのだろうか。というか僕が意識し過ぎていただけかな。

「そうですね。米部長僕なんかと相合傘して彼氏に怒られちゃうん

じゃないですか？」

「えっそれは大丈夫だよ。私彼氏いないしね。大地こそ彼女に怒られちゃうんじゃないの？って送っていく事にした私が言うセリフじゃないか」

「ご心配なく。僕も彼女いませんから」

「そうなんだ」

ここでまた会話が途切れてしまった。米部長にしては珍しく会話のキャッチボールが続かない。

雨はまだ降り続いている。

「なんか相合傘って少し緊張するね」

「そうですね」

米部長も幾分緊張していたらしい。正直意外だった。僕の告白を勘違いした事からも分かるように米部長はこういった男女の機微には疎いのかと思っていたからだ。

「これじゃ安食君に送ってもらった方が大地も、気兼ねがなくてよかったわよね」

米部長は不安気な表情を浮かべ少し申し訳なさそうに言った。

「いえ、そんな事ないですよ。僕は米部長と一緒に帰ることが出来て嬉しいです」

「そう言ってもらえると嬉しいわ」

米部長は先程よりも幾分緊張がほぐれた顔をして僕に行った。

「私よく考えたら家族以外の男の人と相合傘するの初めてだわ」

「僕も初めてですよ。今までそんなシチュエーションとは無縁の世界で生きていましたから」

僕は少しおちゃらけて言ってみせた。米部長は僕のこの話を聞いて少し頬を緩ませた。

「米部長傘俺持ちますよ。というか今まで持たせてしまっていてすみません」

「いいよ。私が持つか……あっ」

米部長は僕の申し出を断ろうとしていたが、話を最後まで聞かず

に傘を取り上げた。

よく見たら米部長は僕の方に傘の比重を掛けていて自分の右肩は濡れている状態だった。

本当にもっと早く気付くべきだったな。そう思いながら傘を米部長が濡れないように傾けた。

「米部長ってなんで、そんなにお米が好きなんですか？」

僕はふと以前から気になっていた問いかけを米部長にした。自分でも驚くくらいに自然と米部長に話しかけていた。

「お米か……。私正直昔はお米大嫌いだったのよ」

「えっそうなんですか？」

米部長の今のお米好きの具合からいうと、てっきり物心付いた頃からずっとお米が好きだったのだと思ったのでこの回答は意外だった。

「まあ嫌いだった理由は名前のせいなんだけどね。やっぱり米なんて名前だと、小学校の時にからかわれたりする訳よ。そうするとやっぱりこの名前や由来となったお米が嫌いになっちゃうのよね」

確かに小学生は何も考えずに善悪考えずに自分が面白ければそれでいいといった感じで人の事をちゃかすからな。そういったことから名前に対してコンプレックスを感じることは仕方のないことだろう。

「でも、今は名前にも誇りを持っているしお米も好きですよね？」

「ええ。そうよ。まあ私へのからかいがある種虐めにまで発展しかかったのよ」

「えっ？ 虐めですか？」

こんなに明るい米部長から虐めという言葉は僕にはあまり想像できなかった。虐めというとききの僕の勘違い推理を思い出して恥ずかしくなってしまう。

「虐めまでは言ってないわよ。その時の担任の先生がいい人でね、子供だけじゃどう足掻いても解決できなくなりそうなどこすれすれの所で、問題を解決してくれたのよ」

「そうなんですか」

「その方法というのがね道德の時間にかにお米が大切なものかって言うのを延々講義するだけだったのよ。可笑しいでしょ？」

「そうですね」

僕は相槌を打つことしかできない。

「クラスの虐めもどきには全く触れずに、急に今日はお米の勉強をするぞって道德の時間に言ったの。クラスの皆頭の上にハテナマークが浮かんでたわよ」

米部長は懐かしい大事な思い出を話すようにして言った。米部長はこの事を話すのは別に苦ではないようだ。

「私もいじめっ子達は子供だったけど、その話が理解できない程に幼くはなくて虐めもどきはなくなったの。それどころか先生が農家の話をして、私の家が農家だと知っていた虐めっ子達はお前の家って凄いなだな、なんて事まで言ってきたわ」

「いい先生に出会えてよかったですね」

「ええ本当に。それで私もお米に興味を持ち出していろいろ調べたり、今まで全然やってこなかった家の農作業を手伝ったりしたの。一度気になりだすと、ずっと気になってしまってた気がついたら大好きになってしまってたって訳よ」

「そうだったんですか。僕もその先生に感謝しないといけないですね」

「どうしてよ？」

「だってその先生がいなかったら米部長はこの高校でコメ部を創部しなかったかもしれないじゃないですか。そうしたら僕がこうして米部長と相合傘で一緒に下校するという事もなかったのかもしれないからね」

「そういうことか。なんか人の縁って不思議よね。確かに私が先生に出会わなかったらお米を好きにならず、コメ部を作らなかったかもしれないしね。それに多分私お米好きになってなかったらこの高校にまず入ってないしね」

「どうしてですか？」

「私どうしてもコメ部を作りたくて創部規定のゆるい高校を選んで受験したのよ。今考えたら完璧に舐めてるわよね」

「そんな理由で作ったんですか。でも、農業学校だったらコメ部作れそうじゃないですか？」

僕はふと頭に疑問が浮かび聞いた。

気がつくと後少しで家というところまで来ていた。まだ、話していたけど刻一刻と別れの時が近付いてきている。

「農業学校の人は少なからず農業に興味がある人達だと思うの。私はあまりお米に興味のない人達にお米の素晴らしさを伝えたかったのよ」

「なるほどそういう理由ですか。でも、本当にコメ部をこの学校に作ってくれてありがとうございます。お蔭様で素晴らしい人達と知り合うことができましたよ。あつ勿論米部長も含めてですよ」

「お世辞でも嬉しいわ」

米部長は僕に微笑みかけてくれた。

「あれ。大地じゃないの」

ふと聞き覚えのある声がした。

声のした方を見ると古河パンというロゴの入ったエプロンをきた女性が立っていた。そうこの人は僕のお母さんだ。

僕と米部長の視線はお母さんの方へ向けられている。

米部長は相合傘をして二人きりになった時のような表情を浮かべていた。

どうしたのだろうか？

「始めまして。古河君の入っているコメ部で部長をしている田中米といいます」

米部長は蚊の鳴くような小さな声でそう言うとお辞儀をした。

「あらあらこれはご丁寧に」

「すみません。私用事を思い出しました。ここで失礼させていただきます」

そう言つて米部長は僕から傘を引たくり回れ右をして帰ってしまった。雨は気がつけばやんでいた。

「あらあらちゃんのご挨拶しようと思ったのによっぽど急いでいたのね。それにしてもすっかりしたお嬢さんね。大地爪の垢でも煎じて今度飲ませてもらいなさい」

お母さんがなにやらこう言つた事を言っていたが頭によく入ってこなかった。

さっきまでいい雰囲気僕と米部長は喋っていたのに何故急に帰ってしまったのだろうか。考えられる要因は母だ。しかし、母が何やら粗相をしたとは思えない。というか、米部長は何故僕が紹介する前に母だと分つたのだろうか？

エプロンに古河パンとかかかっていたからか。それを見て僕の家がパン屋だという事に気がつきショックを受けて帰ってしまったのだろうか？

そういえば僕はまだ米部長に自分の家がパン屋をしているという事を一度も話していなかった。その事で裏切られたと感じてしまったのだろうか？

どうやら僕は母と話しながら家に帰ったらしいが全くどんな話をしたのか覚えていない。気がつくとき自室のベッドで横になりずっと何故米部長が急に帰ってしまったのかという事ばかり考えていた。

自分で考えてもしかたない、米部長に直接聞こうと思ったがよく考えたら僕は米部長の連絡先も未だに知らなかった。仲良くなったのにまだ連絡先すら交換していな関係だと現実が押し付けられるようにでより、心苦しくなってしまった。

今日は金曜日。普段なら飛んで喜ぶ休日をこんなもやもやした気持ちで過ごさないといけないようだ。

トントン

ノックの音がして妹が僕の部屋に入ってきた。

「大君ご飯だつて」

「分つた直ぐに行くよ」

気分が優れなくても家族に心配を掛けるような事はしたくなかったので食卓へ向かうことにした。

「それから今日折り畳み傘かしてくれてありがとう。お陰で遠足で雨に濡れなくてすんだよ」

そう言って妹は僕の机に折り畳み傘を置いた。

「どうやら今日僕に天国と地獄両方プレゼントしてくれたのは妹だったらしい。」

四章 二部

悶々として過ごした土日が終わった。つまり今日は月曜日学校がある日だ。おそらく僕の人生で月曜日をここまで待ち望んだ事はなかっただろう。

僕は朝起きると店のパンを複数袋に詰めて家を出た。いつもより一時間早くの登校だ。学校に着いた時教室にはまだ誰もいなかった。そしてよく考えれば米部長がいつも何時に登校しているのかを僕は知らなかった。先輩の教室の前で待っているというのも手だが、冷静に考えてそんなストーカー紛いの事をする余計に不振がられてしまうかもしれない、このまませめてお昼休みまで待つて訪ねに行くべきか……。どううやらこの悶々とした気持はまだまだ続くようだった。

僕は教室で持ってきたパンを朝食代わりに食べることにした。こんな気持でも食事は喉を通るものなんだな。

僕は米部長も勿論好きだけど、この家のパンも好きなんだよ。もし、米部長が主食としてパンをご飯のライバルとして敵視しているのだとしたら僕はどうすればいいのだろうか？

米部長とパン……。僕からしてみれば次元の違う話なのだ。どちらか一つを選ぶなんて事はできない。

家か恋人か選ばなくてはならない……。まるでロミオとジュリエットだな。まあ僕が一方的に米部長に片思いしているだけなんだけどね。

米部長からしてみたら、コメ部の中に裏切り者がいたという気持なのかもしれない。というか、本当に金曜日からずっとこういった考えの堂々巡りだ。考えるたびに、結局は米部長に話を聞くまではわからないと、自分に言い聞かせるが気がつくと考えてしまっている。

僕はパンを食べ終わると部室へと向かうことにした。誰もいない

教室に一人で何もせずにいるとまた考えてしまいそうだからだ。

部室に行って読書をするというのはいいい考えだと思ったのだが、結論から言うと失敗だった。

部室の中には米部長を思い起こさせるものが多すぎる。読書しようと思って手に取った本すら米部長を思い起こさせてしまう。読書しようにも全く集中できなかった。それどころか気がつくと目に涙を浮かべてしまっていた。

僕は立ち上がり涙を手の甲で拭うと本を本棚に戻し、部室を後にした。

僕は結局教室へと戻ることにした。教室に着くとまだ生徒は登校してきていなかった。

僕は鞆の中から教科書を取り出し、数学の予習をすることにした。普段は予習などする気が起きないが、米部長の事を考えない為には何かをするしかなかった。

頭の中の大部分を占めている米部長の事を隅に追いやり、僕は無理矢理予習をした。

僕が予習を始めて少しするとクラスメイト達が登校し始めた。

いつも同じ時間に登校してくる僕がいつもと違う、しかもこんなに早く登校してきていたので何事かと話かけてくるクラスメイトも複数名したが、別に理由は無く珍しく早起きをしたから早く来たという理由でやり過ごした。

人と話をしている時は予習をしている時以上に米部長の事を考えずにすんだので、話しかけてもらえるのは嬉しかった。しかし、自分からクラスメイトの輪に入り話をしに行くような気分にはなれなかった。

途中中田さんと疋田さんも登校してきた。この二人はいつも一緒に登校してくるのだが、今日は少し様子が違っていた。普段は疋田さんが田中さんの一歩後ろを歩くといった感じで一緒に登校している。これと一緒に登校しているというのであればだけでも。

しかし、今日は二人並んで手を繋いでの登校だった。しかも、指

と指を絡めあうカップル繋ぎだ。この二人同性愛を隠すつもりなのかもしれない。

入ってきた二人を見ていると目が合った。しかし、別段僕の方へ来る訳でもなく二人は自分の机に鞆を掛けると、自分の属しているグループの方へと歩を進めていった。

僕は再び教科書に目を移し予習を続けることにした。

気がつく予鈴が鳴り始めていた。予習によって米部長から意識を外すのは一先ず成功したようだった。

僕は予鈴が鳴り始めたので教科書を机の中へとしまった。そういえば珍しく河内が絡んできてないなと思い、河内の席へ目をやるとそこはまだ空席のままだった。

どうやら今日はぎりぎりコースのようだな。と、思っていると案の定予鈴が鳴っている最中に猛ダッシュで教室へと駆け込んできた。

「ふー、なんとか間に合った間に合った」

などといった制服の袖で汗を拭いながら自分の席へと歩いていった。そしてそのすぐ後、谷口先生が入ってきて朝のホームルームが始まった。

いつもと変わらない一日が始まった。違うのは僕の気持がもやもやしている事だけだろう。昼休みが待ち遠しい。

昼休みになった。授業は今までで一番真剣に聞いたかもしれない。そうしなければ米部長の事を考えてしまうからだ。授業を真面目に聞いたお陰か体感的に普段より早く時間が過ぎて行った気がした。僕は昼食も取らずに教室を出て行った。米部長のクラスへと行くためだ。

米部長のクラスにつくと僕は、廊下側の窓から中の様子を見た。教室の中を隅々まで見渡したけれども、米部長を確認することが出来なかった。

窓の外から教室の中を覗いていた僕を訝しげに見ていた教室の中

の一人が僕に話しかけてきた。

「何か用事？」

唐突に話しかけられて面食らったが調度良かったので米部長の事を尋ねることにした。

「田中米さんはいらっしゃいますか？」

焦っていたがちゃんと敬語を使うことが出来た。ここで、変な問題を起こすのは面倒だ。

「えっ田中？今日は休みたいだけど」

「休みですか。ありがとうございます。失礼します」

僕は頭を下げるとその場を立ち去った。

冷静を装っているけれども、内心は混乱している。学校に来ていない？何故だ？僕の家がパン屋だったのがそれ程ショックだったのだろうか。

学校にすれば米部長に会えて真相が分ると思い、この土日を持ち切れた。それだけが希望だった。

実際に米部長に会って真相を聞くことが出来れば、僕はどんな内容であったとしても受け入れようと思っていた。

しかし、真相すら聞けないというのか……。

僕は米部長に避けられているのか？

僕は様々な考えが頭をよぎる中教室へと戻った。

午後の授業は全く集中できなかった。もう、米部長のことが頭から離れず他の事に集中して時間をやり過ごすなど出来なかった。

午前中とは違い時間が全く進まなかった。それは僕にとって永遠にも近く感じられた。そして僕は今日放課後が訪れた所でどうすればいいのだろうか？

コメ部に行って、他の部員に泣き言を言えればいいのだろうか？

米部長が学校に出来ない責任を取ってコメ部をそっと去るべきなのだろうか？

しかし、体感的に永遠に感じられても本当に永遠などあるはずもなく僕にも放課後が訪れた。

午後の授業は全く頭に入ってこなかったが。試験直前の授業なのに致命的だな。僕はまだ試験の事を考える余裕はあったのかと、自分を鼻で笑った。

しかし、放課後になっても何もする気が起きない。僕は頭を抱えたまま自分の席に座っていた。

僕がそうしていると河内が声を掛けてきた。

「お前朝から腑抜けた顔をしていたけど、午後からは余計腑抜けた顔になってたな。俺は何があったか知らんが、そんな顔をしているお前は俺嫌いだぞ。明日までにはその顔どうにかしろよ。俺に何か出来ることがあるならなんでも言え」

そう言って僕の背中を思いっきり叩いて僕の返答を聞かずに教室を出て行ってしまった。

全く本当に何があったのか全く知らないくせに勝手な事を言ってくれるよ。そして、お前男前過ぎだよ。米部長を諦めてお前に惚れてしましそうなほどだ。

現実になることは断じて無いといえるが今だけはそんな気持ちになった。

僕はとりあえず動けるようになった。椅子から立ち上がり僕は何が出来るか分からないが何か行動を起こそうと思った。

僕は立ち上がりとりあえず部室に向かうことにした。

部室に行けば何かしらの情報を得られるかもしれない。でも、他の部員も僕の家がパン屋だということを知り、ショックを受けるかもしれない。でも、今は他の部員の事を信じよう。もちろん米部長の事も信じている。だからこそ会って真実を知りたいし真実を話したい。

僕は今部室の前に立っている。怖いけれどもここに入らなければ何も進まない。意を決して僕はドアノブを回し部室へと入っていつ

た。

そこには何も今までと変わらない光景が広がっていた。唯一つ米部長がいないという事を覗いて。

「安食先輩。米部長が学校に来ていないんです」

僕は挨拶もせず入って早々安食先輩にそう言った。

「そうなのか？どうりで来るのが遅いと思っていたよ。ん？でも、何で古河が米部長が来ていない事を知っているんだ？」

「実は……」

僕は金曜日の出来事から今日米部長が学校に来ていないこと、僕がパン屋の息子である事、それがショックで米部長に嫌われてしまったのではないかという事を安食先輩に話した。周りに入江先輩や寺澤さんもいて僕の話聞いていた。

僕は話し終える頃には目から涙が零れ、膝から崩れ落ち机を支えに膝立ちをしている状態だった。今まで自分一人で考えていた不安を人に伝える事により一気に感情が出てきてしまった。

安食先輩達は僕が話し終わるまで静かに聴いてくれていた。

僕が話し終えると安食先輩が口を開こうとした。

「そうか……」

「そこに立たんね！」

安食先輩の言葉を遮って入江先輩の声が部室内に響いた。

「そこに立たんねっち言い寄るったい！」

僕はまだ目に涙が浮かんでいる上体で入江先輩のほうを見た。いつも安食先輩に対して方言を使っているのはよく聞いているが、僕に対してその方言が使われて少し驚いている。

僕は面食らいながらも言われた通り膝から崩れ落ちていた体を起こし、その場に立った。

さっきまで泣いていたせいなのか、それとも入江先輩に恐怖心を抱いているせいかどちらか分らないが、膝はがくがく笑っていた。

その場に立っているのがやっとの僕の前に入江先輩は歩いてきて立ちすくんだ。

「あんたそんな位んこつで、米部長があんたば避けて学校にこんごつなるっち思いよるとね？」

僕は何も答えられない。実際そうではないと思いつつも心の中ではそうじゃないかという葛藤をずっとしていたからだ。

「それに何ね。あんたあたし達までパン屋の息子っち知ったら避けるごつなるっち思いよったつね？」

僕は俯いたまま何も言えない。

「今あたしがあんたに話しよるとやろうもん。質問に答えきらんにしてもちゃん話しよるもんの顔は見らんね！」

僕は恐る恐る顔を上げて入江先輩の顔を見た。僕は再び目から涙が溢れ始めていた。

入江先輩の表情は怒っている顔をしているのだろうと思っていたが、何故か潤んだ目からも分るほど優しい顔をしていた。さっきまでの怒りが嘘のようだ。いや嘘というよりも方言で僕に話していた最初からきつとこの表情だったのだろう。

入江先輩は僕の肩に両手を置き話し始めた。

「そげなこつがあるはずなからうもん。米部長に会って訳ば聞いてんね」

先程までと同じ方言ではあるが入江先輩は優しい口調で僕に話しかけてきた。

「僕もこの土日米部長に学校で会って理由を聞こうと思っていました。でも……米部長学校に来てないじゃないですか……」

「そげなこつ簡単やんね。米部長が学校に来とらんとなら自分で米部長に会いに行けばよかやんね」

入江先輩は事もなげに言った。僕は呆然として入江先輩の顔を見る事しか出来なかった。

「なんぼさつとしとつとね。早よ米部長の家に行ってこんね！これは先輩命令ばい！」

そう言っに入江先輩は僕の背中をバシッと強く叩いた。

「あついや、でも僕米部長の家知りませんよ？入江先輩知っている

のなら教えてくれませんか？僕今から行って直に理由聞いてきます！」

僕は入江先輩の言葉に勇気を貰い弾ける様な声で入江先輩に言った。

「ん？私も知らんばい」

あれだけ、僕に発破を掛けておいて入江先輩自身も米部長の家を知らないらしい。

「安食先輩は知っていますか？」

「すまん。俺も知らないんだ……」

安食先輩の方に向き直り聞いたが答えは芳しくなかった。

「寺沢さんも……」

「ごめんなさい。私も知らないです……」

寺沢さんは本当に申し訳なさそうな顔をして僕に行った。迷惑を掛けているのは僕の方なのにより申し訳なくなってしまう。

道が開けたと思った瞬間にまた潰れてしまった。

どうしたものだろうか……。米部長の担任の先生に聞くのが一番なのかもしれないが、三年生の先生であり面識もなく、急に住所という個人情報教えてくれるとは限らない。

しかし、実際にはそれしか道はないのではないだろうか？一か八か聞いてみるべきか……。

入江先輩や安食先輩、寺沢さんも一緒になって考えてくれているがこれ以上いい案が出そうな気配はなかった。

「それじゃ僕米部長の担任の先生に聞いてみます。上手く教えてもらえるといいのですが……」

僕はそう言って部室のドアの方へと歩を進め始めた。その時ずっと普段は見せないような真剣な表情で考えていた寺澤さんが声をあげた。

「あっ！」

僕は寺沢さんの方を向いた。僕だけでなく安食先輩も入江先輩も寺沢さんを見ている。

「鮭ですよ！」

「鮭？今は朝ごはんの話はしてなかったんだけど……」

難しい顔をして対策を考えていると思っていたが実際は朝ごはんの事を考えていたのだろうか？

「違います。朝ごはんの話なんて誰がしているんですか！鮭先生……礼二先生ですよ！確か米部長とは親戚だったはずですよ。しかも、古河君の担任だから古河君自身も話しやすいんじゃないですか？」

「なるほど！僕古河先生の所に行ってきます。安食先輩、入江先輩、寺沢さんありがとうございます」

僕はそう言って部室を飛び出した。

「ちゃん理由ば聞いて二人揃って戻ってこやんよ！」

「がんばれよ」

「ガンバです！」

僕の後ろからこういう声が聞こえてきてさらに元気が出てきた。

ただ……

「なあおヨネさんが今日学校に来ていない理由ってあれだろ？」

「うふふ、そうですねあれだと私も思います」

「ああ理由知っているのに教えてあげないなんて二人とも悪い先輩です」

という会話が僕の耳に届く事はなかった。

僕はまず職員室へと向かった。

しかし、職員室の入り口にいた先生に声をかけて、礼二先生を呼び出してもらおうとしたところ職員室には在室してないという事だった。

どこにいるのかをその先生に聞いたが分らないと言われてしまった。

僕は学校中を歩き回り先生を探すことにした。まずは僕達のクラスに行ってみた。しかし、そこにはクラスメイト数人がいるだけで

礼二先生の姿はなかった。

僕はクラスメイトに話しかけられたが適当に切り上げ他の場所を探し始めた。

探し始めたといっても別段あてがある訳ではないのであてずっぽうだ。

とりあえず校舎を端から虱潰しに探していくことにした。一人一口ーラー作戦だ。

校舎を歩き一つ一つの教室の中を確認していくが礼二先生は見付からない。時間だけが過ぎていってしまう。

僕は焦ってきていた。そんな時不意に後ろから声を掛けられた。

「古河君どうしたの？」

振り向くとそこにはカップル繋ぎで正田さんと手を繋いでいる中川さんの姿があった。

「今日の午前中から元気なかったわよね。午後からは酷いものだったわ。で、今はそんな焦ったような顔をしている。いったい何事だというの？」

「今は理由を話している時間はないんだ。そうだ中川さん礼二先生がどこにいるか知らない？」

僕は藁にも縋る思いで中川さんに礼二先生の所在を聞いた。

「まずは落ち着いてくださいますか？ 仮にも私と帆乃はあなたのお陰で恋人同士になれたのよ。そのきっかけがこんな余裕の無い男だと私達ががっかりしてしまいますわ」

「あっえっごめん」

僕はただきつかけを与えてしまっただけで何もしていないのだが……。というかむしろ勘違いだらけで赤っ恥をかいたようなものなのだが、と思いながらも謝ってしまった。

「そんな自信の無い表情しないでください。帆乃も何か言ってやりなさい」

「礼二先生なら学園菜園にいると思います」

正田さんは俯きながらボソツと言った。

「えっと本当？」

「はいこの時間職員室にいないという事はきつとそうだと思います」

「ありがとう、学園菜園だね。行ってみるよ。二人ともお幸せに」

僕はそう言うのと走り出したい気持ちを押さえ下駄箱へと向かった。

学園菜園に行くには外靴に履き替えなければならぬからだ。

「あら、急にいい表情するようになったじゃないの。それにお幸せにだなんて。なかなかいい事言うわね。それにしても帆乃よく礼二先生の所在知ってたわね」

「中川さんにちよつとでも関することは調べておくのは当然ですから」

疋田さんは小さな声でそう言いながら中川さんの手を強く握り返した。

勿論僕のその会話が聞こえる事はなかった。

僕が学園菜園に着くと礼二先生は菜園の草取りをしていた。麦藁帽子を被り首にタオルをかけ、長靴を履くといういかにも農作業をするといった格好だ。

「つはあはあ先生！」

僕は息を切らしながら先生に声をかけた。何故息が切れているかというと下駄箱を出てからここまで走ってきたからだ。校舎内では先生方に見付かり説教を受けると時間をロスしてしまうので、走るのを我慢していたが外に出てからは遠慮なく走った。まあその結果がこの息切れなのだが。

「ん？なんだ古河じゃないかどうしたんだ？」

先生は草取りの手を止め立ち上がり僕の方を向き言った。

「あの、先生とうちの部長って親戚なんですよね？」

僕は膝に手を着き前傾姿勢のまま言った。

「ああそうだが。それがどうした？」

「お願いです米部長の住所を教えてください」

「あついやしかし今個人情報取り扱いというのは面倒だな。勝手に教える訳にはいかないんだ……」

先生は首から掛けたタオルで頬の汗を拭いながら申し訳なさそうに言った。

「先生お願いします。先生の今日米部長が学校に来ていない事知ってますよね？それ……俺のせいかもしれないんです。だから直に会って真相を知りたくて。もし、俺のせいだったらちゃんと謝りたいんです」

「、しかしな……学校というのはそういった事に厳しくてな一つでも例外を作ってしまうと、なし崩し的になってしまふんだよ」

やはり礼二先生もダメだったか。しかし、ここで諦める訳にはいかない。。

「まあしかし、教師としての俺じゃなく米の親戚としての俺が、個人的な友人の古河に教えるのは問題ないだろう」

何はともあれ頼み込むしかない。いざとなればどういふ状況かを説明してお願いするしかないか。

僕が考えを纏めようとしていると礼二先生が何か僕に対して言った。

「先生今なんと言いましたか？」

「だから米の親戚の俺として個人的な友人である古河に教えてやるって言ったんだよ。今この場では俺とお前は個人的な友人なんだから先生という呼称を使うな」

「は、はい」

「地図書いてやるからちょっと待ってろ」

そう言うのと礼二先生はポケットから手帳とボールペンを取り出し何やら書き始めた。

「まあ古河と米の間に何があったか聞きはしないよ。自分でケリつけてこいよ」

そう言って書き終わった紙を手帳から破り取り僕に手渡した。手渡された紙には最寄のバス停の名前とそのバス停からの道順が書か

れていた。

「ありがとうございます。あえっと礼二さん」

「おう上出来だ。入って来い」

僕は神をポケットに押し込み学校近くのバス停へと走っていった。「可愛い叔母さんと教え子の為だこの位の越権行為多めに見てもらえるだろ」

そう言って礼二先生は懐にあるタバコを取り出そうとしたが校内全面記念だと思い出し、結局タバコは取り出さなかったのだった。まあ僕はこの言葉を聞いたり仕草を見たりはしていないのだが。

学校最寄のバス停に着くと時刻表で次のバスの時間を確認した。普段このバス停を僕は使わないので、何時にくるのか、どのくらいのペースで運行されているのか全く知らなかった。

時刻表を確認すると次のバスまで約二十分もあった。米部長の家の最寄のバス停までバスで約十五分……。ここでじっと待っているにはあまりに長く感じてしまう。しかし、走っていったとしても、結局バスで行った方が早く着くだろう……。でも、正直体を動かしていた方が楽だ、しかし米部長には一秒でも早く会いたい。

「よう。バス停にお前がいるなんて珍しいな。バスでどっか行くのか？」

声の主を見るとそこには河内がいた。そして河内は自転車に跨っていた。

「河内、後生だ。チャリ貸してくれ！」

自転車だ！これなら一番早く米部長の家に着ける。放課後すぐに帰ったと思っていた河内が学校に残っていてここで出会えてよかった。

「ええ？」

河内は僕の大きな声にビックリしてすっとんきょんな声を出しつつ跨っていた自転車から降りて僕に自転車を渡してきた。

「何がなんだか分らんがお前が今日元氣のない顔をしていた事と関係があるんだろう？乗っていけ。お前のためなら、例え歩いて帰るのに二時間掛かろうが我慢してやるよ。早くどことなりと行ってこい」

という事を河内は言っていたが僕は途中で「ありがとう」と河内に言うのと自転車を受け取り全速力で漕ぎ始めた。

四章 三部

米部長の家の最寄のバス停に着くと礼二先生から書いてもらった地図をポケットから取り出し、バス停からの道順を確認した。信号で止まる時意外立ちこぎをしてきたので予想より早く着くことが出来た。そのせいで息は切れ切れになってしまったけど。

地図を確認すると後一踏ん張りだと自分を鼓舞し再度こぎ始めた。バス停から少し離れると急に田んぼが増えてきた。田んぼには水が張られて太陽を反射しキラキラと輝いている。中には田植えが行われている田んぼもあった。田植え機械が走り、田植え機械が上手く田に根付くかせられなかった部分には人の手で植え直している。これは米部著に薦めてもらった本によって得られた知識だ。今までは田植えをしている人達を見ても何をしているのかよくわからなかったが、知識を得てから見るとまた違った様に見えるから不思議だ。

途中で地図を見ながら自転車を走らしていくと、なんとかたどり着く事が出来た。周りを田んぼに囲まれた所に立っている大きな平屋建ての日本家屋だった。

僕はその家構えに緊張しながらも玄関に付いているチャイムを押した。

チャイムを一度押して中から反応がなかった。もう一度押す。反応無し……。結局五度チャイムを押したが中から反応はなかった。切れていた息は整ったが今度は心臓がバクバクし始めた。ここまですべて米部長に会えないのか？

どうも中に誰もいないようなので、米部長の所在を聞くことも出来ない。

僕は途方にくれてしまった。米部長の家に行き話をすればなんとかなると放課後皆に元気付けられて漠然と思っていた。

某は自分の膝を抱えたい体操座りのような格好で玄関先に座り込

んでしまった。顔を伏せもう考える力も残っていなかった。

その格好のままどれくらいの時間が過ぎただろうか。今日の僕の体内時計は狂ってしまっているので良く分からない。もしかしたら顔を伏せてすぐかもしれないしそのまま一時間以上そうしていたのかもしれない。

そんな中、米部長の家に車が入って来る音が聞こえた。その車を見ると一台の軽トラが入ってくるのが見えた。運転席には年配の女性が乗っていた。お婆様だろうか？そして、荷台には……。米部長の姿があった。

軽トラは玄関から少し離れた苗を置いてある所に止まった。

僕は、急いでその軽トラへと駆け寄っていった。

「せせせせせせせえっせ、せんぴゃい！」

焦って言って噛んでしまった。米部長は僕の顔を不思議なものでも見たような顔で見ている。

「あら大地どうしたの？私の家がよく分かったわね」

米部長は軽トラの荷台から飛び降りて僕の近くに歩いてきた。

「あの先輩俺……。すみませんでした。あの俺の家がパン屋だという事をだまっただままコメ部に入ってしまった。その急に何の説明もなく部員にパン屋がいるって知ったら、ショックですよ。ご飯のよさを広めようというのが、コメ部の活動目標なのに。言わなきゃ言わなきゃとずっと思っていたんですが、中々言い出せなくてあの心地よい空間にずっといたかったです。俺卑怯ですよ。この間一緒に米部長と帰って部長急に帰ってしまったから土日ずっと気になっていて、学校で会った時に誤ろうと思ったんですが今日米部長学校に来てなかったし。なんか本当にもうすみませんでした」

僕は思っていた事が纏まり切らず考えていた事、考えていた事が口をついて出てきた。聞いている方からすると支離滅裂だろう。

言い終わる頃には、僕は部室で皆に話した時のように膝を地面に付き泣きながら嗚咽を漏らしていた。今日の僕は涙腺が緩すぎだと自分でも思うが、感情のコントロールが出来ないので仕方がない。

米部長が僕の肩に手を置いてきた。顔を上げて米部長の顔を見ると、涙で滲んだ顔でも分る困った様な顔をしていた。

「えっと、とりあえず涙拭きなさい。今こんなのしかないけど」

そう言うとき米部長は自分の首に掛けていたタオルを僕に手渡してきた。

僕はそのタオルを受け取り顔をごしごとと吹いた。そのタオルからは米部長の匂いと、泥の匂いがした。

「顔さっぱりして、少しは落ち着いたかな？」

「は、はい。そのすみませんでした」

僕は立ち上がり、米部長にタオルを返しながら言った。

「で、えっとさっきの話なんだけど。私別に何も怒ってないわよ？」

「えっ？でも、金曜日僕の家がパン屋だと分ったらすぐに踵を返して帰ったじゃないです。それに今日も学校に来てなかったですし……」

……

「今日私が来なかった理由はあれのせいよ」

そう言うとき米部長はとある方向を指差した。

僕がその方向を見るとそこには、稲の苗が一面置いてあった。

「今日家の田植えなのよ」

「えっと田植えを手伝う為に学校を休んだんですか？」

「そうよ」

米部長は僕の質問に簡潔に答えた。

「でっでも、この間急に帰ったじゃないですか？あれ僕に怒ったんじゃないんですか？」

「あっあの時はごめんね」

米部長は顔の前で手を合わせ僕に謝ってきた。僕があやまらなければならぬはずなのに何故米部長が誤るのだろうか？

「ごめんねあの日田植えの準備を手伝う為に早く帰ってくるように言われていたのを忘れてたの。で、雨も調度止んだみたいだったからお暇したのよ。本当はちゃんとお母様にもご挨拶しないといけないと思ったんだけど。手伝いの事を急に思い出して頭真っ白になっ

ちゃってね。心配かけちゃったみたいね」

先輩は手を合わせ頭を下げたまま上目遣いで僕のほうを見てきた。
「あっいや米部長頭上げてくださいよ。僕の勘違いもいけなかった
んで」

お婆さんの前で頭を下げられるというのもなんだかむず痒かった
ので、とりあえず頭を上げるように促した。

「ごめんね」

米部長は頭を上げ再度僕に謝ってきた。

「でもさ、大地の勘違いも酷いよね」

さっきまで僕に申し訳なさそうな顔をしていたかと思うと今度は
少し意地悪な顔を向けてきた。

「だってさ、大地を私がパン屋の息子だからお米の敵だと思って嫌
いになったって思ったわけでしょ？」

「あっいやまあその通りです」

言い訳をしようと思ったけれども突き詰めれば結局はそうなので、
口答えしないことにした。

「いくら私でもそんな事思わないわよ。お米と大好きな後輩なら迷
わず大好きな後輩を取るわよ。お米は確かに私に取って大きなウエ
イトをしめているけれど、友達を捨ててまでとるものじゃないわ。
まあこんなこと言いながらこの間は手伝いの為に、大地を置いてさ
っさと帰ってしまっただけだね。それに関しては本当にごめんな
さい」

意地悪な事を言われるのかと思ったけれど、結局最後にはまた謝
られてしまった。しかも大好きな後輩だなんて……。ちよつと嬉
しいじゃないか。

「あっじゃあお互い悪かったという事でお相子ですね」

「そうお相子ね。ああでも私大地にはもっと信用してもらってるっ
て思ってたな」

「本当にすみませんでした」

僕はそう言って頭を下げた。

さつきとまるつきり逆だ。お相子と言っているけれども、確実に米部長のほうが上手だ。でも、僕にとってはこういった関係が心地よい。

米部長に謝る気満々で来たが本来の目的とは違う、こんな軽い謝り方になるとは思っていなかった。

米部長は僕の肩に手を置き、顔を上げるようにと言った。

僕が顔を上げると米部長は僕に抱きつき頭を撫でてきた。

「心配かけちゃったわね。ごめんね」

僕は一瞬状況が飲み込めなかったが、状況を飲み込むと膝から力が抜けて行き、気を失いながら膝を地面に付くことになった。今日膝から崩れるのは三度目だが今までの二回とは全く意味も気持ちも違うものだった。

「全く自分に告白してきたような変わり者の後輩なんてそうそう嫌いになれるはずないじゃないの」

僕は意識が薄れる中で米部長のこういう言葉を聞いたような気がするが夢なのか現実なのかははっきりしない。

僕が気付くと軽トラの荷台に米部長と共に乗っていた。

「あれ、米部長ここは？」

「あつやつと気が付いたわね。急に気を失うからビックリしちゃったわよ。苗を持っていかないといけないし、あそこに大地を放置しておく訳にも行かないから取り合えず、軽トラにのせて一緒に来てもらっているのよ」

「すみませんまたまたご迷惑をおかけしてしまって。僕を乗せるの大変だったでしょ？」

「農家の娘を舐めてもらっちゃ困るわよ！とか言いながらお母さんにも手伝ってもらったんだけどね」

米部長は親指で運転席の方を指差した。稲の苗が積み重なり中の

様子は見えないがお母様が運転席に座っているのだろう。というかお母様？

「軽トラ運転していたのお母様だったんですね。僕失礼ながらお婆様かと思っしまいました」

「いやいや仕方ないって。私親が年取ってからの子だからね。よく勘違いされるし両親もその勘違いもう慣れてるわよ。ある種もうネタになっている位よ」

そう言って米部長は笑った。

「えっと今ってどこに向かっているんですか？少し記憶が曖昧で……」

「苗を持って言ってるんだから、田んぼに決まってるじゃない。もうすぐそこよ」

目を覚まして周りを見る余裕がなかったが、そう言われて周りを見渡してみると軽トラは両脇に田んぼがある道を進んでいた。田植えを既に終えている田んぼや田植え真っ最中の田んぼが複数あった。米部長の田んぼもこの田植えを行っている田んぼの一つなのだろう。

というか、田んぼに連れて行かれるって事は米部長の多くの親族に会うという事だ。まだ付き合ってもいない内に、親族と会うなんて緊張してしまっても何も話せないかもしれない。でも、米部長がそばにいてくれるならきつと大丈夫な気がしてします。普段知らない大勢の人と会うのは億劫なのに。

「さあ着いたわよ」

軽トラは農道の端に出来るだけより停車した。

米部長は荷台から飛び降り僕にも降りるように促した。

「遅かったやんかなんばしよったとか？」

田植え機械に乗った年配の男性が米部長のお母さんに大きな声で話しかけてきた。

「いろいろあったとたい。仕方なかるうもん。お茶菓子とお茶も持ってきたけん、そんな列まで植え終わったらお茶にしようかね」

「わかった。おーい皆一区切りつけてお茶にするばい」

年配の男性は田んぼの中でしっかりと根付いていない苗を植えなおしている人達にお茶にする旨を大きな声で伝えた。

田んぼの中の人々は一斉に顔を上げ肯き、持っていた苗をその場に置き田んぼから上がりはじめた。

「田植え機械に乗っているのは私のお父さんよ。これまたお祖父ちゃんとは勘違いしてたんじゃない？」

「すいませんでした」

まあお母さんの事からお父さんかなとも少し思っていたけれども。米部長とお母さんはあぜ道の田植え機械を田んぼに入れる為に少し広くなっている部分にお茶の準備をし始めた。

そこに続々と田んぼから上がった人達が集まってきて円形に座り始めた。最後に米部長のお父さんが座ると皆でお茶を飲み始めた。

「その男の子は誰ね？」

お茶を飲み始めて少ししてから米部長のお父さんが僕の方に目をやり聞いてきた。

「始めました。僕は米さんが部長をしているコメ部の後輩で古河大地と言います」

「おおそうね。今日米が学校にこんかったけん心配して見に来たっじゃなかる？」

「あっえっと」

「もうお父さんそんなに矢継ぎ早に質問をしたら大地が緊張するよ」
「おっとこりやすまんかったね。ばってんなん緊張せんでよかよ。」

まあお茶でもゆっくり飲まんね」

「あっはいありがとうございます」

僕はそう言いもらっいお茶を啜った。

それからは基本的に僕は聞き役に徹した。色々な話がそこで行われており僕の入る隙はあまりなかった。米部長は僕のことを気にしつつも会話に参加していた。

「そろそろ作業に戻ろうかね」

米部長のお父さんがそういうと皆腰を上げ始めた。

「あの……」

僕が声を発すると一斉に僕の方をその場にいた人たちが向いた。「もしよければ僕にも手伝わせてもらえませんか？ お邪魔になるかもしれません……」

今度は一斉に米部長のお父さんの方へと視線が向けられた。どうやら決定権はお父さんが持っているようだ。

「よう言った。よかばい手伝わんね。ばってんそん格好やったらすぐ汚れてしまうばい？」

そうだった僕は今制服なのだ。流石にこれで田んぼに入る訳にはいかない。よく考えてから言うべきだった。

「体操服があるじゃない」

米部長がそう言った。

しかし、僕は学校から鞆すら持ってきていないので体操服など持っているはずがない。まさか米部長のだろうか？ いや流石にそれはダメだろう……。そう思い断ろうと口を開きかけた時、米部長は僕に体操服が入っていると思わしき袋を手渡してきた。

この袋には見覚えがある。しかし、僕のではない事は確かだ。

「自転車の籠に入っていたからそのまま置いていたらダメだと思っ
て軽トラに乗せていたのよ。こんなところで役に立つなんてね」

袋から体操服を取り出すと、体操服の胸の部分に河内と刺繍されていた。そうこの体操服は河内のだった。自転車を借りる時に体操服袋を取り忘れたのだろう。

僕も周りが目に入らず籠に袋が入っていたという事に気がつかなかった。

正直男の使った体操服を着るというのは抵抗があるがここまで来たら、この体操服を着てやるしかない。

「この体操服に着替えてやります」

「よっし！ そいじゃどっかそこんにきで着替えて後はこの人になんばしたらよいか聞かんね」

そう言って米部長のお父さんは一人の女性を指差した。その人は見た目的には僕の母と同じような歳に見える。

僕は急いで着替えてその女性の所へと行った。

「それじゃこの苗をこうやって手で持てる位に切り取って持ってきてね」

「はい」

分りやすく僕の目の前で実演しながら取り方を説明してくれた。僕は言われたとおりに苗を取りその女性に着いて行った。

「ほらこういう風に田植え機械で上手く根付いてないところや、上手く田植え機械が苗を取れてなくて少ししか植わってないところあるでしょ？　こういったところに、苗を植えてあげるのよ」

これも言いながら実際に実演してくれた。本当に分りやすい。

「まあ最初はよく分らんと思うからお姉ちゃんと一緒にいこうかね」
「はいよろしくお願いします」

正直お姉さんには見えなかったけれどもそこには触れないことにした。こうして僕はこの女性と一緒に見よう見真似で手伝うことになった。

「大地君って確か一年三組よね？」

手伝いの途中で米部長のお姉さんが話しかけてきた。

「はいそうです」

なぜ僕のクラスを知っているのだろうか？　米部長が話したのかな。

「やっぱりね。いつも礼二がお世話になってます」

米部長のお姉さんは一旦作業の手を休め僕に頭を下げてきた。

「はあこちらこそいつも谷口先生にはお世話になっています」

僕も頭を下げ返したものの何故お姉さんが頭を下げてくるのかよく分からない。

そういえ谷口先生と米部長親戚なのだから、米部長のお姉さんとも親戚なのは当然だよな。それが理由なのだろうか？

「私、谷口礼二の母です」

「えっ谷口先生のお母様だんですか。こちらこそ本当にいつも先生にはお世話になっています。いい先生にめぐり合えて僕は幸せですよ」

「いやね。お世辞にしても言いすぎよ。でも、ありがとう。あんな息子でも可愛いからね」

米部長のお姉さんともい、谷口先生のお母さんは井戸端会議をするおばさんのように体の前で手を振りながら言った。

そうか、米部長と谷口先生は、米部長のお姉さんの子供が谷口先生という関係なのか。

えっとそれはつまり……。

「ええ！谷口先生って米部長の甥っ子になるんですか？」

「そうなのよ。大体の人は今のあなたみたいに驚くわね。最初あまりに普通に返されたから逆にビックリしてしまったわよ」

米部長のお姉さんは僕のリアクションに満足したような顔をして僕を見ている。

僕はあの二人従兄弟か遠い親戚かと思っていたけれども、叔母さんと甥っ子だったなんて。米部長も谷口先生も親戚とだけいって関係を言わなかったのも少しなっとく出来る気がする。

その後も田植えの手伝いを続け手伝い終わると、明日は米部長が学校に来る事を確認して家路に着いたのだった。

エピローグ

次の日学校に行くと下駄箱に手紙が入っていた。その差出人は僕の良く知っている人からだった。手紙には昼休みに屋上に昼食を持参して来る様にとの事だった。

今は昼休み。僕はその手紙通りに昼食を持って屋上に来ている。呼び出した本人はまだ来ていないようだ。屋上には僕の他に数人の生徒がいて昼食を食べている。どうも屋上はカップルが昼食を取るメッカとなっているようだ。僕は幾分の居心地の悪さを感じ、隅の方で手紙の差出人を待つことにした。

それから少ししてその人物は現れた。その人物は僕に気が付くと僕の方へと歩いてきた。

「急に呼び出したりして悪かったわね。えっと改めて心配掛けてたみたいでごめんね。えっと隣に座っていいかしら？」

そう僕を呼び出した人物とは米部長だったのである。

「ええ勿論どうぞ。座ってください」

僕は少し横にずれて米部長の座るスペースを作り言った。米部長は僕の作ったスペースに腰を降ろして言った。

「えっとそういえば私達ってお互いまだ携帯番号やアドレス交換しなかったわね。学校で毎日会ってたし、今まで必要がなかったしね。でも、部員の連絡先を把握してないなんて部長失格よね。というわけではい。そしてコメ部の皆とも放課後に交換しましょう」

そういうと彼女はおもむろに携帯を取り出し僕に向けてきた。どうやら赤外線で番号とアドレスを交換しようというつもりらしい。昨日散々な目にあった僕は少し意地悪をしたい気持ちにかられたけれど、ここは素直に従う事にして携帯を取り出した。

「どうぞ」

そして、僕が彼女に告白をして約一ヶ月僕は米部長の携帯番号そしてアドレスを手に入れる事が出来たのであった。

「で、昼食を持参させた理由はなんですか？これだけだったら放課後でもよかったですよね」

「ええ。あなたいつも昼食はお家のパンなんでしょ？コメ部の一員なんだしたまには米を食べなさい」

そう言うのと僕の目の前に弁当箱が差し出された。

「これって…。先輩の手作りですか？」

「ええ。味は保障しないけどね。それで、あなたの昼食を私に渡しなさい。昼食にパンってのもたまには悪くないしね」

米部長は少し恥ずかしそうに言った。この恥ずかしさは手作り弁当を男子に渡す恥ずかしさなのか、それとも米一筋でパンを食べたことが無いという事を誇りにしていた事が崩れるからなのか僕には分からなかった。僕としてはこの恥ずかしそうな米部長の表情を見ることが出来ただけでも良しとしよう。

「ありがとうございます。それじゃ遠慮なく頂きますね」

弁当箱を受け取り、元々僕の昼食であったパンを米部長に渡しなから言った。

弁当を明けると俵型のおにぎりがぎっしりと詰っていておかずは全くなかった。手作りといってもどうやら米部長はおにぎりを握っただけらしい。普段からお米はおにぎりにした時が一番美味しいと断言している彼女らしいお弁当である。

お箸も用意してくれていたが僕はおにぎりを手で食べる事にした。「部長とっても美味しいです。具も入っていないくて味付けが塩だけなのにこんなに美味しくなるんですね」

「当然じゃない誰がそのおにぎりを握ったと思っているの？この米を愛してやまないこの私よ！そんじょそらの人とは愛情のこめ方が違うのよ」

米部長は得意げな表情をして胸を張りながら言った。

「それじゃ私もいただきます」

僕が渡した福をからサンドイッチを取り出しビニールを外しながら言った。

「あら、パンも美味しいじゃないの。昔私が食べたパンはもさもさしているっていうイメージしかなかったのに」

「そりゃ家のパンはそんなじょそこらのパンとは違いますからね。以後古河パンをご贔屓にどうぞ」

僕は少し茶化したように言った。しかし、彼女は家のパンを美味しいと言ってくれた事にとても喜びを感じていた。

それからしばらくは他愛の無い話をしながらお互いに昼食を食べた。

「ふう。美味しかった。ご馳走様でした」

「僕も美味しかったです。本当にご馳走様でした。お弁当箱は明日洗って返しますね」

「そんな事気にしないでいいのよ。これは私が持って帰って洗うわ」僕の手からお弁当箱を取り米部長は言った。

「あら、大地顔にお弁当が付いているわよ」

「えっ？どこですか？」

僕は手探りでご飯粒を探した。

「違うわこっちよ」

そう言うと米部長は僕に顔を近づけほっぺにそっと口付けをした。

「パンもいいけどやっぱりお米の方が美味しいわね」

彼女は満面の笑みを浮かべ僕にそう言ったのだった。

エピローグ（後書き）

以上で「ラブ※コメ」は終わりです。

文章も描写もストーリーもキャラも不完全な今作を読んでもさ
り本当にありがとうございました。

今作は自分の処女作です。今までも作品を書きたいと思いつつも
構想で終わってしまったり途中までしか書けなかったりしました。

次回作も一応構想はありますが、いつこのサイトに掲載できるか
はまだ分っていません。少しずつ書いていきたいと思っています。

もしよろしければ今作の感想をお聞かせください。

それではまた次回作でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7913o/>

ラブ※コメ

2010年11月20日22時10分発行